静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告　第225集

庵　原　城　跡

第二東名 NO.66 地点

第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

静岡市－4

2010

中日本高速道路株式会社東京支社

財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告　第225集

庵　原　城　跡

第二東名 NO.66 地点

第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

静岡市－４

２０１０

中日本高速道路株式会社東京支社
財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所

１．庵原城跡周辺（東より）

２．曲輪16～18、堀切１・２（北西より）

巻頭図版２

１．曲輪６・10、竪堀３（北西より）

２．曲輪３、虎口（西より）

１．庵原城跡調査区全景（合成写真）

巻頭図版４

１．庵原城跡出土古瀬戸製品

２．庵原城跡出土輸入陶磁器

序

私達の郷土、静岡県は日本列島のほぼ中央部付近にある。富士山と太平洋に面し、駿河湾沖を流れる黒潮により魚介類も豊富である。温暖な気候で草木のみならず、私たちを心安らかに育む土壌がここにあるといえる。今から遡る約400年前、静岡県の地域は、西から遠江国・駿河国・伊豆国の３つの地域に分かれ、かつ徳川氏・今川氏・北条氏・武田氏等の戦国大名達の勇躍の場でもあった。

南北朝時代、今川氏が守護職として駿河国に最初の一歩を残し、その今川氏が勢力を拡大し、遠江国・三河国へ勢力を伸張した時代、今川氏一族内の内訌を経て、伊勢新九郎（北条早雲）が伊豆国堀越公方（足利茶々丸）を襲撃し、伊豆国を吸収し、相模国大森氏・三浦氏を駆逐した時代、そして尾張国桶挟間の合戦以降、今川氏勢力が後退し、武田氏の侵攻を受けた時代、そして最終的に武田氏を駆逐するために織田氏・徳川氏により蹂躙された時代、ついには天下統一を成し遂げた豊臣氏により、伊豆国・相模国等の北条氏領地が侵攻を受けた時代、様々な歴史の舞台が私たちの郷土で行われていた。

今回の調査の舞台であるこの庵原の地はかつて廬原（いほはら・いおはら）とも呼ばれ、庵原氏由縁の地である。かつて西暦663年に朝鮮半島にあった古代国家「百済国」救援のために組織された水軍は廬原氏が指揮したとされる。この古代豪族の廬原氏は早い時期から都に出仕し、出土木簡にもその名を見出すことができる。また鎌倉時代には梶原景時追討にも他の駿河国土豪達と参加し、やがて庵原氏は有力国人領主として今川氏内訌の際にも登場し、やがて有力家臣として今川氏の柱石を担うことになっている。古代豪族出身の廬原氏と戦国時代に活躍した庵原氏との血縁関係は未だに不分明であるが、いずれにせよ庵原の地は歴史の華々しい舞台である静岡でも、看過できない地域でもある。

かような歴史的背景を持つ庵原地区において、国内経済発展の基となす新東名と東名を結ぶルートが新設されることとなった。そのルート上に庵原氏の所縁の城跡と推定される庵原城が位置し、調査の結果、大規模な堀切を構える堅固な山城の構造を確認し、15世紀代の遺物を多く確認することが出来た。遺物の中には信楽産の茶壺や志戸呂の香炉等、臨戦体制の城砦内において風雅なひと時を過ごしたことを想起させる遺物が確認された。

今回の現地調査並びに資料整理にあたっては、中日本高速道路株式会社東京支社、静岡県教育委員会、静岡市教育委員会等の関係各位に、多大な御理解と御協力を賜った。また地元の庵原地区の皆様には御声援を頂いた。文末であるがここに記して感謝の意を示すとともに、現地作業・整理作業に携わった作業員諸氏の労をねぎらいたいと思う。

平成22年７月

財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所
所　長　石　田　　彰

例　言

1　本書は静岡県静岡市清水区草ヶ谷（くさがや）に所在する庵原城跡（いはらじょうあと）の発掘調査報告書である。

2　第二東名建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書の作成は地区（市町）毎単位にて実施している。「第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　静岡市－４」としているが、旧清水市地区では本書が唯一の報告書である。

3　当該調査は第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査等業務として、中日本高速道路株式会社（平成17年度途中までは日本道路公団）の委託を受け、静岡県教育委員会の指導のもと、静岡市教育委員会（旧清水市教育委員会）の協力を得て、財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が実施した。

4　現地調査・資料整理の期間と担当者は以下の通りである。なお調査体制については別記した。

平成12年８月～９月	確認調査	井鍋誉之
平成17年12月～平成18年３月	本調査Ⅰ期	河合　修・大塲隆幸
平成18年４月～平成18年10月	本調査Ⅰ期他	河合　修・大塲隆幸・田中弘幸・北野寿一
平成18年11月～平成19年３月	本調査Ⅱ期	河合　修・大塲隆幸・田中弘幸・北野寿一
平成19年４月～８月	本調査Ⅲ期	後藤英和・北野寿一
平成21年７月～11月	本調査Ⅳ期	勝又直人
平成21年11月～平成22年３月	資料整理	勝又直人
平成22年４月～平成22年７月	資料整理・報告書刊行	井鍋誉之

5　本書の執筆は、北野寿一・勝又直人・井鍋誉之が行い、編集は井鍋誉之が行った。

6　調査における指導・助言・協力者は下記の通りである。

小野正敏（国立歴史民俗博物館副館長）：貿易陶磁器
藤澤良祐（愛知学院大学文学部教授）　：中世陶磁器（瀬戸）
中野晴久（常滑市民俗資料館）　：中世陶磁器（常滑）
堀内秀樹（東京大学埋蔵文化財調査室）：近世陶磁器

7　現地調査状況写真については調査担当が撮影し、現地の空中写真については㈱フジヤマが撮影した。

8　本書に掲載した遺物写真は全て杉山すず代（当研究所写真室）が撮影した。

9　金属製遺物のクリーニング・保存処理は西尾太加二・大森信宏（当研究所保存処理室）が実施した。

10　調査の概要は、当研究所の出版物で一部公表されているが、内容において相違がある場合は本報告をもって訂正する。

11　本書の編集は財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所があたった。

12　発掘調査資料は全て静岡県教育委員会が保管している。

凡　例

1　土器・土層の色調は農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』を参考とした。

2　第３図庵原城跡周辺遺跡位置図は、国土地理院発行１：25,000地形図「興津」「清水」を加工・加筆して使用した。

目　次

序

例言・凡例

第１章　調査に至る経緯 …… 1

第１節　第二東名建設に伴う埋蔵文化財の取り扱いの経緯…… 1
第２節　調査体制…… 3

第２章　遺跡の位置と環境 …… 4

第１節　地理的環境…… 4
第２節　歴史的環境…… 6

第３章　調査の方法と経過 …… 12

第１節　現地調査の経過と方法……12
第２節　資料整理・報告書作成の経過と方法……15

第４章　調査成果 …… 16

第１節　概　　要……16
第２節　検出遺構……18
第３節　出土遺物……48

第５章　まとめ…… 55

第１節　遺構と遺物……55
第２節　庵原氏の動向……58

写真図版

抄　　録

写真図版目次

巻頭図版１　１．庵原城跡周辺
　　２．曲輪16～18、堀切１・２
巻頭図版２　１．曲輪６・10、竪堀３
　　２．曲輪３、虎口
巻頭図版３　１．庵原城跡調査区全景
　　（合成写真）
巻頭図版４　１．庵原城跡出土古瀬戸製品
　　２．庵原城跡出土輸入陶磁器

図版１　１．庵原城跡全景①
　　２．庵原城跡全景②
図版２　１．庵原城跡全景③
　　２．庵原城跡全景④
図版３　１．庵原城跡全調査区（合成写真）
図版４　１．庵原城跡全景⑤
　　２．庵原城跡全景⑥
図版５　１．曲輪17～18、堀切２
　　２．曲輪16～18、堀切１①
図版６　１．曲輪16～18、堀切１②
　　２．曲輪16～18、堀切１③
図版７　１．曲輪18、堀切１①
　　２．曲輪18、堀切１②
図版８　１．曲輪17①
　　２．曲輪17②
図版９　１．堀切２①
　　２．堀切２②
　　３．堀切２土層
図版10　１．曲輪16①
　　２．曲輪16②
図版11　１．曲輪６・10、竪堀３①
　　２．曲輪６・10、竪堀３②
図版12　１．竪堀３
　　２．竪堀３土層
図版13　１．曲輪６
　　２．曲輪６・10
　　３．曲輪６検出柱穴列
　　４．曲輪６検出炭化柱根
図版14　１．曲輪５・８、竪堀１・２①
　　２．曲輪５・８、竪堀１・２②
図版15　１．曲輪５
　　２．曲輪５盛土除去後
図版16　１．曲輪８、竪堀２
　　２．曲輪８
図版17　１．竪堀１①
　　２．竪堀１②
　　３．竪堀１上端部
図版18　１．曲輪３・虎口①
　　２．曲輪３・虎口②
図版19　１．曲輪３・虎口③
　　２．曲輪３・虎口④
図版20　１．曲輪３土層
　　２．虎口付近土層
　　３．SF１・２
　　４．SF３・４、SP１
図版21　出土遺物①
図版22　出土遺物②

挿　図　目　次

第１図　静岡市清水区位置図……２
第２図　庵原城跡周辺地質図……５
第３図　庵原城跡周辺遺跡位置図……８
第４図　調査区設定図……14
第５図　庵原城跡復元鳥瞰図……17
第６図　庵原城跡概要図……17
第７図　調査区北半部実測図……19
第８図　曲輪16～18、堀切１・２平面図……20
第９図　堀切１北端土層図……21
第10図　曲輪17南部土層図……22
第11図　堀切２土層図……23・24
第12図　曲輪16土層図……25・26
第13図　曲輪16平面図……28
第14図　竪堀４実測図……29
第15図　竪堀３平面図……31
第16図　竪堀３土層図……32
第17図　曲輪６・10実測図……34
第18図　曲輪６平面図……35
第19図　曲輪６建物跡等実測図……36
第20図　曲輪５実測図(1)……37
第21図　曲輪５実測図(2)……38
第22図　調査区南半部実測図……39
第23図　曲輪３、虎口付近実測図……41
第24図　曲輪３、虎口付近土層図……42
第25図　虎口付近柱穴実測図……43
第26図　竪堀２実測図……44
第27図　竪堀１平面図……45
第28図　竪堀１土層図……46
第29図　出土土器実測図(1)……50
第30図　出土土器実測図(2)……51
第31図　出土石製品・金属製品実測図……53
第32図　庵原城　遺構配置図……56
第33図　永禄11年の武田軍侵攻……59

附　図　目　次

附図１　庵原城跡地形測量図
附図２　庵原城跡調査区全体図

挿　表　目　次

第１表　調査体制……３
第２表　周辺遺跡一覧表……９
第３表　調査工程表……12
第４表　出土土器　種別点数一覧表……48
第５表　出土古瀬戸・志戸呂製品
　　破片数集計表……48
第６表　出土土器（掲載分）一覧表……54
第７表　廬原氏・庵原氏関連年表（稿）……60

挿　写　真　目　次

写真１　重機稼働状況……13
写真２　作業風景……13
写真３　産業用モノレール稼働状況……13
写真４　高所作業車稼働状況……13
写真５　現地崩落状況……13
写真６　土器復原作業……15
写真７　図面整理作業……15
写真８　出土陶磁器指導……15
写真９　原稿執筆作業……15

第１章　調査に至る経緯

第１節　第二東名建設に伴う埋蔵文化財の取り扱いの経緯

混雑化する東名・名神高速道路の抜本的な対策として、昭和62年の道路審議会において第二東名・第二名神の建設が建議された。その後、第四次全国総合開発計画の閣議決定、国土開発幹線自動車道建設法の一部改正等を経て、平成元年１月に開催された第28回国土開発幹線自動車道建設審議会において、飛鳥村～神戸市間の第二名神とともに、横浜から東海市に至る延長約270㎞の第二東名高速道路の基本計画が策定された。静岡県内においては、東西に貫く形となり、その延長は約170㎞である。この基本計画を受けて静岡県は平成元年12月、第二東名建設推進庁内連絡会議を設置したが、静岡県教育委員会文化課もメンバーとして協議に参加した。

その後、第二東名の基本計画については、文化財を含む環境影響調査等が行われ、他の公共事業や地域開発計画との調整を図った上、平成３年９月24日には静岡県内長泉町～引佐町間の都市計画決定告示がなされた。

こうした環境影響調査と並行する形で、埋蔵文化財の分布状況の把握作業もなされている。第二東名建設に関する調査の指示を受けた日本道路公団は、平成４年２月17日付で文化庁へ通知を行うとともに、平成４年５月11日付で、日本道路公団東京第一建設局長から静岡県教育委員会教育長あてに、長泉町～引佐町間の埋蔵文化財分布調査、その手続きの依頼を行った。また平成４年８月27日付で日本道路公団東京第一建設局長から静岡県教育委員会教育長あてに、「第二東海自動車道の埋蔵文化財包蔵地の所在の有無について」の照会がなされている。これを受けて静岡県教育委員会は、平成４年９月29日に関係市町村教育委員会を集めて、第二東名路線内の埋蔵文化財踏査連絡会を開催するとともに、第二東名路線内における埋蔵文化財の所在についての照会を行った。踏査結果については、各市町村教育委員会からの回答を基に協議を行い、静岡県教育委員会が取りまとめたものを平成５年３月18日付で静岡県教育委員会教育長から日本道路公団東京第一建設局静岡調査事務所長あてに回答がなされている。この時点での調査対象箇所は136箇所、調査対象総面積が1,453,518㎡となっている。

その後、長泉町～引佐町間については、平成５年11月19日付で日本道路公団に施工命令が出された。これに伴い、日本道路公団東京第一建設局及び静岡県土木部高速道路建設課、静岡県教育委員会文化課で、埋蔵文化財調査の進め方について協議が行われた。調査対象範囲の確定、個々の遺跡の取り扱い等について協議されるとともに、発掘調査の実施については日本道路公団が財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所へ委託を行うことが確認されている。しかしながら、第二東名建設に伴う埋蔵文化財調査については、短期間に膨大な調査量が想定され、そのための調査体制をどのように確保していくかが、大きな課題となった。

さらに平成６年には、静岡県教育委員会文化課職員が上記の調査対象箇所について、具体的な調査を進めるための状況調査を行うとともに、前年に示されたパーキングエリア・サービスエリア予定地についての踏査を当該市町村教育委員会に依頼、年度末にはその報告・取りまとめがなされている。こうした状況調査やあらたな踏査結果を基に見直しがなされた結果、この段階での調査対象地点は133箇所、調査対象総面積は1,286,756㎡となっている。

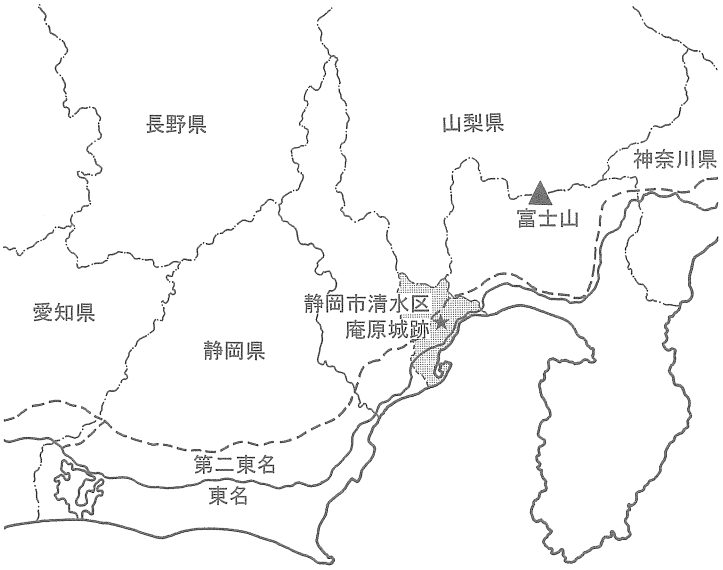
平成７年度後半には、路線の一部では幅杭の打設が開始されており、埋蔵文化財の調査の開始についてもかなり見通しができてきた。こうした状況の中で、第二東名建設に係る埋蔵文化財の取り扱いを協議する場として、日本道路公団静岡建設所（平成６年２月設置）と静岡県教育委員会文化課による「第

二東名関連埋蔵文化財連絡調整会議」が設置され、第１回の協議が平成７年12月13日に行われている。これ以降、埋蔵文化財の取り扱いについては、この会議において協議していくこととなった。なお、日本道路公団静岡建設所は平成８年７月１日をもって、日本道路公団静岡建設局に改組されている。

平成８年度には、第二東名建設に係る埋蔵文化財の調査の実施が具体化し、日本道路公団静岡建設局と静岡県教育委員会は平成８年９月24日付で第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財の取扱いについての確認書を締結、さらに調査実施機関である財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所を含めた三者は、平成８年９月25日付で第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査実施方法等について定めた協定書を締結し、平成８年度内に一部埋蔵文化財の調査に実施していくことになった。年度の後半には掛川市倉真のNO.94地点、浜北市大平のNO.136地点、同市四大地のNO.137地点の確認調査が実施されている。その後、平成９年度からは発掘調査も本格化し、県内各地の確認調査から順次着手した。一方、長泉町～御殿場間についても平成９年度１月31日付で建設に係る調査開始指示が出され、さらに平成９年12月25日付で施工命令が出されている。この区間については、建設省の依頼により平成６年度後半に踏査が行われ、調査対象地点のリストアップが行われていたが、調査開始指示を受けて、再度、平成10年９月２日付で日本道路公団静岡建設局長より静岡県教育委員会教育長あてに「埋蔵文化財包蔵地の所在の有無について」の照会がなされている。これを受けて、静岡県教育委員会文化課は関係する市町村教育委員会に平成10年９月25日付で再踏査の依頼をするとともに、10月２日には踏査結果についての報告がなされたが、静岡県教育委員会文化課はそれらをとりまとめ、平成10年12月17日付で静岡県教育長から日本道路公団静岡建設局長あての回答を行った。この区間で埋蔵文化財調査の対象となった箇所は21地点、調査対象総面積は108,738㎡であった。関係者協議の結果、これらの調査対象地点についても、財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が調査を実施することとし、平成11年度３月５日付で協定変更を行っている。

なお、第二東名に係る埋蔵文化財の調査は、関係者協議の結果、基本的には本線及びサービスエリア・パーキングエリア、排土処理場について財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が調査を実施、工事用の道路及び取付道路部分については当該市町村教育委員会が対応することとしたが、調査の進展に伴う調査量の増大に財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所の体制が追いつかず、本線の一部について、沼津市、静岡市、浜北市、富士宮市、裾野市、富士市の各教育委員会に対応してもらうとともに特に東部地域を中心に民間の発掘調査支援機関の導入を図った。

こうした経過の中で清水市域における第二東名建設に係る埋蔵文化財調査について庵原城跡のみが調査対象であった。



第１図　静岡市清水区位置図

第２節　調査体制

当研究所はかかる埋蔵文化財発掘調査にあたって、各工事事務所の管轄にあわせて工区を設定、調査を実施した。平成12年度には清水市域は清水工事事務所の管轄に含まれたが、清水市内での調査対象が庵原城跡のみであったため、富士工区の範疇に含めて調査を実施した。用地買収進展等の結果、本発掘調査は平成17年度から着手、Ⅰ期からⅣ期まで調査がなされた。資料整理は平成21年度Ⅳ期調査の終了後、実施した。下記の第１表は確認調査・本発掘調査・資料整理にかかる当研究所の体制をまとめたものである。平成12年度の確認調査の拠点は当研究所本部で、平成17～19年度、平成21年度の本発掘調査の際には、現地に事務所を開設し、調査を実施した。資料整理は中原整理事務所を拠点とした。

第１表　調査体制

		平成12年度	平成17年度	平成18年度	平成19年度	平成21年度	平成22年度
	所　長	斎藤　忠	斎藤　忠	斎藤　忠	斎藤　忠	天野　忍	石田　彰
	副所長	山下　晃					
	次長兼総務課長					松村　亨	松村　亨
	次長兼調査課長					及川　司	
	次長兼事業係長					稲葉　保幸	
	次長兼東部総括係長					中鉢　賢治	
	常務理事兼事務局長				清水　哲		
	常務理事兼総務部長	伊藤　友雄	平松　公夫	平松　公夫			
	事務局次長				佐野五十三		
					稲葉　保幸		
	事務局次長兼総務課長				大場　正夫		
	事務局次長兼調査課長				及川　司		
総務部・総務課	次長兼総務課長					松村　亨	
	事務局次長兼総務課長				大場　正夫		
	常務理事兼総務部長	伊藤　友雄	平松　公夫	平松　公夫			
	総務部次長兼総務課長		鈴木大二郎	鈴木大二郎			
	総務課長	杉木　俊雄					
	専門監						稲葉　保幸
	主幹兼経理専門員		稲葉　保幸				
	経理専門員	稲葉　保幸					
	総務係長	田中　雅代	佐藤美奈子	芦川美奈子	芦川美奈子	山内小百合	瀧　みやこ
	事業係長		野島　尚紀				
	会計係長	大橋　薫		杉山　和枝	杉山　和枝	杉山　和枝	
	主任		杉山　和枝				
	事業担当						中鉢　京子
	副主任	杉山　和江	中鉢　京子	中鉢　京子	中鉢　京子	丸杉　和代	丸杉　和代
		鈴木　秀幸	丸杉　和代	丸杉　和代	丸杉　和代		青井　拓司
	主事	中鉢　京子	望月　高史	望月　高史	望月　高史		
		丸杉　和代					
調査部・調査課	次長兼調査課長					及川　司	
	次長兼事業係長					稲葉　保幸	
	次長兼東部総括係長					中鉢　賢治	
	事務局次長兼調査課長				及川　司		
	調査研究部長	佐藤　達雄	石川　素久	石川　素久			
	調査研究部次長		栗野　克己	佐野五十三			
				稲葉　保幸			
	調査研究部次長兼調査課長			及川　司			
	調査研究部次長兼調査研究一課長	及川　司	中嶋　郁夫				
	調査課長						中鉢　賢治
	会計担当					中鉢　京子	
	中部調査係長			河合　修	河合　修	河合　修	
	調査第三係長						溝口　彰啓
	主任調査研究員	鈴木　良孝	河合　修				
				大場　隆幸			
	調査研究員	井鍋　誉之	大場　隆幸	田中　弘幸	後藤　英和	勝又　直人	井鍋　誉之
				北野　寿一	北野　寿一		
保存処理室	室　長	西尾太加二	西尾太加二	西尾太加二	西尾太加二	西尾太加二	西尾太加二
	調査研究員				大森　信宏	大森　信宏	大森　信宏

第２章　遺跡の位置と環境

第１節　地理的環境

静岡市東部地区（清水区）は静岡県の中央部に位置し、北は山梨県、東は富士市・富士宮市、西は静岡市西部（静岡市葵区・駿河区）を行政界とし、南側は駿河湾に面している。赤石山脈の最南端部にあたる庵原山地が駿河湾に迫り、その東側の興津川が形成した狭小な扇状地からなる興津地区を他地区と隔てる形となっている。この山地はフォッサマグナの南部にあたり、その地質構造により南北方向に断層が通っている。また、この山地を構成する地層のほとんどが新第三系の砂岩とシルト岩の互層が極めて厚く堆積したもので、褶曲するとともに南北方向のいくつかの断層で截られ、複雑な層序と構造を呈したものになっている。西から古第三系の瀬戸川層群、アルカリ火山岩類の多い竜爪層群、広範囲に広がる静岡層群、砂岩シルト互層からなる和田島層群、砂岩および礫岩の多い清見寺層群、その北側に位置する小河内層群と呼ばれ、それぞれ互いに衝上断層で接している。この丘陵部の南には巴川の三角州の発達により形成された清水平野が広がり、巴川が源流部から平野部に流れ出た付近で、安倍川の扇状地からなる静岡平野に接し、静岡県中部地区最大の平野である静清平野を構成している。この静清平野の南端には、中央部を狭めるように盛り上がる有渡丘陵がある。日本平で知られるこの小丘陵と、安倍川が運んだ砂礫を駿河湾の強い沿浜流が運搬して発達した砂嘴である三保半島は、県内はもとより全国から多くの観光客を集めている。

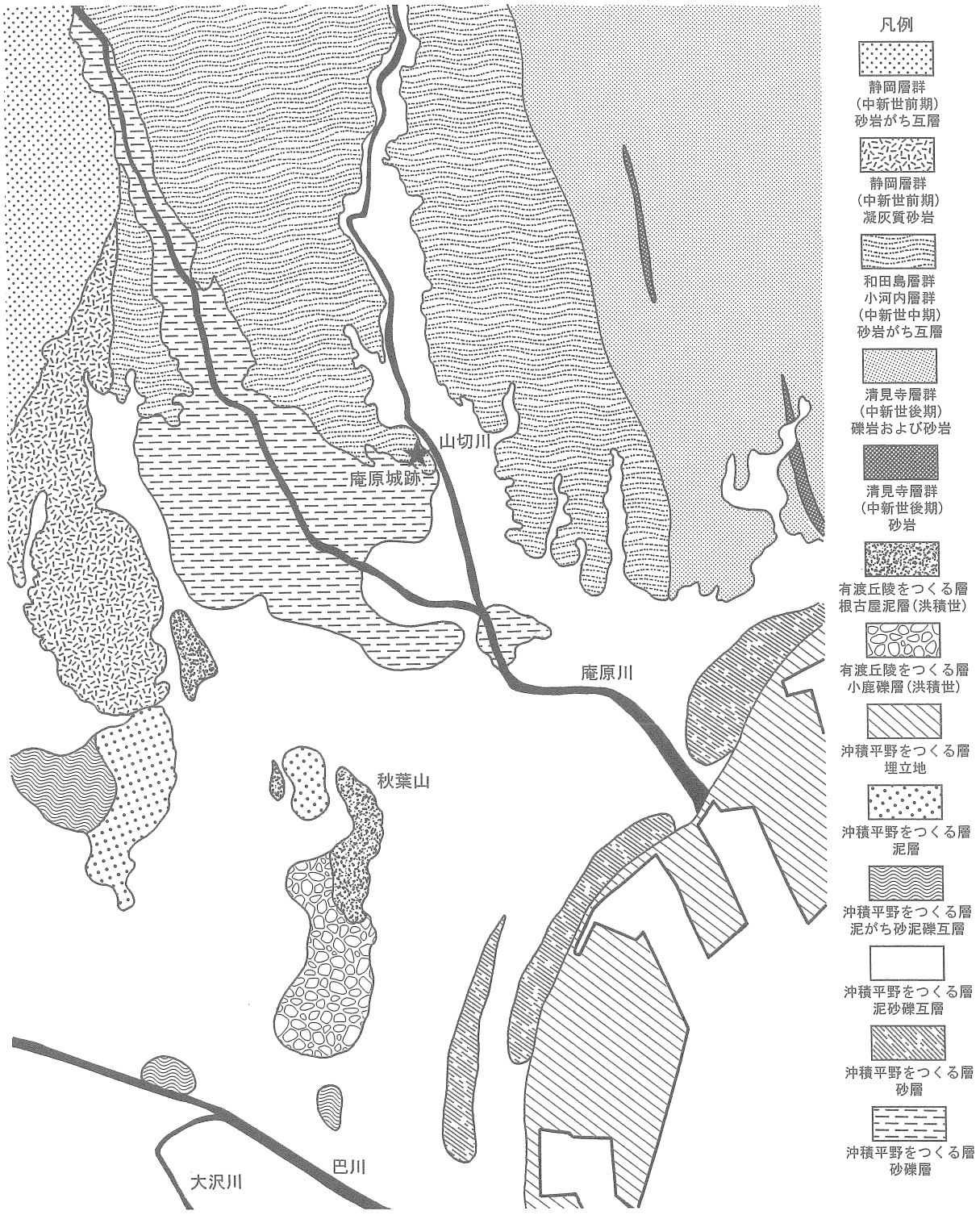
上記の静岡平野・清水平野は更新世末の海面低下により形成された谷地形が、河川の堆積物により埋没したものである。しかし、静岡平野が主に安倍川の扇状地として、清水平野の大部分は巴川の三角州の発達によりできあがったとされ、両者は生成要因の違いがある。

この巴川の源流は、麻機低地の北東部、賤機丘陵と麻機丘陵に挟まれた沢および、麻機丘陵と瀬名丘陵に挟まれた沢に求められる。その沢を南流したのち、北側から麻機丘陵・瀬名丘陵を開析する長尾川・塩田川と、南側からは有度丘陵を開析する大慈悲院川・吉田川と合流しながら東流する。麻機低地の標高は７ｍ前後、その出口から５㎞程度下流へ行った能島砂堆付近では２ｍ前後を測る。このような緩やかな傾斜をもった巴川は、各所に自然堤防を形成しながら折戸湾へ注いでいる。

件の麻機低地の中央部の泥質層は、地表から25ｍほどまでは海成シルト層、その下から泥砂礫互層があらわれ、地表から約60ｍで新第三系の基盤に達する。この泥質層は海棲貝類の化石を含んでいることから海岸線が浅畑地区付近まで入り込んでいた可能性が高い。この時期はおそらく縄文海進のころと推定される。巴川下流域の泥質堆積物は厚いところでは30ｍ以上あり、その中から海棲貝類の化石が混じる。よって完新世には「古折戸湾」と呼べる大きな入り江が存在していたことが推定されている。

庵原城跡が位置する清水区草ヶ谷周辺の地は、和田島層群の砂岩の互層が主体となった丘陵、庵原川により形成された砂礫層主体の扇状地、山切川が形成した泥砂礫互層主体の沖積地に区分され、重層的な地形の成因が絡み合う地質構造を呈している（第２図）。今回調査を実施した庵原城跡は庵原山地から南～南東方向へ派生した丘陵先端部に位置し、城の南西には高部山とも呼ばれている当該丘陵に派生した低平な小丘陵がある。一帯の丘陵は、既に述べている堆積岩に分類される砂岩とシルト岩が交互に堆積した新第三系の地層である。この和田島層群は、西側を田代峠衝上断層で静岡層群との境となし、東側は中河内衝上断層で、清見寺層群との境となしている。この和田島層群は他の層群同様、褶曲構造を持ち、庵原城跡の丘陵の地層は西側に傾斜した傾斜を示しているが、山切川以東では東へ傾斜するなど、複雑な構造となっている。現に調査を実施した箇所には、西側へ傾斜した砂岩層を観察できる面が存在

した。この丘陵の西側には扇状地を形成した庵原川、東側を庵原川の支流である山切川に挟まれている。東側の山切川により開析された谷部には、比較的平坦な土地が上流部まで続き、山切・杉山・吉原の集落が展開している。そのうち吉原から興津川上流部には和田島の集落までほど近く、興津川や興津川支流のうちのひとつである中河内川沿いに上ると、甲斐国と駿河国との境となる徳間峠、樽峠に行き着く。庵原川は庵原地区で最も大きい河川で、庵原町・尾羽・袖師町を経て海に注ぐ、庵原川の上流部には伊佐布の集落が展開し、ここからは山切川上流部の吉原地区に近く。甲斐国へのルートでもある。



第２図　庵原城跡周辺地質図

第２節　歴史的環境

今回調査対象となった庵原城跡が位置している清水区の所謂「庵原地区」には、旧石器時代からの遺跡が点在している。第３図と第２表は庵原城周辺の遺跡を示したものである。

旧石器時代の遺物が確認されているのは、ナイフ形石器が表面採集されている大乗寺遺跡(20)があげられる。次の縄文時代の遺物の出土が確認されるのは、庵原地区を中心とした区域の中では、於凌平遺跡(16)・大乗寺遺跡(20)・原平遺跡(21)・高部山遺跡(24)等があげられる。草創期・早期に位置づけられる資料群は、現時点では判然としないものの、庵原城跡の南に位置する大乗寺遺跡においては、昭和38年（1963）の静岡大学考古学研究室の実施した調査により、諸磯b式を主体とした縄文時代前期後半の土器の存在が確認された。当該遺跡では、他にも諸磯c式や関西系の北白川下層式土器が少量確認されているという。また、これら大乗寺遺跡・原平遺跡が位置する原平丘陵の南南西約80m、細長く狭長な独立丘陵「高部山」上に位置する高部山遺跡(24)では、清水市域でも珍しい縄文時代中期初頭に位置づけられる東海系の北屋敷式土器が確認されている。斜面地開墾時に縄文土器が大量に出土したことが契機となり、昭和35年（1960）に旧庵原村教育委員会が調査を実施、縄文時代前期～中期の土器が出土している。また、定角式磨製石斧・乳棒状石斧各１点出土した他に、打製石斧が約50点出土したという。縄文時代後期の良好な資料については、周辺で未だ判然としないものの、大乗寺遺跡から南へ約７㎞の位置に、清水天王山遺跡が存在する。当該遺跡は有度山北東の麓、小沢川により形成された扇状地上に位置し、昭和26年（1951）和島誠一等日本考古学協会縄文編年研究特別委員会により調査が実施されている。縄文時代晩期前半頃の住居跡や堅果植物種子貯蔵ピットが確認されている。なお、出土土器は縄文時代後期後葉～縄文時代晩期前半が中心で、縄文時代晩期前半初頭の土器は「清水天王山式」と呼ばれ、標識遺跡となっていることを補足しておく。このほか、縄文時代晩期にあたる水神平土器が大乗寺遺跡でも確認されており、縄文時代を通じて庵原地区に人々の生活が継続して営まれていたのである。

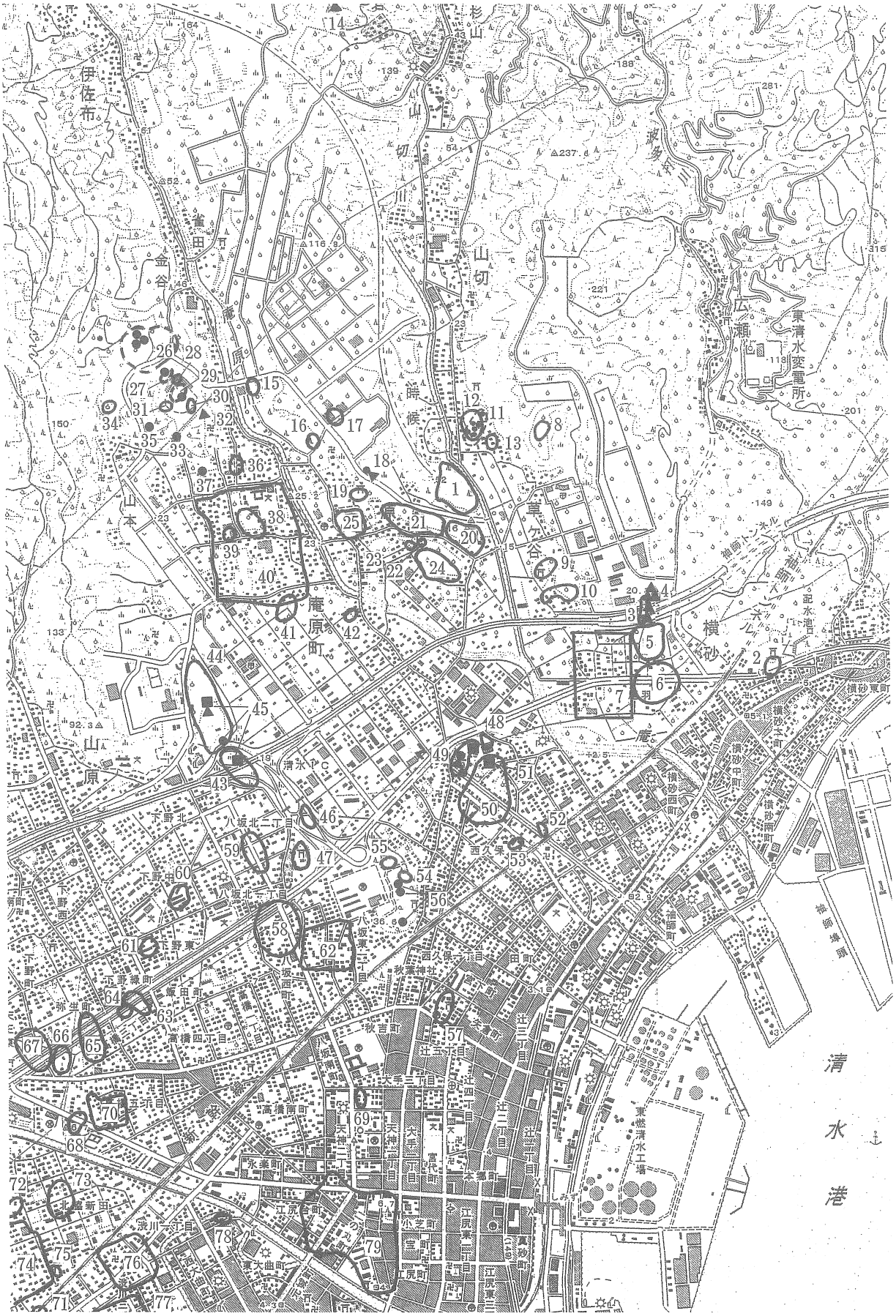
弥生時代の遺跡で、庵原地区においては原平遺跡(21)・宮平Ⅰ遺跡(12)等が挙げられる。原平遺跡では、弥生時代後期中葉段階の壺・甕・高坏等が約100個体分出土したとされ、当該地域における大規模な集落が存在したのは確実である。この大規模な集落の出現こそ安定した農耕と収穫に裏付けられたものであろう。庵原地区周辺部では先述した清水天王山遺跡において、弥生時代の古い段階（第Ⅱ様式）の条痕調整された壺・甕の破片が少量出土している。なお、同時期に比定される麻生田大橋遺跡（愛知県豊川市）の土器棺墓で、北九州地域に由来する遠賀川系土器との共伴が確認されている。また、庵原城跡から南西へ約５㎞、巴川流域に位置する原添Ⅲ遺跡(71)では弥生時代中期中葉、関東地方での須和田式並行の土器が出土しており、標識遺跡となっている。さらに殿屋敷遺跡(68)でも当該時期の土器群の出土が伝えられている。そして、古代の折戸湾沿いに形成された自然浜堤上に位置するのが、能島遺跡である。庵原城跡から南西へ約４㎞の位置にあり、弥生時代中期後半代の周溝の四隅が切れるタイプの周溝墓が約20基以上確認されている。飯田遺跡(66・67)は、庵原山地から南流する山原川の扇状地上に位置する。昭和24年（1949）に登呂遺跡周辺遺跡の調査にかかり、杉原荘介（明治大学）らが発掘調査を実施した。静岡市駿河区登呂遺跡の報告の際、杉原荘介は当該地域の弥生土器編年の中に丸子・原添・有東・登呂・飯田・曲金と段階を設定し、その後の弥生土器研究の基になったのは周知の通りで、その中に周辺遺跡である原添・飯田の２遺跡が含まれていることは看過できない。

古墳時代では三池平古墳(18)・午王堂山古墳群(45)・神明山古墳群(51)・塔作古墳群(29)等、古代の「廬原國」（イオハラ国）を想起させる古墳が点在する。『先代旧事本紀』にその存在を記載された廬原國は、これまでの研究により当該地域を含み、安倍川以東、富士川以西がその領域として考えられている。

廬原國を治めたのは廬原君（いほはらのきみ・いおはらのきみ）の一族とされている。件の廬原國の存在を想起せしめた考古学的成果は、庵原城跡から西の方向、原地区砥鹿神社裏に位置する三池平古墳(18)である。かつては蜜柑畑として利用されていたところを、土地所有者が掘削したところ竪穴式石室の一部を掘り当てたことを契機とする。後藤守一・大塚初重（以上、明治大学）、内藤晃（静岡大学）等の手で、発掘調査が実施された。墳丘は前方後円墳、竪穴式石室の中から刳抜形式の割竹形石棺が出土し、石室内から方格規矩四神鏡（ほうかくきくししんきょう）・四獣文鏡・碧玉製紡錘車形石製品・帆立貝形石製品・筒型銅器・鉄製農工具・武器類、墳丘から壺型埴輪が出土している。これまでの研究で古墳の造営年代は４世紀末～５世紀初頭と考えられている。また、庵原地域に見られる古墳で最古のものと考えられているのが、午王堂山古墳群(45)の中の午王堂山３号墳である。この古墳は前方後方墳で市原壽文（静岡大学）により発掘調査が行われた。主体部の粘土槨から三角縁四神四獣鏡が出土している。庵原川下流域に展開する庵原古墳群最初の被葬者とも推定されている。

斯く謂う、この廬原国は大化の改新以降、富士川（富士市）～境川（清水町・三島市）と大井川（島田市）から高草山（焼津市）の珠流河国（スルガ国）が合併し、駿河国として整備されたとの説もある。天武９年（680）に伊豆国が駿河国から分立されたため、現在の駿河国の姿となったのは７世紀後葉の頃とされ、この頃には廬原が指し示す地名は廬原郡として残ることになる。廬原郡の郡衙として推定されているのが尾羽廃寺跡(７)東側一帯で、近年の調査で、柱根が残存する掘立柱建物跡が検出されており、郡衙関連とも目されている。本来は尾羽廃寺付近に廬原國の中枢部が存在したとも推定され、当該寺院を継承する寺院が、大庁（国衙の意）寺であり、大庁から大乗に変化し、現在の臨済宗高部山大乗寺へ法灯を受け継いだという説がある。尾羽廃寺では八葉複弁蓮華紋軒丸瓦と重弧文軒丸瓦が出土、奈良県明日香村にある川原寺と同じタイプの瓦を使用していたことが判明している。また、この瓦を焼成した瓦窯が東山田古窯跡群(４)である。発掘調査の後、第３号窯については静岡市埋蔵文化財センターにおいて剥ぎ取り保存がなされたその長大な窯跡を観察することが可能である。

鎌倉時代に至り、駿河国の守護職の初代は武田信義が務めるが、北条時政以降は北条一門が守護職を務めることになる。この駿河国各地には、御家人に係る館跡が多く散在する。静岡市清水区付近では、平安時代後期に藤原維清が土着、入江氏と称してから、吉川（吉香）氏・渋川（渋河）氏・息津氏・船越氏等の支族に分かれ、武士団化した経緯がある。入江氏等に係ると推定される吉川館跡・北入江館・東入江館・西入江館等が巴川以南で散見される。入江氏等の拠点は津や巴川の自然堤防上、中世東海道沿いに位置し、交通路の掌握がなされたことを想起させる。また、高橋氏の高橋館跡(70)、飯田氏の飯田館跡(62)等があるが、これらの館跡は伝承・地名等により存在が推定せられているのみである。しかし、館跡で遺構が明瞭に残っていたのは、渋川館(76)・吉川館である。戦前の研究で、前者は１辺約200m、土塁・濠を有した単堀単郭式館、後者は約240m×約120m、土塁・濠を有した単堀単郭式館として推定されている。なお、件の吉川館に住していたとされる吉川氏は、入江氏の一支流である。『吾妻鏡』巻十六 正治２年（1200）正月廿日条によれば、鎌倉から上洛途中の梶原景時等を駿河国清見関～狐崎の地で、廬原氏をはじめ飯田氏・吉香氏・渋河氏・矢部氏等駿河国人衆が交戦、梶原景時等を討ち果たしている。この功により、参戦していた吉香小次郎は、播磨国福井庄（現在の兵庫県姫路市付近）の地頭に任ぜられている。この吉川氏の流れは後年、岩国藩吉川氏に繋がるとされる。庵原城跡の西方に位置する庵原館跡(40)については、庵原氏の館跡として推定されている。遺構等は全く存在しないようであり、辛うじて御屋敷・小屋敷・成街道・下町屋等の小字名と伝承により、存在が推定されている。これらとは別に発掘調査により得られた成果として、大田切Ⅰ遺跡(58)が挙げられる。国道１号線バイパス建設に伴い、清水市教育委員会により発掘調査がなされた当該遺跡からは、総柱建物跡・区画溝・井戸跡が検出された。出土遺物は12世紀後葉～13世紀前半の龍泉窯系青磁碗・白磁四耳壺・白磁袋物等・渥



第３図　庵原城跡周辺遺跡位置図

第２表　周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	時代	種類	番号	遺跡名	時代	種類
1	庵原城跡	鎌倉	山城	41	小里前遺跡	弥生・古墳	包含地
2	盧崎遺跡	平安	包含地	42	下川原遺跡	古墳	包含地
3	東山田遺跡	縄文～古墳	包含地	43	午王堂山Ⅰ遺跡	縄文～平安	集落跡
4	東山田古窯跡群		窯(瓦)	44	午王堂山Ⅱ遺跡	旧石器～弥生・古墳	散布地
5	尾羽西山遺跡	古墳	散布地	45	午王堂山古墳群	古墳	古墳
6	山ノ鼻遺跡	弥生～古墳	包含地	46	船山遺跡	弥生	包含地
7	尾羽廃寺跡	白鳳期	寺院	47	山ノ根遺跡	弥生	包含地
8	夕日請無砦跡	中世	山城	48	神明遺跡	弥生～奈良	集落跡
9	若宮遺跡	縄文	散布地	49	上嶺遺跡	縄文～平安	集落跡
10	上平遺跡	縄文	散布地	50	大屋敷遺跡	縄文・古墳	散布地
11	東久佐奈岐古墳群	古墳	古墳	51	神明山古墳群	古墳	古墳
12	宮平Ⅰ遺跡	弥生・古墳	包含地	52	深田遺跡	古墳	散布地
13	宮平Ⅱ遺跡	弥生・古墳	包含地	53	嶺遺跡	古墳	散布地
14	杉山経塚	鎌倉	経塚	54	秋葉山窯跡群	古墳	窯(須恵器)
15	善念寺平遺跡	縄文	散布地	55	秋葉山遺跡	江戸	建物
16	於凌平遺跡	縄文・古墳	散布地	56	秋葉山古墳群	古墳	古墳
17	調練場遺跡	古墳	散布地	57	矢倉遺跡	古墳	散布地
18	三池平古墳	古墳	古墳	58	大田切Ⅰ遺跡	縄文～鎌倉	包含地
19	三池遺跡	古墳	散布地	59	大田切Ⅱ遺跡	弥生～古墳	包含地
20	大乗寺遺跡	旧石器・縄文・古墳・中世	集落跡	60	大坪遺跡	弥生	散布地
21	原平遺跡	縄文・弥生・古墳	包含地	61	角田遺跡	弥生	包含地
22	寺田遺跡	縄文・弥生・古墳	包含地	62	飯田館跡	鎌倉	館跡
23	足高遺跡	弥生	散布地	63	下野遺跡(Ａ地区)	弥生	包含地
24	高部山遺跡	縄文・弥生・古墳	散布地・包含地	64	下野遺跡(Ｂ地区)	縄文	包含地
25	大手前遺跡	古墳	包含地	65	下野遺跡(Ｃ地区)	弥生～古墳	包含地
26	薬師平古墳群	古墳	古墳	66	飯田遺跡(久保田地点)	弥生～鎌倉	包含地
27	丸山古墳群	古墳	古墳	67	飯田遺跡(向原地点)	弥生～古墳	散布地
28	塔作遺跡	縄文・中世・近世	集落跡	68	殿屋敷遺跡	弥生	散布地
29	塔作古墳群	古墳	古墳	69	一本松遺跡	古墳	散布地
30	寺ノ後遺跡	縄文	散布地	70	高橋館跡	平安～鎌倉	館跡
31	勝負釜遺跡	古墳	散布地	71	原添Ⅲ遺跡	弥生～古墳	包含地
32	寺山遺跡	平安	経塚	72	高木遺跡	弥生	散布地
33	寺山古墳群	古墳	古墳	73	風呂の段遺跡	弥生	包含地
34	浅間平遺跡	縄文	散布地	74	北脇館跡	戦国	館跡
35	新小路遺跡	近世	塚	75	北脇遺跡	古墳	散布地
36	上町屋遺跡	平安	散布地	76	渋川館跡	鎌倉	館跡
37	大門古墳	古墳	古墳	77	大門遺跡	中世	館跡
38	町屋遺跡	古墳	散布地	78	大曲遺跡	縄文・古墳	包含地
39	小屋敷遺跡	縄文	散布地	79	江尻城跡	戦国	平城
40	庵原館跡	平安末～室町	館跡	＊静岡市教育委員会『静岡市遺跡地名表』2006年より作成。			

美・湖西産山茶椀が出土しており、東側に近接する飯田館跡との関連が想起されている。なお、中世東海道は、清見関から庵原川を渡河、高橋館付近の高橋宿を経由し、旧庵原郡の西辺、長尾川手前の瀬無河宿（瀬名川宿）を経て、駿府に至るルートが想起されている。瀬無河宿関連と思しき遺構が瀬名川遺跡において県道中吉田瀬名線関連の発掘調査で確認されている。また、注目される該期の遺跡としては、他に杉山経塚(14)が挙げられる。この経塚は、土地所有者が神社跡を開墾中に発見せられ、銅製経筒・鉄刀・鉄鏃・和鏡が出土している。報告者は、修験者の関与を推定している。また、寺山遺跡(32)では市営野球場建設に伴う発掘調査において、12世紀後半～末の経筒外容器（蓋渥美産）、壺（常滑産）、鉄製鎌が出土し、経塚の跡と推定している。報告者は、遺跡が庵原氏所縁の庵原山一乗寺の裏手にあることから、経塚造営が庵原氏による可能性を指摘している。庵原城跡に隣接する大乗寺遺跡においては中世の墓が３基確認されている。骨、宋銭（嘉祐元寶・永楽通寶）、かわらけが出土している。

室町期以降、駿河国においては初代守護職石塔義房の後、今川範国が就任して以降、足利氏の一支流

である今川氏が代々の守護職を務めている。今川範国は遠江国守護職在任中の天文22年（1553）、美濃国青野ヶ原合戦での戦功により、駿河国守護職の兼任も命ぜられている。駿河国の守護職は範国の孫、三代泰範が継承する。二代範氏が早く他界したため、祖父範国が後見しながらであった。今川氏の所領は建武４年（1337）９月26日に足利尊氏により与えられた駿河国羽梨庄（現在の静岡県藤枝市葉梨付近）が嚆矢である。範氏の代に駿府に移るまでの今川氏の館は葉梨付近と推定されている。

一方、庵原地域を領していた庵原氏を含めた国人衆の動きが顕著に顕れるのが、かかる今川氏一族内の内訌によるものである。今川一族内の内訌は３度数えられている。最初の内訌は、永享４～５年（1432～33）の内訌で、四代目範政の後継をめぐり次男弥五郎・三男千代秋丸（小鹿範頼）其々を推す国人衆の対立から、将軍足利義教が推す長子彦五郎（今川氏五代目の範忠）と千代秋丸派との合戦に発展した。庵原氏は千代秋丸側であったようで、狩野氏・興津氏・富士氏（富士浅間宮を統裁した富士大宮司家）等と共に彦五郎に対抗したようである。２度目の内訌、すなわち文明８年（1476）の内訌は遠江国の国人衆（横地氏・勝間田氏）の掃討戦で、六代目の今川義忠が戦死し、その後継を今川一門の小鹿範満（永享の内訌で敗れた千代秋丸こと小鹿範頼の子）・義忠の子息竜王丸（七代目氏親）其々を推す派閥に国内が分裂、伊勢新九郎（北条早雲）による調停が行われるが、長享元年（1487）11月９日に伊勢新九郎等が駿府館を襲撃し、小鹿範満が自害している。３度目の内訌は、天文５年（1536）の内訌である。天文３月17日に八代目の今川氏輝が弟彦五郎と駿府館で急死したことを発端とする。氏輝に嗣子が無いため、七代目氏親と福島（くしま）氏の息女の間に生まれ、出家していた玄広恵深と、氏親と中御門宣胤娘（寿桂尼）との間に生まれた梅岳承芳（九代目義元）、其々を推す派閥が争いを起こしている。駿河国羽梨庄（葉梨荘）の花倉城に拠る玄広恵深と彼を推す福島氏一族の反乱は「花蔵（花倉）の乱」と呼ばれ、甲斐国武田氏の介入がなされている。これら３度の今川一族内の内訌に国人領主であった庵原氏は、今川譜代の重臣としての役割を果たしていく。中でも軍事面での役割として記録に残るのは、永正13年（1516）の甲斐国出兵である。甲斐国守護職武田信虎と国人領主大井氏の対立が激化し、内乱が勃発。大井氏からの要請を今川氏親が受け、庵原氏は葛山氏・福島氏らと共に動員され、甲斐国へ侵攻している。万力（山梨県山梨市付近）の合戦で今川軍は武田軍を駆逐、甲斐国における今川軍の橋頭保として勝山城（山梨県甲府市）を拠点としている。

また、今川氏内部における庵原氏の活躍として看過してはならない存在が、臨済宗僧侶で今川義元の師であり、軍師・宰相の役割も務めた庵原氏出身の太源崇孚雪斎である。雪斎は庵原左衛門尉と興津氏娘との間に生まれ、天文の内訌直後の相模国北条氏の東駿河侵攻（河東一乱）、今川氏による三河国の属領化、今川・北条・武田三者の和議（善得寺の会盟）の斡旋を成し遂げた。宗教政策としては今川氏支配下の臨済宗寺院を本寺・末寺関係で掌握するなど辣腕をふるっている。また、雪斎は松平竹千代（松平元康。後の徳川家康）の養育係として、駿府で人質生活を送っていた竹千代に教育を施したとも言われ、隆盛を誇った今川氏の柱石と雪斎は東奔西走していたと言える。

その雪斎が弘治元年（1555）に死去し、その５年後、永禄３年（1560）に今川軍が尾張国に侵攻、桶狭間において織田軍の奇襲攻撃により今川義元は戦死し、敗走する今川軍を織田軍が追撃する中で多くの今川氏家臣が戦死した。その中に庵原一族の名前が散見される。義元戦死ののち今川十代目となった氏真の代になり、急速に今川氏の勢力は減退する。今川陣営であった松平元康（徳川家康）の離反により三河国が失陥。永禄11年（1568）12月に武田軍が駿河に侵攻した際、庵原安房守らが興津東辺の薩埵山に布陣するも、瀬名氏・朝比奈氏等が武田氏に内応、12月12日に庵原氏らは興津清見寺に本陣を構えていた氏真と共に駿府館へと退却している。なお、この後に庵原一族は武田氏や徳川氏、北条氏に仕えるものと一族は離散したものと考えられる。庵原氏退却の後、興津を占領した武田軍は12月13日高橋城(70)、北脇城(74)の攻略戦で損耗するものの、同日中に駿府に乱入している。武田氏による駿河国支配

の上で兵站・水軍の掌握が課題となり、現在の清水市街地には江尻城(79)、袋城が構築されている。両者とも永禄12年（1569）に築城されている。江尻城は巴川流路や河跡湖を堀として利用し、土塁を構築して防御としていたらしい。袋城は長崎出島のように海を埋め立てて築城されたらしい。両者とも遺構はほとんど見られない。調査対象となった庵原城は庵原館とともに、武田軍が占領することとなった。

武田軍の駿河国侵攻時に武田側に内応した今川家重臣の朝比奈駿河守信置（今川家臣時代は朝比奈右兵衛太夫）は、永禄12年（1569）正月10日に武田信玄により庵原氏の所領を与えられている。加えて信置は駿河先方衆筆頭の役割を与えられた。しかし、武田支配下の駿河国安寧は長く続かず、武田信玄が没して間もない天正元年（1573）には、早くも駿河国内で徳川軍と武田軍との交戦が開始、天正３年（1575）に三河国長篠にて武田軍は、織田・徳川連合軍と激戦の末、壊滅した。また、越後国の上杉謙信の後継を巡る内訌により、武田氏は上杉景勝を支持したため、関東を支配する北条氏との関係悪化、戦線の拡大により、武田軍は完全に守勢にまわっている。遠江国・駿河国では徳川軍との激しい戦闘が繰り広げられ、天正３年８月には遠江国東端で、大井川と駿河国を望む諏訪原城（島田市）を徳川軍が占領。また、激しい攻囲戦の末、天正９年（1581）の高天神城（掛川市）が陥落し、遠江国はほぼ徳川軍の手中に落ちている。やがて、遠江国東端の小山城（榛原郡吉田町）、駿河国内の田中城（藤枝市）、持船城（静岡市）等、次々と武田側の拠点が陥落し、駿河国の戦線は崩壊していった。武田氏の支配下にあった信濃国は木曽路方向からは織田軍が侵攻し、武田信玄の子で武田勝頼の異母弟仁科盛信が守将であった高遠城（長野県高遠市）が落城、ついに天正10年（1582）３月11日、武田勝頼が甲斐国天目山で自害し、武田氏は滅亡した。最後の庵原城の主であった朝比奈信置は天正８年（1580)、武田水軍の拠点でもあり、駿府防衛ラインの重要拠点であった持船城に武田側の城番として入城していたが、天正10年２月23日に徳川軍の総攻撃を受け、29日に降伏した。信置は松平家忠に久能山城（静岡市）まで送られたが、領地の庵原に帰還、４月８日に駿河国を進軍してきた織田軍と交戦、庵原館で自害し、庵原館・庵原城は織田軍に占領されている。

件の庵原城跡は庵原氏の山城と考えられている。この庵原氏は古代豪族「廬原氏」との血統であるのかは判然せず、庵原氏でもいくつかの系統があったらしい。この城は諸文献によっては「庵原山城」、「高部城」とも呼称されているが、古文書・古記録中にはその名称は掲載されておらず、中世において如何なる名称で呼ばれていたのかは判然としない。この庵原城に関する記載は、駿國雑誌・駿河志料等江戸期の地誌類に散見されるが、具体的な築城年代も判然としない。現在、正式な名称は静岡県及び静岡市が周知の埋蔵文化財包蔵地として登録している「庵原山城跡（いはらやまじょうあと)」であるが、本報告では馴染みのある「庵原城跡（いはらじょうあと)」を使用し、事業名も「庵原城跡」を使用している。昭和54年（1979）刊行の『日本城郭大系』第九巻では築城時期を室町時代とし、昭和56年（1981）に静岡県教育委員会が編集・発行した『静岡県の中世城館』では「…築造年代は残存する遺構・その縄張りからみて、鎌倉時代と推定される…」とする。いずれも発掘調査に基づいた推論ではなく、現地踏査のうえでの推論にとどまり、この城の構造として『中世城館』は「単郭式」としている。この庵原城跡が位置する丘陵は、現在の静岡・清水市街が位置する平野を一望のもと眺めることができる。城がある庵原地区は静清平野の東端部にあり、以東は興津清見寺が要となり、甲斐国方面や駿河国東半・伊豆国・相模国方面へ交通路が収束している。また、平野であるため庵原城から西を望めば、駿府守護所方面、安倍川西岸の狼煙場や、南には江尻湊（清水港）が一望出来る。しかし、この庵原城跡は興津・由比・蒲原方面への遠望はあまり芳しくない。過去、清水市教育委員会は庵原城跡を取り巻く上平砦跡と夕日請無砦跡(８)の調査を実施し、後者では建物跡を１棟検出、共に単郭式の砦跡と報告している。加えて夕日請無砦跡は庵原城跡よりも高所にあり、庵原城を越えて西・南を見渡すことが出来ることから、城と砦の連携に基づいた臨戦体制が整備されていた可能性を清水市教育委員会は指摘している。

第３章　調査の方法と経過

第１節　現地調査の経過と方法

前節で述べたように庵原城跡は北東山塊から派生したやや峻厳な斜面地を有する丘陵を活用した山城の跡で、現在は蜜柑や柿等の果実畑として利用されてきた。静岡県内の里に近い山城跡では通有の土地利用現象である。これらの畑を開墾する際に直線的な斜面地をあたかも帯曲輪のごとく開削する現象もあり、城の遺構なのか開墾の結果の所産物なのか判然としない例が多く、誤った判断を下す恐れが多分に存在していた。庵原城跡は急峻な斜面を有する丘陵に位置しており、かつて畑として利用した箇所にも藪が生い茂り、踏査状況や地形の視認でさえ極めて困難であった。平成４年に第二東名建設予定箇所の踏査の際には、この庵原城は本調査を必要が認められた。平成11年に埋文研担当者と城郭研究者とが合同で事前に現地を踏査し、山城施設（縄張り）の状況及び確認調査個所の仕分け、掘削方法の検討を行った。その結果、周知の遺跡範囲外に山城の遺構が広がり調査の必要性が湧出したため、静岡県教育委員会は日本道路公団静岡建設局長宛てに平成11年11月８日付け教文第11－78号「第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査対象範囲変更通知書」により調査対象面積を12,850㎡追加した。

平成12年度は山城北東部に確認トレンチを設定、掘削を実施している。平場を中心にトレンチを設定し、人力を中心とした掘削を行った。その確認調査の結果、山城の施設の存在は認められなかったため、本調査対象から当該地区を除外している。

第３表　調査工程表

	平成12年度
確認調査	8月　9月

	平成17年度	平成18年度	平成19年度	平成20年度	平成21年度
Ⅰ期 本調査 確認調査	9月　12月	10月			
Ⅱ期 本調査		11月　3月			
Ⅲ期 本調査			4月　8月		
Ⅳ期 本調査					7月　10月

＊Ⅰ期確認調査は平成18年10月に実施。

	平成21年度	平成22年度
Ⅳ期 資料整理	11月	7月

平成17年度になり、建設予定地の買収の動きに応じて、文化財側も現地調査着手へと動いた。９月に実施した文化財側の現地踏査を受けて、12月から調査が着手された（本調査Ⅰ期）。まず、城跡が位置する丘陵全体の現況地形の空中写真撮影を実施した。また、丘陵全体の地形測量も実施している。この測量成果は当該報告書の附図という形で紹介する。測量後に調査対象区域内の竹林抜開を平成18年１月13日から着手した。なお、現地は発掘調査によって排出される土が多量に及ぶことが想定されたため、竹林抜開が終了した後、２月８日より排土用進入路造成を開始している。本調査Ⅰ期は曲輪16・17・18、堀切１付近、すなわち、庵原城跡の北西部を調査対象としたものである。現地は作業員を投入して堀切１付近にまずトレンチを設定、掘削を行い、自然の谷地形を上手に堀切として利用した様を確認した。また曲輪17は蜜柑植樹による撹乱を受けていたものの、築城時の土塁の痕跡を確認した。また、平成18年度に入り、本調査Ⅰ期は継続して実施している。重機（バックホー）による掘削、クローラーダンプ、カニクレーンの稼働により、調査を円滑に進めている。また、人力掘削には併せてベルトコンベアを使用し、掘削土の速やかな排出を行っている。検出された遺構は測量委託を行い、図化を行った。現地の遺構写真は調査担当者が６×７カメラを用いて、カラー・白黒フィルムにより撮影しており、被写体の状況によってはハイライダー（高所作業車：写真４）を用いている。

この本調査Ⅰ期と並行して、庵原城跡にかかる路線範囲において、９月から確認調査を実施した。調査方法はトレンチを設定し、人力で掘削するものである。トレンチは15本設定している。その結果、庵原城跡北西端部の裾部トレンチ以外の個所を調査対象とした。

平成18年11月からは前述の確認調査結果をもとに、曲輪16南から曲輪６、曲輪５にかけての範囲を調査対象とした（本調査Ⅱ期）。Ⅰ期と同様、バックホー及びクローラーダンプ、ベルトコンベアを使用している。また、防塵の観点から、散水車を稼働させ、調査区内の高低差10m以上ある地点では、人力掘削で生じた土を、シューターを用いて速やかに移動さ

写真１　重機稼働状況

写真２　作業風景

写真３　産業用モノレール稼働状況

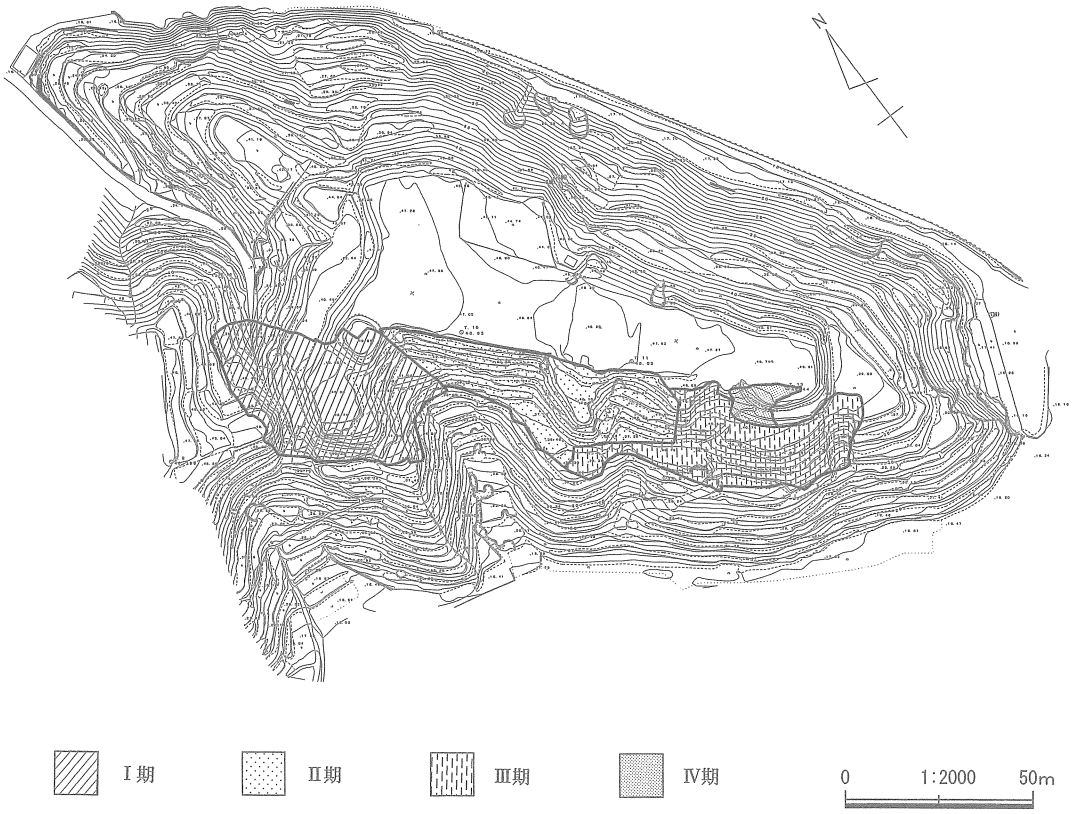
写真４　高所作業車稼働状況

写真５　現地崩落状況

せている。また現地での測量、遺構写真も本調査Ⅰ期と同様である。曲輪16と曲輪１の境界部からは堀切３が延び、付近には河原石の集積が見られた。曲輪６では柱穴が多数検出され、柵や建物等の施設の存在を想起させた。確認調査で既に確認されていたが、曲輪１・２境付近の堀切３の全容を検出しえたのもⅡ期調査によるものである。

平成19年４月から８月までの現地調査（本調査Ⅲ期）は曲輪５から曲輪７に到るまで、調査対象地区南半部の調査を実施した。調査方法はⅠ・Ⅱ期調査と大きな差異は無いが、急峻な斜面地の調査であり、調査区内では10m以上の高低差があるため、慎重な掘削作業を行っている。なお、７月14日には長雨と台風14号に伴う豪雨により、既に調査を終了していた箇所（本調査Ⅱ期）で法面崩落・倒木が発生している。NEXCO側との調整も行い、調査側は付近の復旧・土留め工を実施している。

庵原城跡における最終の現地調査は平成21年７月から実施した（本調査Ⅳ期）。この段階で、これまでの調査区は工事用道路（CR）、橋脚が造成・建設されており、Ⅳ期調査区の真下もすでに橋脚が完成し、橋桁の設置工が目前であった。このため当該発掘調査によって生じた土砂の搬出を、産業用モノレール（モノラック：写真３）を使用して場外搬出を計画、実施した。調査区はⅢ期調査区の東側、曲輪３の一部の調査となった。しかし、長梅雨により７月29日、調査区南半部が下り線橋脚際まで崩落した（写真５）。このため急遽、県教育委員会文化課とJV担当者との現地確認し、作業上の安全確保のため調査区約半分の面積を調査対象から除外した。掘削は従前のとおりで、バックホー掘削と人力掘削を併用している。ただし、バックホーの調査区内への搬入と搬出はクレーンを用いて行っている。Ⅳ期調査は10月末日をもって終了し、現地を撤収した。



第４図　調査区設定図

第２節　資料整理・報告書作成の経過と方法

資料整理・報告書作成にかかる作業は当研究所の施設である中原整理事務所（静岡市駿河区緑が丘町所在：静岡県教育委員会設置）で実施した。現地で得られるのは出土遺物及び現地の記録（図面・写真）がある。資料整理はこれらを精査していく作業でもあり、報告書は精査した各資料を総合的に検証した結果を掲載するものである。

出土遺物は洗浄の後、注記を行っている。次に出土遺物を素材、器種等により分類している。この段階で、石器や土器（かわらけ・陶器等）などに分類を加えて、遺構、ひいては山城の所属時期の推定に必要なものや、該期の特徴的な遺物等を抽出する。土器のように破損した状態で出土したものは、接着剤等を用いて、元の形状に合わせて接合していく。この段階で土器によっては石膏を充填して土器の当時の姿を復原する作業も行っている。出土した土器は実測作業を行い、立体的な遺物を２次元に図上に記録する。出土した金属製品は、長い年月土中に埋没していたため、錆や土が厚く付着していたり、堅緻な状態で出土する陶器とは異なり、脆弱な状態で出土したりするケースがある。このため、当研究所の施設においてＸ線写真で原形を確認し、クリーニングを行い、かつ強化措置を施術している。出土した遺物は図だけではなく写真という手段を以て客観的な情報を残す。４×５判、６×７判のフィルムを以て当研究所の施設で写真撮影を行っている。

現地で図化された図面は、修正・編集等を経て、報告書図版へ版組、版下作成を行う。これらの一連の作業を図面整理とも云う。また、現地で撮影された写真、前述の遺物の実測図・写真と併せて、原稿執筆を行い、調査時からその後の分析にかかる所見を加えている。

写真６　土器復原作業

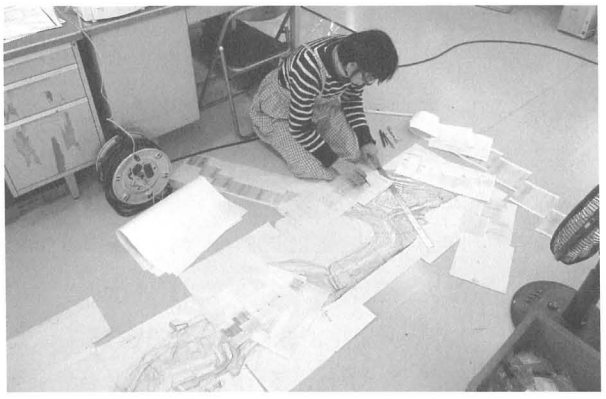


写真７　図面整理作業

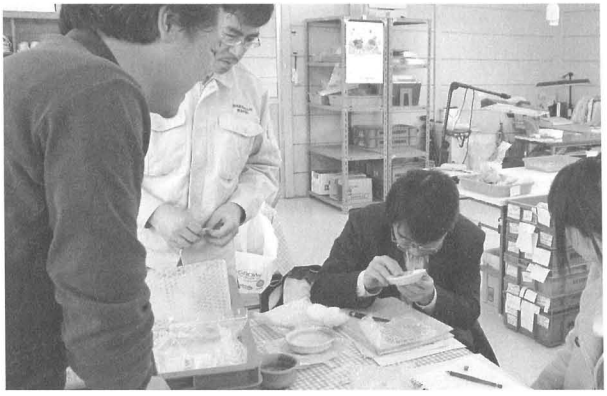


写真８　出土陶磁器指導

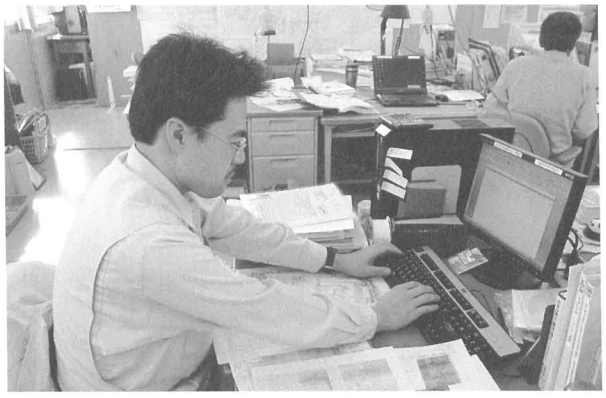


写真９　原稿執筆作業

第４章　調査成果

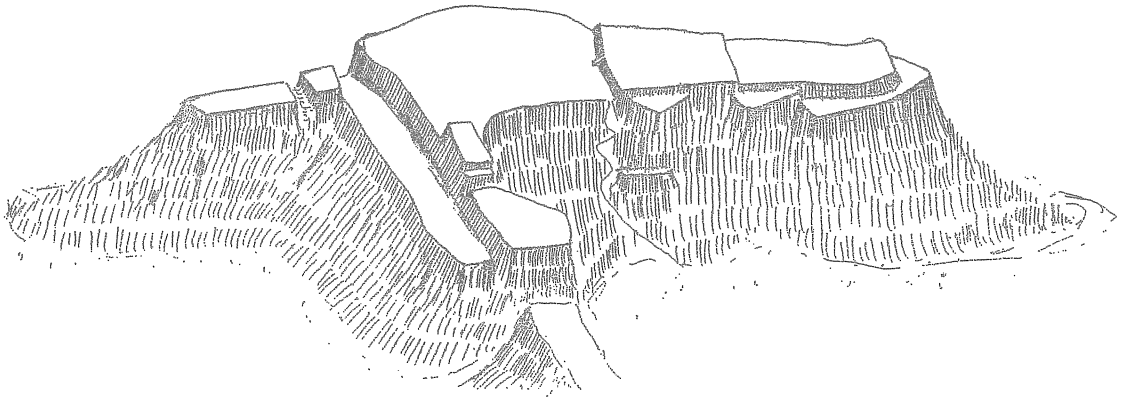
第１節　概　要

今回の庵原城の調査は、東名高速道路庵原ジャンクション（JS）と第二東名伊佐布ジャンクションとを結ぶ道で、城山高架橋部の建設にあたり調査対象となった。庵原城跡が所在する草ヶ谷字城山という地名が示すとおり、古老の伝承から城跡として認識されてきた。江戸時代の地誌にも記載され、国人庵原氏の山城との認識が伝えられている。小字名城山の周囲には「城後」「堂城」「表門」「的場」「馬場」「大手前」といった小字名が散見されるが、城跡との関係は不分明である。道路はこの城山の西袖をかすめるように通過、建設されるため、城の主郭部分の調査については未着手である。

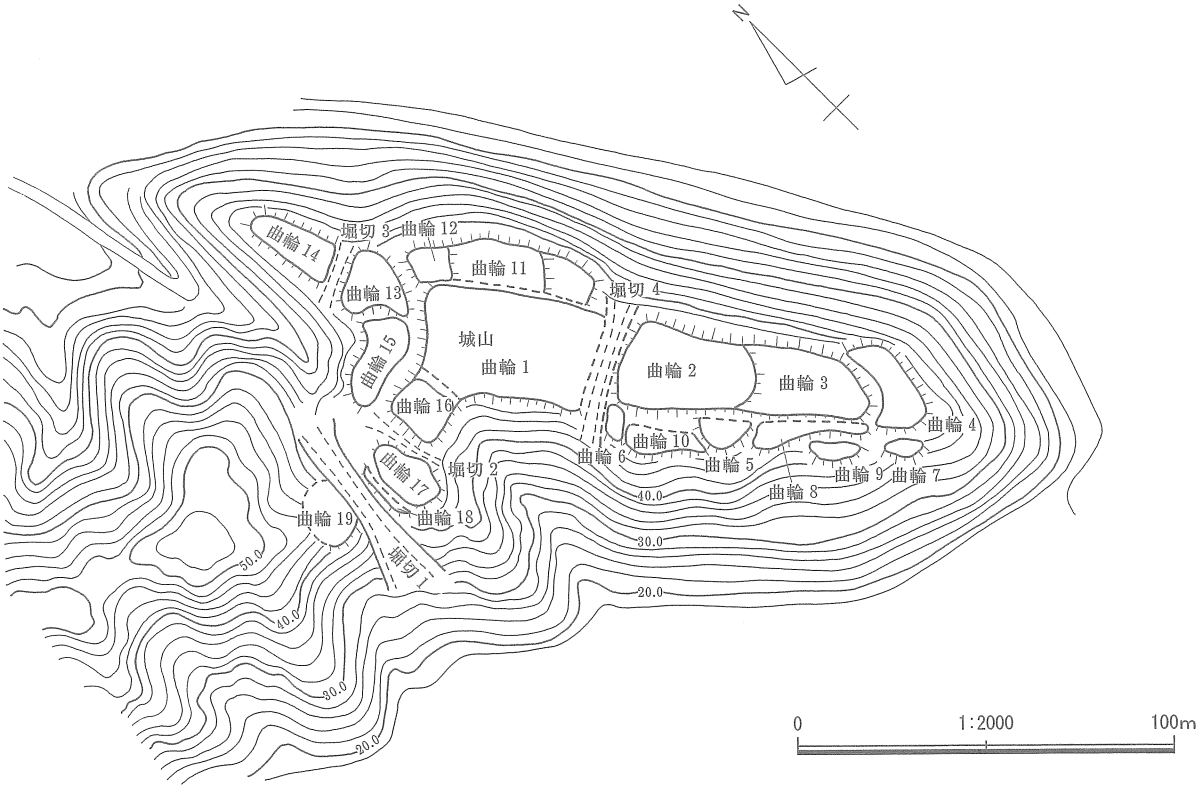
この城の全容を積極的に調査したのは関口宏行氏をはじめとする静岡古城研究会で、昭和53年（1978）には城跡の実測図、縄張り図・鳥瞰図（第５図）を公開している。この成果を踏まえたうえで、昭和56年（1981）に静岡県教育委員会は『静岡県の中世城館』を編集し、関口氏の図を再掲している。このたびの第二東名建設に際して平成12・17年（2000・2005）に踏査した結果、地表面の状況において存在が認められた曲輪や堀切に対して新たに番号を付与した（第６図）。平成17年度の踏査では、北西方向から延びる丘陵の先端に庵原山城が構築されているのがよく理解できたのである。主郭たる曲輪１から曲輪３までは東側を山切川の浸食崖に面し、天然の要害の外観をなし、西側の斜面は切岸となり、幾つかの小規模な曲輪が観察された。また、堀切状の地形も視認でき、丘陵を巧みに生かした山城の存在が想起された。

丘陵の先端部を城域として遮断・個別化ならしめているのが堀切１となる。近世以降に峠道としても利用されたため、該期の堀切としての形状が残存しているかは判然としなかった。峠には江戸時代の庚申塔が建てられていた。堀切１の東側に狭長であるが、曲輪18が延び、その背後に曲輪17がある。堀切１を挟んで西側は、曲輪19が橋頭保の如く配置されていると考えられた。曲輪17は堀切２により曲輪16と遮断せられている。曲輪17の北側から北北東へ細長い平坦部が観察された。この曲輪15で、丘陵先端部でもやや大きめに貫入する谷戸の最奥部に位置する。ここからは、城跡北側の集落を望む位置にある。曲輪16は、堀切２で曲輪17と遮断されている。曲輪16は標高約49.7ｍを測り、他の曲輪よりも高く、この曲輪から江尻や駿府館方向、今川氏や武田氏が設けたであろう狼煙場も見渡すことができたであろう「物見台」である可能性が関口氏により指摘されてきた。しかし、曲輪周囲が削りだされている点から、昭和以降に畑造成の際に、大きく削り出された可能性があり、本来的に曲輪１と平面的に継続する曲輪であるやもしれぬ。曲輪１～３は丘陵先端部の頂部を大きく削平せしめたもので、城の主郭である。曲輪１は面積の上では最も広い曲輪である。面積は約680㎡である。北東際には曲輪11・12が考えられた。石積みが現地で確認されたが、蜜柑畑のためのものと考えられた。曲輪１の北側には曲輪13が見られる。曲輪１から下がった位置にあり、平成17年の踏査時には堀切のような施設は確認されていない。しかし、昭和の踏査時には、堀切状の地形が認められ、明瞭に区別されていたものと判断している。曲輪13はさらにその先の曲輪14とは堀切３により遮断されている。両曲輪共に蜜柑畑として活用され、堀切３には収穫用のモノラック（産業用モノレール）が敷設されており、城の地形を生かして蜜柑畑に利活用し、地形も改変しているのであろう。この曲輪14は、城の最北端部に位置し、城の東側を流れる山切川により開削された谷戸部を南から望む位置にある。曲輪１の南東側に曲輪２が存在する。曲輪２は曲輪１と比較してやや高く、比高差1.7ｍを測る。曲輪１と２の間には本来、堀切４が存在したものと考えられている。踏査時でもわずかに地形が窪む点から判断されている。曲輪２は尾根の最高所として考えられる

が、曲輪１と比べて幅が狭くなるため、曲輪南西側に曲輪６と曲輪５を設け、防御性を高めたものと想定していた。この曲輪５・６は、曲輪２付近から南西方向へ派生した小地形を利用したものと考えられた。この曲輪５と６の間には平坦部が観察され曲輪10としている。曲輪３は曲輪２の南東、山城が位置する丘陵尾根の先端部にあたる。南側の曲輪４とは切岸で、境をなしている。傾斜の緩くなる丘陵先端部の防御性を向上させるために、曲輪４は設けられた可能性がある。なお、丘陵最先端部は明治以降に、清水港築港の際に採土されたらしく、地形が改変されているが、当該部分には本来的に曲輪が存在した可能性は無いものと思う。



第５図　庵原城跡復元鳥瞰図（1978年　６月１日　関口宏行氏作成）



第６図　庵原城跡概要図（2005年　踏査）

第２節　検出遺構

前節においての本発掘調査着手前の踏査による城縄張りの解説を行った。本節より発掘調査により判明した遺構を概観する。検出遺構の種類として曲輪・堀切・竪堀に分類されるが、種類毎の概観ではなく、調査区でも西北から南東方向に、第４図の調査区設定図で触れたようにⅠ期からⅣ期の調査区移動に合わせたものである。また調査成果に関する所見を河合修氏が披露しているので、参考としている（河合 2010）。

１　堀切１（第８・９図　写真図版５・６・７）

堀切１は南アルプス山地の末端である庵原山地からの尾根筋を遮断し、城と城の外とを分かつ。この尾根筋は北西方向から緩やかに高度を下げ、また平坦であったため、防御性を高めるうえで、深く傾斜もきつい堀切を構えたのであろう。第６図で示したように堀切１の西側には曲輪19が位置しているが、遺構は判然としていない。その曲輪19と曲輪18をＮ－３°－Ｅの方向へ延びる。上面幅約5.8m、最下面幅約2.4m、曲輪19からの深さは約2.5m、曲輪18からの深さは約2.4mを測る。また曲輪19へは約51度で立ち上がり、堀切中位付近から約71度の角度で接続する。また曲輪18へは約61度の角度で接続する。これら曲輪18・19への角度が異なるため、やや緩やかな印象を持つ。断面の形状は所謂「箱堀」を呈している。底面の標高値は堀切の中央部で約40.2mを測り、南北へ緩やかに下る。この堀切は地山を切り開いて設けられたもので、曲輪19・18には円礫の堆積が認められる地層が露出する。堀切１の覆土の大半は埋め土で、他に曲輪19方向からの崩落土等が観察された。近代まで峠道として利用されているため、畑地として利用された痕跡は覆土からは窺えない。

第９図は、調査区北壁堀切１（峠道）付近の土層図である。堀切１底面は峠道として活用されたため、踏み固められ堅緻な土層となっている。峠道から南東の方向に堀切２及び曲輪16がある。堀切１底部から堀切２方向へは約40度の角度で接続しているのがわかる。堀切２方向は畑地としての利用が出来なかったのか、地表から約10㎝で地山となっている。基本的に畑地の影響はあまり受けていない印象がある。

２　溝１（第８・９図　写真図版５・６・７）

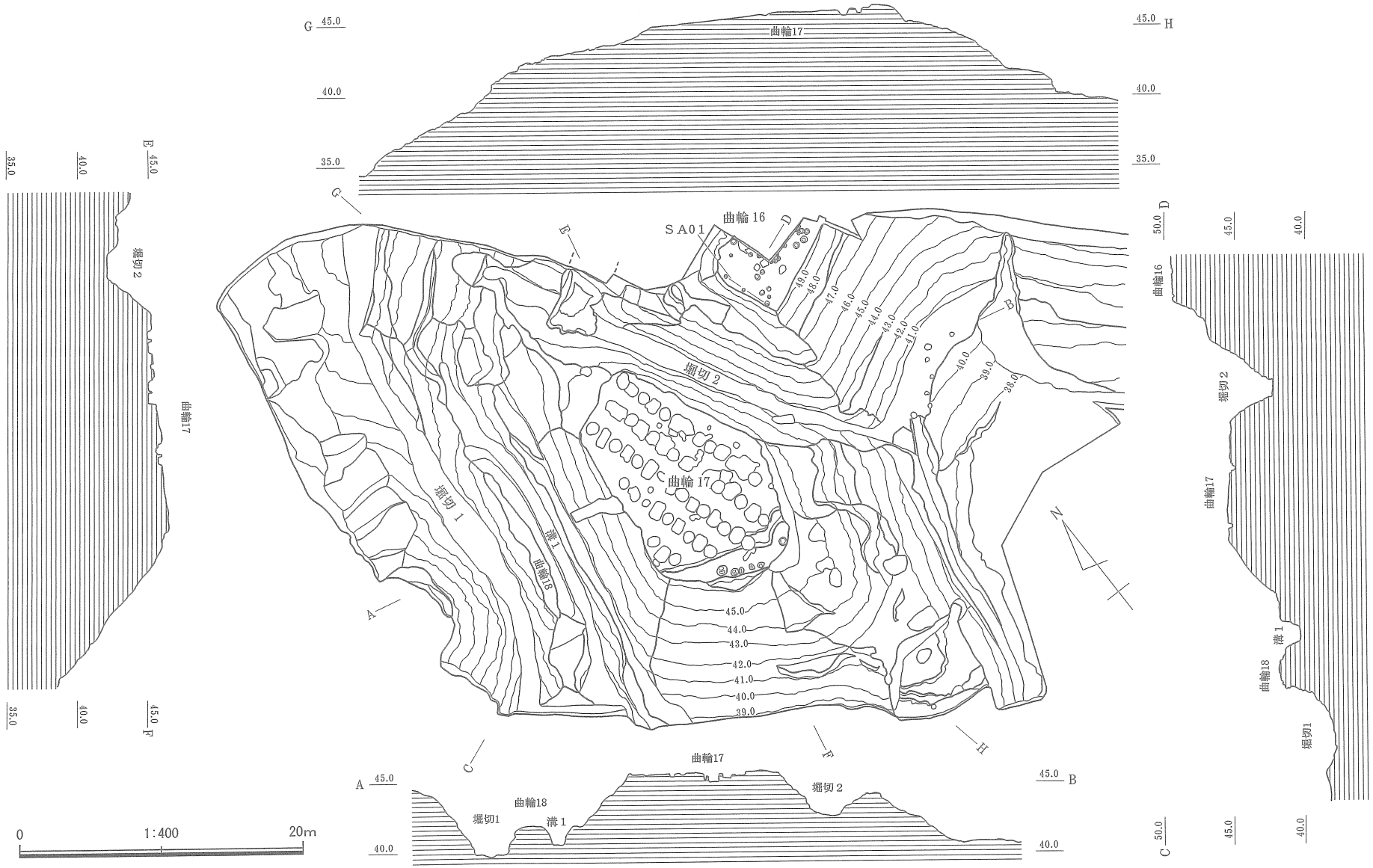
調査前に曲輪18として認識した平坦部には溝１及び小段部が埋没していることが明らかになった。

溝１は上面幅約2.0m、最下面幅約0.8m、曲輪17からの深さは約５ｍを測る。断面の形状は所謂「箱堀」を呈し、堀切１よりも浅く設えている。

小段部の上面は最大長11.5m、最大幅0.75mで、平坦である。第７図にあるように曲輪17側の小段部の標高値は曲輪18とほぼ同じである。上面には柱等の遺構は確認されていない。

曲輪18から溝１、小段部にかけては耕作土が堆積しており、畑地利用の影響が見られる。この部分は地山である和田島層群を削り込んで構築されており、当該層群由来の円礫が露出していた。

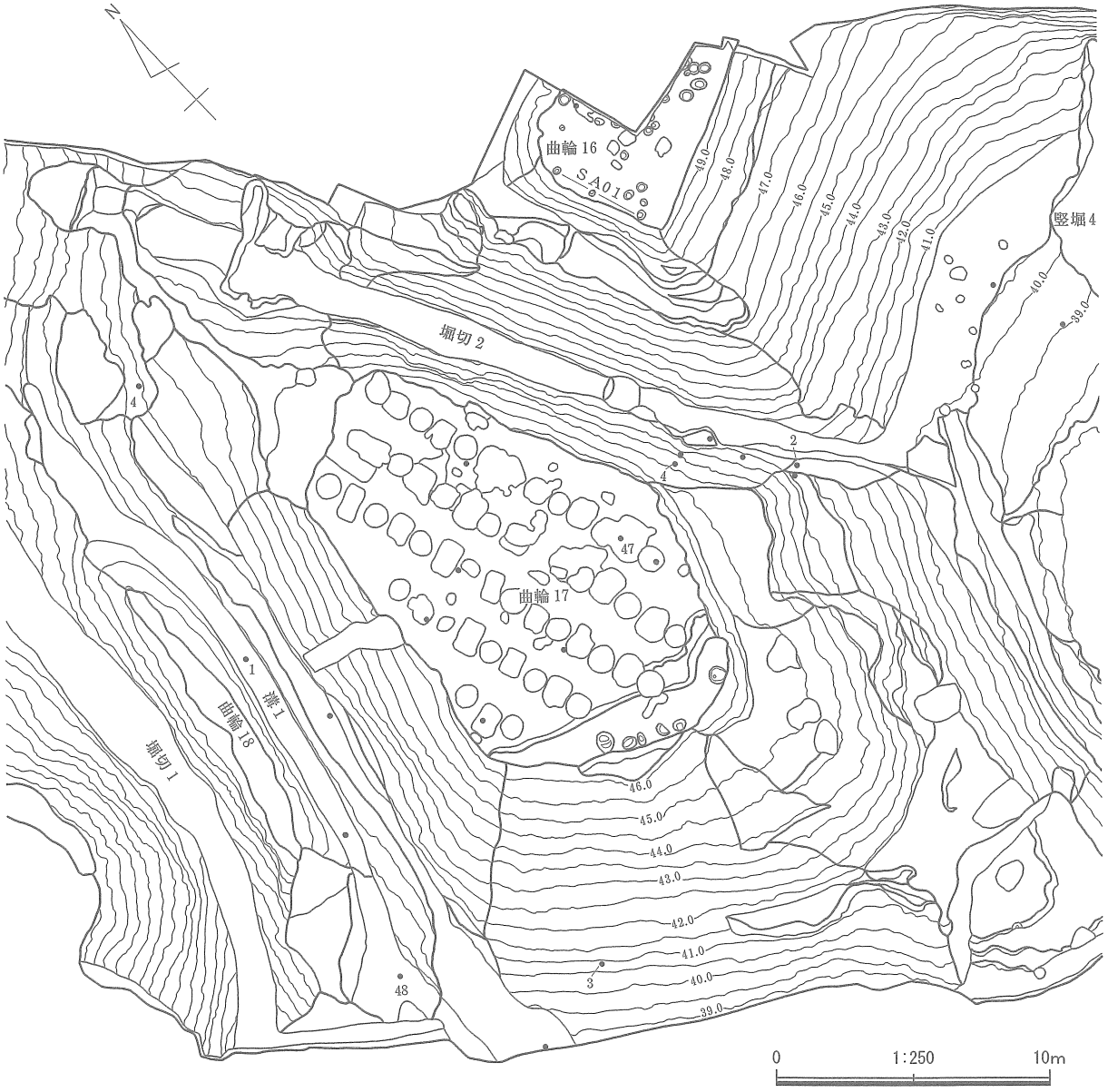
溝１内の堆積土の状況が判然としないこともあり、溝１が完全に埋没した時期や掘削時期を推定するのは困難であるが、溝１掘削前段階には曲輪18と曲輪17側の小段部はひとつの曲輪を形成していた可能性がある。この部分は尾根続きとなる城の西端にあたり、最も防御に注意が払われる場所であることから、溝１を掘削することで二重堀切化をはかり、大規模な堀切の改修を行った可能性を指摘することができる。そして、堀切の改修に伴い、曲輪18の一部（小段部）が掘り残されて、二重堀切内の土塁として機能したと推測することができる。



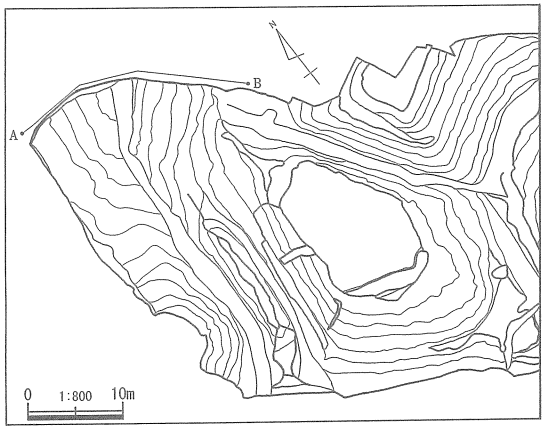
第７図　調査区北半部実測図

3　曲輪17（第８・９・10図　写真図版５・６・８）

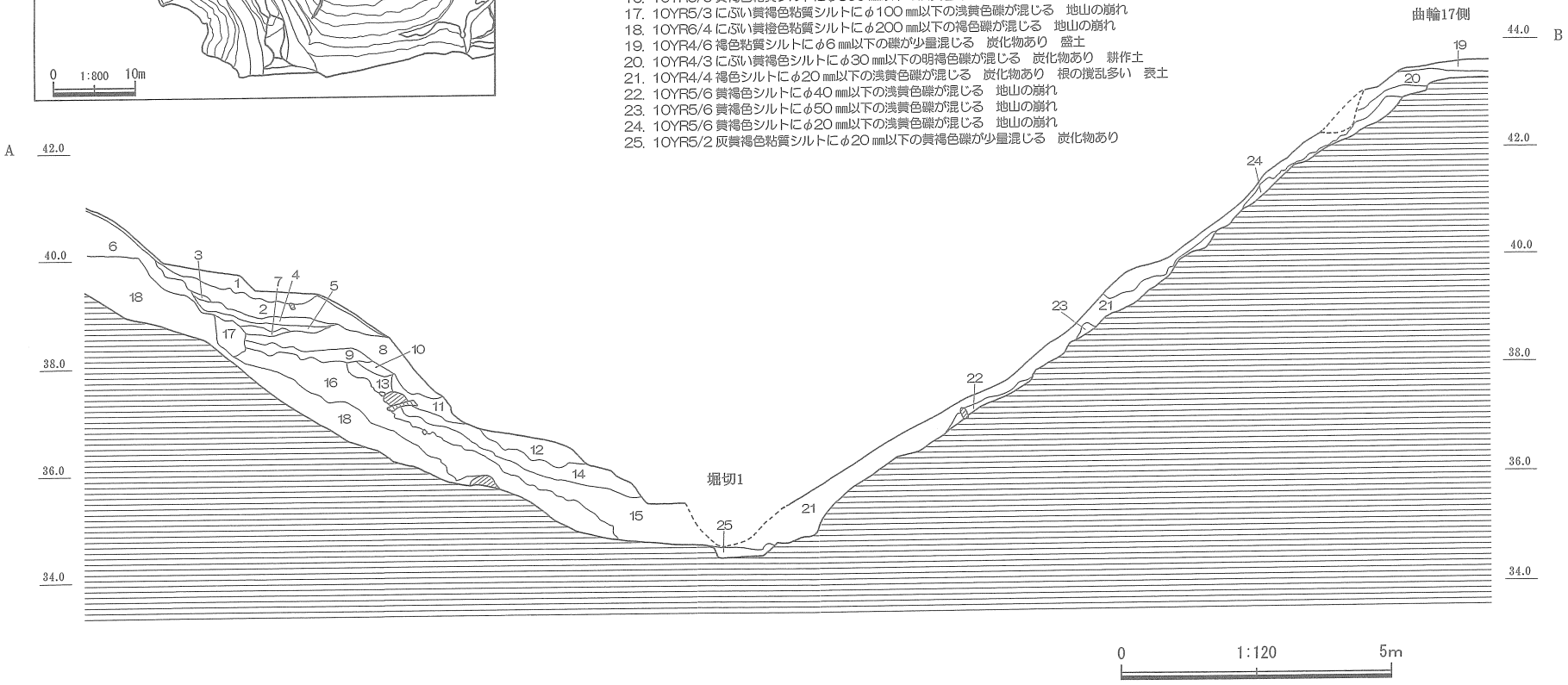
曲輪17は曲輪18の東側に面する曲輪である。この曲輪は曲輪18を見下ろすも、堀切１対岸の曲輪19の標高値と曲輪17はほぼ同一で、尾根を堀切で遮断し、城北西部の防衛力の向上を目指した意図を感じさせる。第６図の概要図でも理解できるように北西から延びる丘陵が城付近でやや南へ折れる。その屈折点が堀切１であり曲輪17でもある。城主体域の延びる方向からずれた北西側にある曲輪の平面形は、いびつな五角形を呈する。上面の最大長は17m、最大幅は11.5m、長軸方向はN－18°－Wで、ほぼ北の方向となる。上面は平坦であるが、南西辺は土塁基礎部が残存していた。標高値は、概ね約46.5mを測る。曲輪17の南端部は小段状というべきか、雛段のように幾段か平坦部が切りだされている。また、北端部も小段状を呈している。曲輪17上面には蜜柑の植樹痕が４列設けられるなど、畑地利用による破壊が著しく、柱穴らしき掘りこみが土塁基礎部付近に見られた。曲輪上面の標高値は約46.4m～44.9mへと北に向かって1.5m低くなる。蜜柑畑の影響であろう。後述する堀切２の土層には曲輪17からの土砂流入が



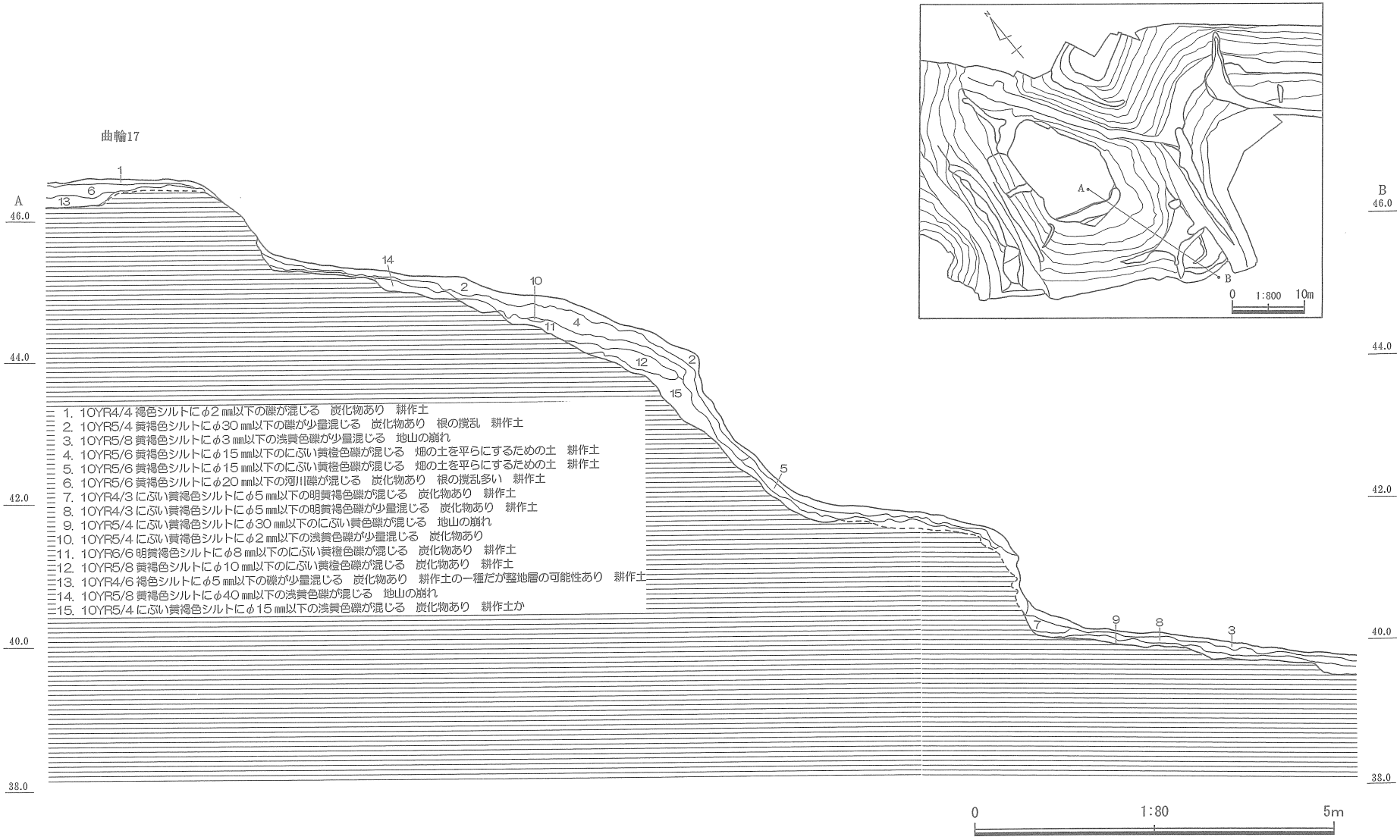
第８図　曲輪16～18、堀切１・２平面図



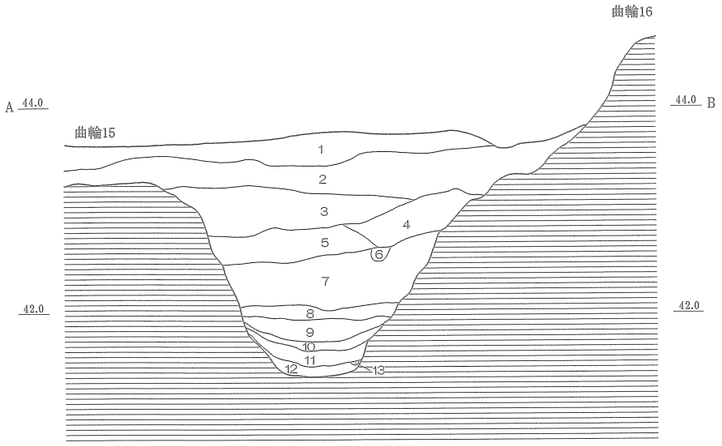
1. 10YR4/4 褐色シルトにφ40 ㎜以下の礫が混じる　炭化物あり　根の攪乱多い　耕作土
2. 10YR4/3 にぶい黄褐色シルトにφ50 ㎜以下の明褐色礫が混じる　炭化物あり　耕作土
3. 10YR4/3 にぶい黄褐色シルトにφ2 ㎜以下のにぶい黄橙色礫が混じる　炭化物あり
4. 10YR5/8 黄褐色シルトにφ20 ㎜以下のにぶい黄色礫が混じる　炭化物あり　耕作土
5. 10YR5/6 黄褐色シルトにφ10 ㎜以下のにぶい黄色礫が少量混じる　炭化物あり　耕作土
6. 10YR5/3 にぶい黄褐色シルトにφ100 ㎜以下の浅黄色礫が混じる　炭化物なし　地山の崩れ
7. 10YR5/8 黄褐色シルトにφ30 ㎜以下のにぶい黄色礫が混じる　炭化物あり　耕作土
8. 10YR5/4 にぶい黄褐色シルトにφ30 ㎜以下の浅黄色礫が少量混じる　炭化物あり　耕作土
9. 10YR4/4 褐色シルトにφ40 ㎜以下の浅黄色礫が混じる　炭化物あり　耕作土
10. 10YR5/4 にぶい黄褐色シルトにφ6 ㎜以下の浅黄色礫が少量混じる　炭化物あり　耕作土
11. 10YR5/3 にぶい黄褐色シルトにφ30 ㎜以下の浅黄色礫が混じる　炭化物あり　耕作土
12. 10YR5/6 黄褐色シルトにφ3 ㎜以下の明黄褐色礫が少量混じる　炭化物あり　耕作土
13. 10YR5/6 黄褐色シルトにφ30 ㎜以下の浅黄色礫が混じる　炭化物あり　耕作土
14. 10YR5/4 にぶい黄褐色シルトにφ30 ㎜以下の浅黄色礫が混じる　耕作土
15. 10YR4/4 褐色シルトにφ200 ㎜以下の浅黄色礫が混じる　耕作土
16. 10YR5/6 黄褐色粘質シルトにφ300 ㎜以下の浅黄色礫が混じるし　地山の崩れ
17. 10YR5/3 にぶい黄褐色粘質シルトにφ100 ㎜以下の浅黄色礫が混じる　地山の崩れ
18. 10YR6/4 にぶい黄橙色粘質シルトにφ200 ㎜以下の褐色礫が混じる　地山の崩れ
19. 10YR4/6 褐色粘質シルトにφ6 ㎜以下の礫が少量混じる　炭化物あり　盛土
20. 10YR4/3 にぶい黄褐色シルトにφ30 ㎜以下の明褐色礫が混じる　炭化物あり　耕作土
21. 10YR4/4 褐色シルトにφ20 ㎜以下の浅黄色礫が混じる　炭化物あり　根の攪乱多い　表土
22. 10YR5/6 黄褐色シルトにφ40 ㎜以下の浅黄色礫が混じる　地山の崩れ
23. 10YR5/6 黄褐色シルトにφ50 ㎜以下の浅黄色礫が混じる　地山の崩れ
24. 10YR5/6 黄褐色シルトにφ20 ㎜以下の浅黄色礫が混じる　地山の崩れ
25. 10YR5/2 灰黄褐色粘質シルトにφ20 ㎜以下の黄褐色礫が少量混じる　炭化物あり



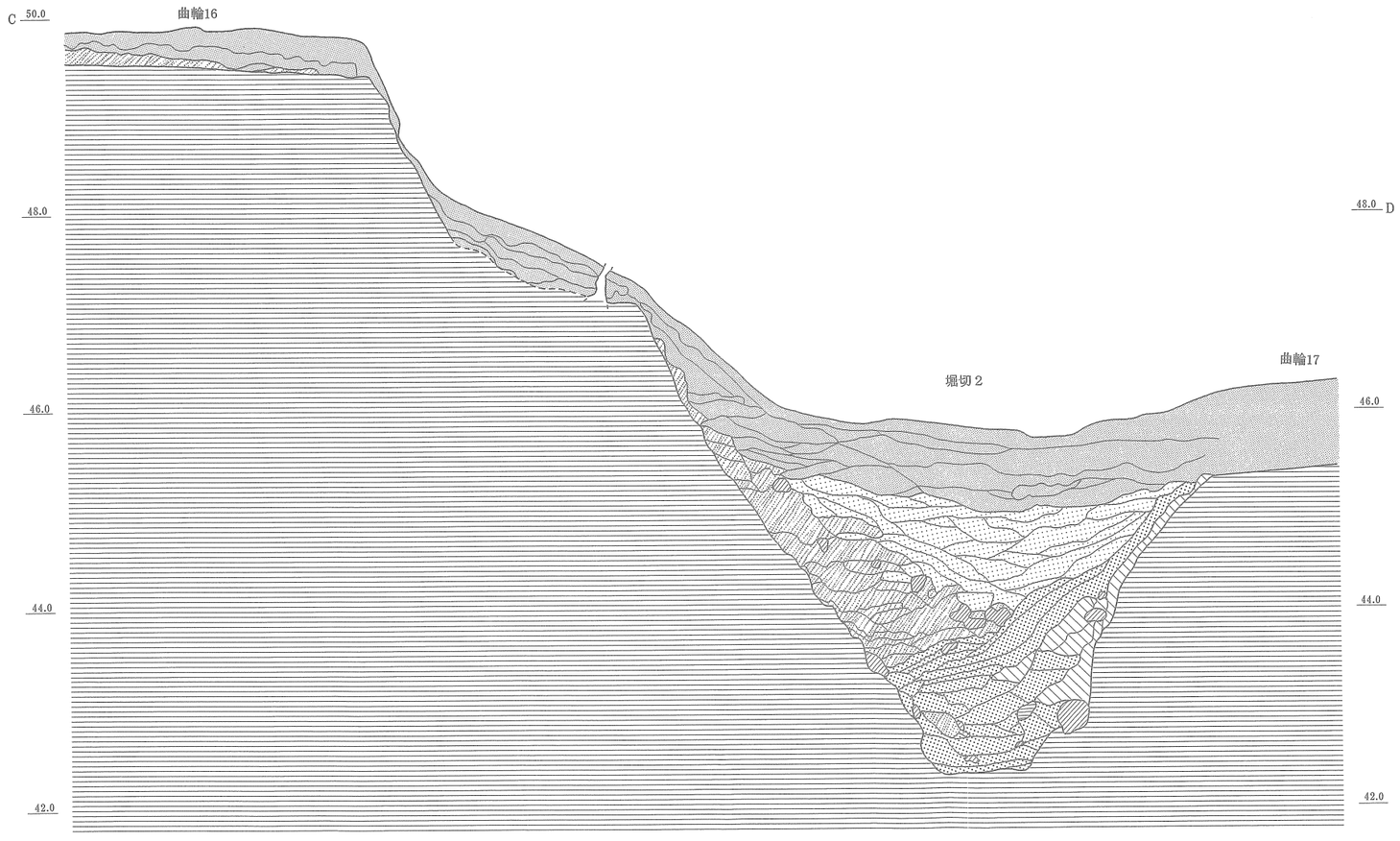
第９図　堀切１北端土層図

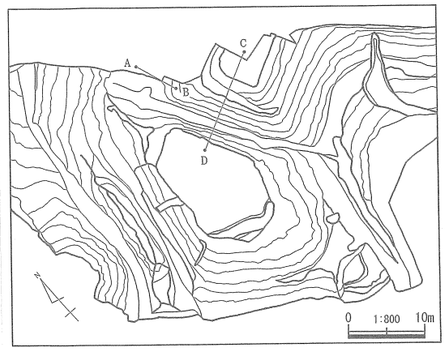


第10図　曲輪17南部土層図



1. 7.5YR4/6 褐色シルトにφ30㎜以下の礫が混じる　炭化物あり　盛土
2. 10YR5/4 にぶい黄褐色シルトにφ8㎜以下の明黄褐色礫が少量混じる　炭化物あり　耕作土
3. 10YR5/8 黄褐色シルトにφ20㎜以下の淡黄色の山石礫が少量混じる　耕作土
4. 10YR5/8 黄褐色シルトにφ40㎜以下のにぶい黄色の山石礫が混じる　炭化物あり　地山の崩れ
5. 10YR5/6 黄褐色シルトにφ40㎜以下の淡黄色礫が少量混じる　炭化物あり　埋め土
6. 10YR5/6 黄褐色シルトにφ40㎜以下のにぶい黄色礫が混じる
7. 10YR5/4 にぶい黄褐色シルトにφ40㎜以下の淡黄色礫が少量混じる　炭化物あり　埋め土
8. 10YR5/4 にぶい黄褐色シルトにφ20㎜以下のにぶい黄色礫が少量混じる　炭化物あり　埋め土
9. 2.5Y5/6 黄褐色粘質シルトにφ30㎜以下の明褐色礫が混じる　炭化物あり　埋め土
10. 2.5Y6/6 明黄褐色粘質シルトにφ30㎜以下の河川礫が少量混じる　炭化物あり
11. 7.5YR5/4 にぶい褐色粘質シルトにφ15㎜以下の明褐色礫が混じる　埋め土
12. 10YR5/8 黄褐色粘質シルトにφ10㎜以下の明褐色礫が混じる　埋め土
13. 2.5Y　明黄褐色粘質シルト

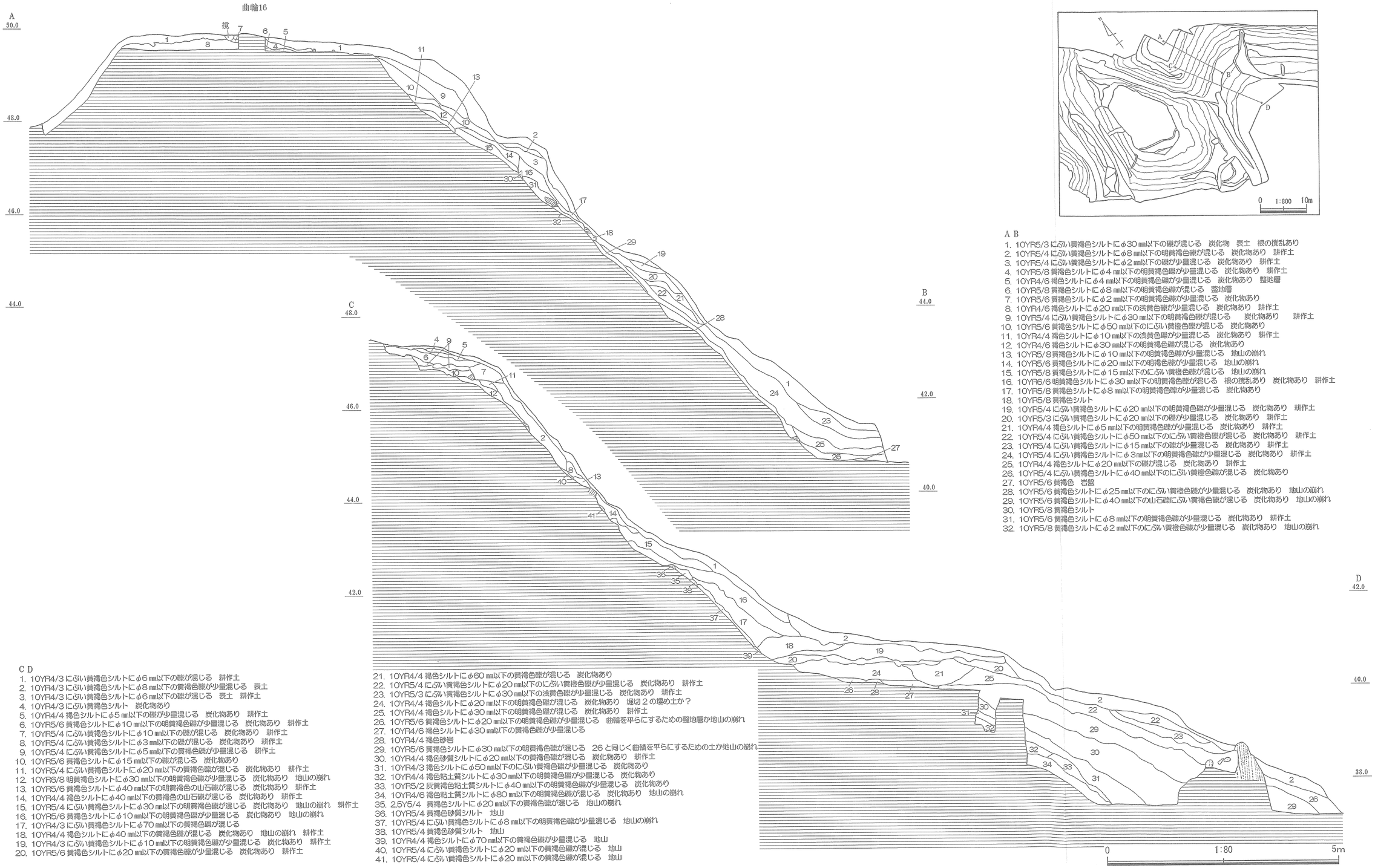




耕作土
埋め土１
曲輪 16 からの崩れ
埋め土２
曲輪 17 からの崩れ

0　1:60　5m

第11図　堀切２土層図



A B

1. 10YR5/3 にぶい黄褐色シルトにφ30 ㎜以下の礫が混じる　炭化物　表土　根の撹乱あり
2. 10YR5/4 にぶい黄褐色シルトにφ8 ㎜以下の明黄褐色礫が混じる　炭化物あり　耕作土
3. 10YR5/4 にぶい黄褐色シルトにφ2 ㎜以下の礫が少量混じる　炭化物あり　耕作土
4. 10YR5/8 黄褐色シルトにφ4 ㎜以下の明黄褐色礫が少量混じる　炭化物あり　耕作土
5. 10YR4/6 褐色シルトにφ4 ㎜以下の明黄褐色礫が少量混じる　炭化物あり　整地層
6. 10YR5/8 黄褐色シルトにφ8 ㎜以下の明黄褐色礫が混じる　整地層
7. 10YR5/6 黄褐色シルトにφ2 ㎜以下の明黄褐色礫が少量混じる　炭化物あり
8. 10YR4/6 褐色シルトにφ20 ㎜以下の淡黄色礫が少量混じる　炭化物あり　耕作土
9. 10YR5/4 にぶい黄褐色シルトにφ30 ㎜以下の明黄褐色礫が混じる　炭化物あり　耕作土
10. 10YR5/6 黄褐色シルトにφ50 ㎜以下のにぶい黄橙色礫が混じる　炭化物あり
11. 10YR4/4 褐色シルトにφ10 ㎜以下の淡黄色礫が少量混じる　炭化物あり　耕作土
12. 10YR4/6 褐色シルトにφ30 ㎜以下の明黄褐色礫が混じる　炭化物あり
13. 10YR5/8 黄褐色シルトにφ10 ㎜以下の明黄褐色礫が少量混じる　地山の崩れ
14. 10YR5/6 黄褐色シルトにφ20 ㎜以下の明褐色礫が少量混じる　地山の崩れ
15. 10YR5/8 黄褐色シルトにφ15 ㎜以下のにぶい黄橙色礫が混じる　地山の崩れ
16. 10YR6/6 明黄褐色シルトにφ30 ㎜以下の明黄褐色礫が混じる　根の撹乱あり　炭化物あり　耕作土
17. 10YR5/8 黄褐色シルトにφ8 ㎜以下の明黄褐色礫が少量混じる　炭化物あり
18. 10YR5/8 黄褐色シルト
19. 10YR5/4 にぶい黄褐色シルトにφ20 ㎜以下の明黄褐色礫が少量混じる　炭化物あり　耕作土
20. 10YR5/3 にぶい黄褐色シルトにφ20 ㎜以下の礫が少量混じる　炭化物あり　耕作土
21. 10YR4/4 褐色シルトにφ5 ㎜以下の明黄褐色礫が少量混じる　炭化物あり　耕作土
22. 10YR5/4 にぶい黄褐色シルトにφ50 ㎜以下のにぶい黄橙色礫が混じる　炭化物あり　耕作土
23. 10YR5/4 にぶい黄褐色シルトにφ15 ㎜以下の礫が少量混じる　炭化物あり　耕作土
24. 10YR5/4 にぶい黄褐色シルトにφ3 ㎜以下の明黄褐色礫が少量混じる　炭化物あり　耕作土
25. 10YR4/4 褐色シルトにφ20 ㎜以下の礫が混じる　炭化物あり　耕作土
26. 10YR5/4 にぶい黄褐色シルトにφ40 ㎜以下のにぶい黄橙色礫が混じる　炭化物あり
27. 10YR5/6 黄褐色　岩盤
28. 10YR5/6 黄褐色シルトにφ25 ㎜以下のにぶい黄橙色礫が少量混じる　炭化物あり　地山の崩れ
29. 10YR5/6 黄褐色シルトにφ40 ㎜以下の山石礫にぶい黄褐色礫が混じる　炭化物あり　地山の崩れ
30. 10YR5/8 黄褐色シルト
31. 10YR5/6 黄褐色シルトにφ8 ㎜以下の明黄褐色礫が少量混じる　炭化物あり　耕作土
32. 10YR5/8 黄褐色シルトにφ2 ㎜以下のにぶい黄橙色礫が少量混じる　炭化物あり　地山の崩れ

C D

1. 10YR4/3 にぶい黄褐色シルトにφ6 ㎜以下の礫が混じる　耕作土
2. 10YR4/3 にぶい黄褐色シルトにφ8 ㎜以下の黄褐色礫が少量混じる　表土
3. 10YR4/3 にぶい黄褐色シルトにφ6 ㎜以下の礫が混じる　表土　耕作土
4. 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト　炭化物あり
5. 10YR4/4 褐色シルトにφ5 ㎜以下の礫が少量混じる　炭化物あり　耕作土
6. 10YR5/6 黄褐色シルトにφ10 ㎜以下の明黄褐色礫が少量混じる　炭化物あり　耕作土
7. 10YR5/4 にぶい黄褐色シルトにφ10 ㎜以下の礫が混じる　炭化物あり　耕作土
8. 10YR5/4 にぶい黄褐色シルトにφ3 ㎜以下の礫が混じる　炭化物あり　耕作土
9. 10YR5/4 にぶい黄褐色シルトにφ5 ㎜以下の黄褐色礫が少量混じる　耕作土
10. 10YR5/6 黄褐色シルトにφ15 ㎜以下の礫が混じる　炭化物あり
11. 10YR5/4 にぶい黄褐色シルトにφ20 ㎜以下の黄褐色礫が混じる　炭化物あり　耕作土
12. 10YR6/8 明黄褐色シルトにφ30 ㎜以下の明黄褐色礫が少量混じる　炭化物あり　地山の崩れ
13. 10YR5/6 黄褐色シルトにφ40 ㎜以下の明黄褐色の山石礫が混じる　炭化物あり　耕作土
14. 10YR4/4 褐色シルトにφ40 ㎜以下の黄褐色の山石礫が混じる　炭化物あり　耕作土
15. 10YR5/4 にぶい黄褐色シルトにφ30 ㎜以下の明黄褐色礫が混じる　炭化物あり　地山の崩れ　耕作土
16. 10YR5/6 黄褐色シルトにφ10 ㎜以下の明黄褐色礫が少量混じる　炭化物あり　地山の崩れ
17. 10YR4/3 にぶい黄褐色シルトにφ70 ㎜以下の黄褐色礫が混じる
18. 10YR4/4 褐色シルトにφ40 ㎜以下の黄褐色礫が混じる　炭化物あり　地山の崩れ　耕作土
19. 10YR4/3 にぶい黄褐色シルトにφ10 ㎜以下の明黄褐色礫が少量混じる　炭化物あり　耕作土
20. 10YR5/6 黄褐色シルトにφ20 ㎜以下の黄褐色礫が少量混じる　炭化物あり　耕作土
21. 10YR4/4 褐色シルトにφ60 ㎜以下の黄褐色礫が混じる　炭化物あり
22. 10YR5/4 にぶい黄褐色シルトにφ20 ㎜以下のにぶい黄褐色礫が少量混じる　炭化物あり　耕作土
23. 10YR5/3 にぶい黄褐色シルトにφ30 ㎜以下の淡黄色礫が少量混じる　炭化物あり　耕作土
24. 10YR4/4 褐色シルトにφ20 ㎜以下の明黄褐色礫が混じる　炭化物あり　埋切２の埋め土か？
25. 10YR4/4 褐色シルトにφ30 ㎜以下の明黄褐色礫が混じる　炭化物あり　耕作土
26. 10YR5/6 黄褐色シルトにφ20 ㎜以下の明黄褐色礫が少量混じる　曲輪を平らにするための整地層か地山の崩れ
27. 10YR4/6 褐色シルトにφ30 ㎜以下の黄褐色礫が少量混じる
28. 10YR4/4 褐色砂岩
29. 10YR5/6 黄褐色シルトにφ30 ㎜以下の明黄褐色礫が混じる　26 と同じく曲輪を平らにするための土か地山の崩れ
30. 10YR4/4 褐色砂質シルトにφ20 ㎜以下の黄褐色礫が混じる　炭化物あり　耕作土
31. 10YR4/3 褐色シルトにφ50 ㎜以下のにぶい黄褐色礫が少量混じる　炭化物あり
32. 10YR4/4 褐色粘土質シルトにφ30 ㎜以下の明黄褐色礫が少量混じる　炭化物あり
33. 10YR5/2 灰黄褐色粘土質シルトにφ40 ㎜以下の明黄褐色礫が少量混じる　炭化物あり
34. 10YR4/6 褐色粘土質シルトにφ80 ㎜以下の明黄褐色礫が混じる　炭化物あり　地山の崩れ
35. 2.5Y5/4　黄褐色シルトにφ20 ㎜以下の黄褐色礫が混じる　地山の崩れ
36. 10YR5/4 黄褐色砂質シルト　地山
37. 10YR5/4 にぶい黄褐色シルトにφ8 ㎜以下の明黄褐色礫が少量混じる　地山の崩れ
38. 10YR5/4 黄褐色砂質シルト　地山
39. 10YR4/4 褐色シルトにφ70 ㎜以下の黄褐色礫が少量混じる　地山
40. 10YR5/4 にぶい黄褐色シルトにφ20 ㎜以下の黄褐色礫が混じる　地山
41. 10YR5/4 にぶい黄褐色シルトにφ20 ㎜以下の黄褐色礫が混じる　地山

第12図　曲輪16土層図

認められるため、当該曲輪北半部の削平の結果であろう。第11図にあるように曲輪17は、曲輪18や後述する堀切２に面する斜面は約45度、約58度の角度に設えられているが、北・南側は自然地形をそのまま生かしたのかのような緩やかな傾斜面を呈する。堀切２の底部、斜面には後世の影響が甚少と理解できる一方、曲輪の南辺部、写真図版５の写真２でも見られるように曲輪17上面直下に一段帯状に帯曲輪のようなテラス状の地形が認められ、緩やかに次の平坦面に移行する。北・南側共に小段状の施設（小曲輪）を設けて防御性の向上を意図した可能性を想起した所以でもある。しかし、調査結果では、曲輪南側一帯は耕作土が約20㎝程度堆積しているのを確認した。城全体が廃城後にほぼ全域に畑地利用された経緯も勘案すれば当該個所も地形改変を全く受けていないとは言えない。

４　堀切２（第８・11図　写真図版５・９・10）

堀切２は曲輪17と曲輪16を分かつ機能を持つ。調査前は曲輪16と17との境界部が浅く窪む地形が認められたため、堀切の可能性が認められていた。現地調査に移行した際は厚さ約3.5m程度の堆積土を除去し、堀切の全容を明らかにした。堀切２は堀切１と大きく異なるN－26°－Wの方向に延びる。上面幅約９m、最下面幅約2.5mで断面の形状は所謂「箱堀」で平坦に仕上げられている。また曲輪17からの深さは約2.8m、曲輪16からの深さは約7.2mを測る。また曲輪17へは約58度、曲輪16へは約63度の急角度で接続する。堀切２の北端は標高値約41.8m付近から、曲輪17北端部の緩やかな傾斜と共に始まる。この堀切２は城が位置する丘陵中位から掘削され、今回の調査で検出し得た堀切１北端標高値が約34.5mであるため、堀切２との高低差は約7.3mを測る。この堀切は北側で曲輪15と接しているが、この曲輪15と曲輪16の接点付近に第11図上段に示したような堀状遺構の土層が観察されている。この遺構と堀切２との交点付近の底面は、落ち込んでいる。堀切２底面は平坦ながらも少しずつ標高値は高くなり、北端部から約18mの位置で段状をなす。また約21mの付近は直線的であった堀切がクランク状に方向を違えている。築城時、もしくは堀切２自体の掘削時に生じた掘削方向の相違に由来する可能性がある。北西から延びてきた堀切２は曲輪17と曲輪16を完全に断絶せしめ、堀切が終息する付近で畑開削由来の小段状の地形により切られている。遺物としては常滑の甕破片が出土している。

第11図の下段は堀切２内の埋土の状況を示したものである。この堆積状況から大きく５段階の過程を経て、堀切２が埋没したことが考えられる。曲輪16側斜面標高約47m付近にはテラス状の地形が認められるが、この方向からの崩れ土の堆積が堀切２において確認される。なお曲輪17と16との間には当然連絡通路である木橋の存在が推定されるが、その痕跡は検出されていない。

５　曲輪16（第８・12・13図　写真図版５・６・10）

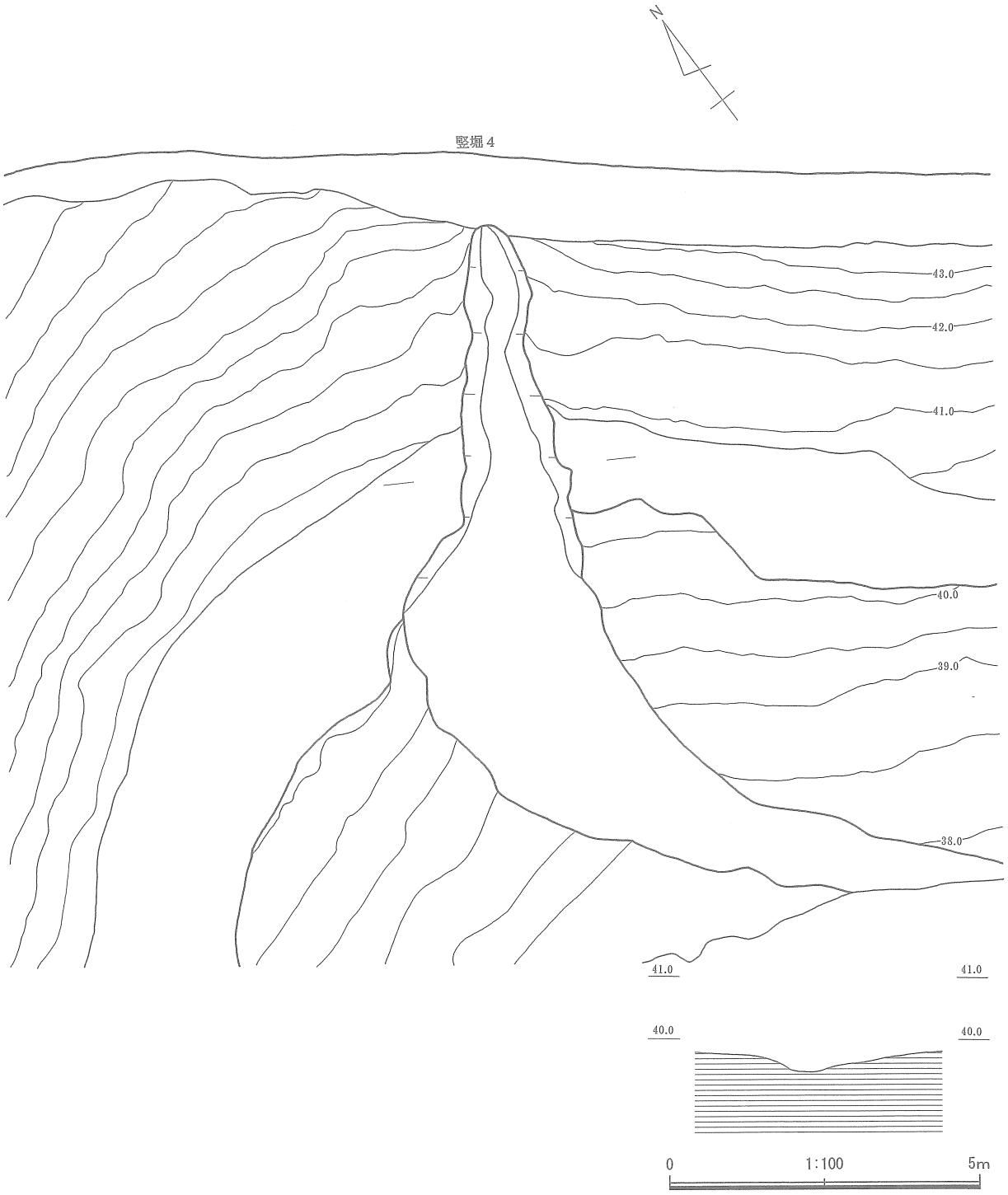
曲輪16は堀切２の東側に面する曲輪である。第５図の関口氏の鳥瞰図にもあるように、城跡内で残存した曲輪でも一番高所である。前節で触れたように「物見台」の如く屹立している。よって高低差が約３mを測る隣接せる曲輪17を見下ろし、庵原山地から延びる尾根筋を眺めることができる。また城北側から延びる小谷戸の最奥にあり、谷戸沿いに侵入する敵兵の動きを牽制する曲輪15を見下ろす位置にある。この曲輪の上面は長方形を呈し、長さ約８m、幅約5.5mを測る。

曲輪上面は平坦で、標高約49.5mを測る。土塁は検出できなかったが、柱穴を20基検出している。建物を復原できるような柱穴の配列は確認できなかったが、概ね曲輪16の西面に沿って柱列が並ぶことからSA01とした。柱間間隔はSP01－SP02は1.8m、SP02－SP03は1.9mである。

当該曲輪も地山である和田島層群を削りこんで構築されたものと考えられる。南面切岸下位には当該層群由来の円礫が露出していた。当該曲輪南辺はその直下斜面の等高線に並行しているため、自然地形に手を入れ所謂「切岸」としたことが理解できる。

第13図　曲輪16平面図

第12図は曲輪16南切岸の土層図である。図でも理解できるように曲輪16の切岸は約42度の角度で急傾斜している。調査時に「小段状遺構」として扱ったテラス状の地形が堀切２南端部から認められる。土砂の堆積の主体は崩落土と耕作土であり、それらで覆われた「小段状遺構」は造成された畑跡と考えるに至っている。第12図下段の土層図では切岸を雛段状にカットしたあと、上位からの崩落土、耕作土に覆われている。曲輪16西辺はその直下にテラス状の地形が認められる。そのテラス状の地形は曲輪北側に継続するものである。テラス状地形面の標高値は約47.0mで、曲輪17よりも２m程度高く、本来的に



第14図　竪堀４実測図

曲輪17と接続した面をなしていた可能性は低い。ところで、山城には曲輪と曲輪との間の連絡通路である土橋が検出される例が多い。今回は土橋のような遺構は検出されていないため、木橋が曲輪17との間に架橋されていた可能性は高い。この木橋が設けられていたのが、このテラス状地形の箇所である可能性も想起されたが、前述しているように堀切２内には曲輪16側からの崩落土が大量に堆積しているため、このテラス地形開削の際に生じた土砂である可能性も併記しておく。そもそも曲輪１～３までが昭和40年代に重機を乗せて造成したという情報があり、曲輪16が造成し遺されたに過ぎないという可能性も指摘されている。曲輪16を取り巻く著しい地形改変については、曲輪東端部が調査対象外区域であったため、想像する材料さえ不足している。

６　竪堀４（第14図）

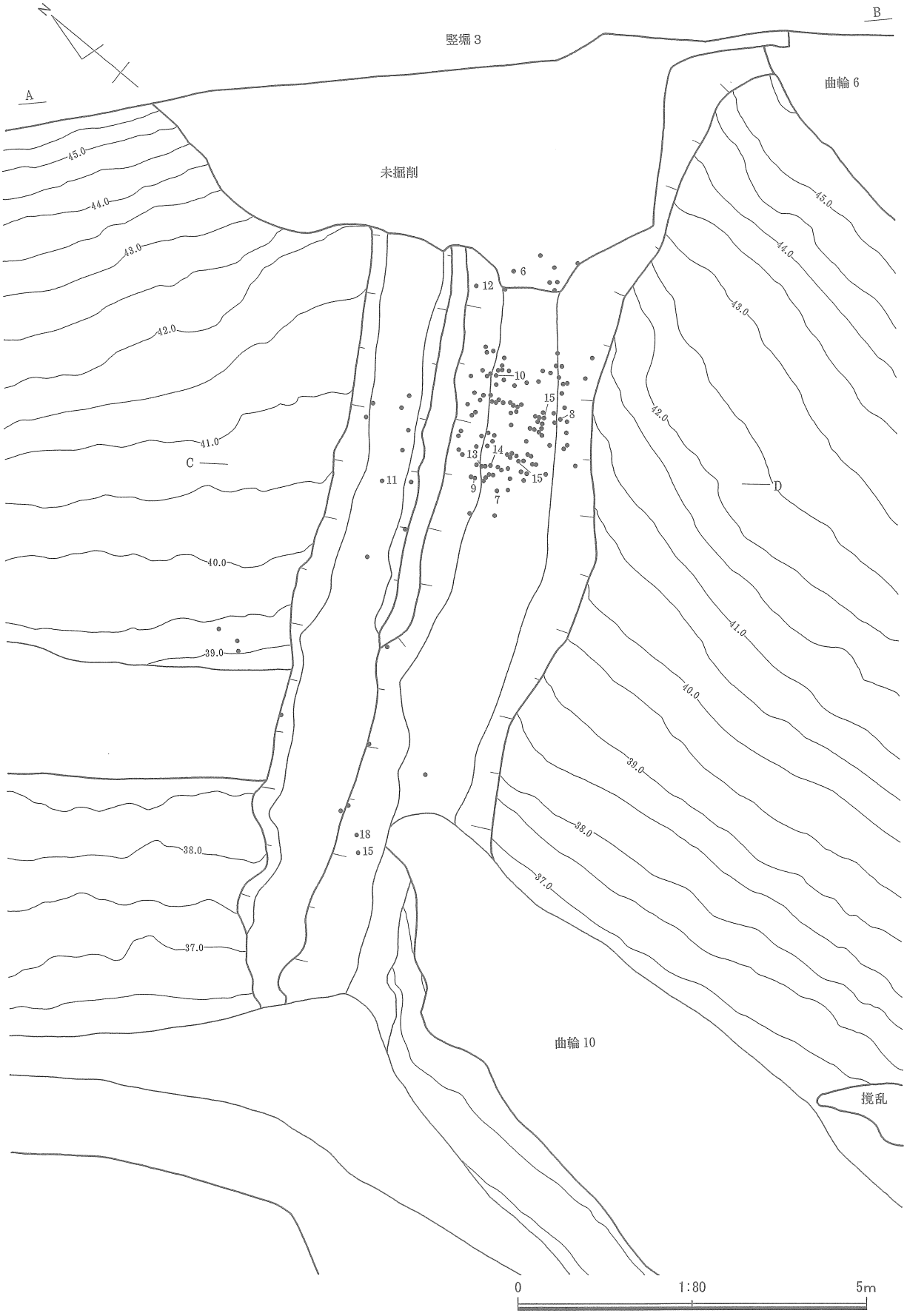
竪堀４は曲輪16と曲輪１との境界部、すなわち曲輪16の南南西に向いた切岸が曲輪１の切岸に転換する地点に位置する上端部は掘削困難であるため判然としないものの、標高値約43m付近から検出されはじめ、S－38°－Wの方向へ延びる。標高値43m付近では上面幅約0.8m、最下面幅約0.5mを測り、廃城後に形作られた小段地形付近では上面幅約1.9m、最下面幅約1.0mを測り、平面の形状は緩やかに開く。深さは小段地形付近で約0.3mを測り、小規模な竪堀といえる。この竪堀は標高約39.5m付近から緩やかなカーブを描き、東方向へ向きを変えている。竪堀検出地点の標高差は約５mある。断面の形状は所謂「箱堀」であるが、浅い。調査時にはこの周辺に礫が集積していた状態で確認された。調査時には籠城する側が準備・使用した飛礫などの可能性を年報において指摘したが、畑により作られた小段地形の存在も勘案すると、礫自体が廃城後に集積されたものであるため、城に関係が無いものと判断された。

なお、竪堀４が位置するのが前述した通り、曲輪16と曲輪１との境界にあたる。未調査なので判然としないが、両曲輪境界部に堀切のような施設があり、当該竪堀と接続していた可能性も捨てきれない。

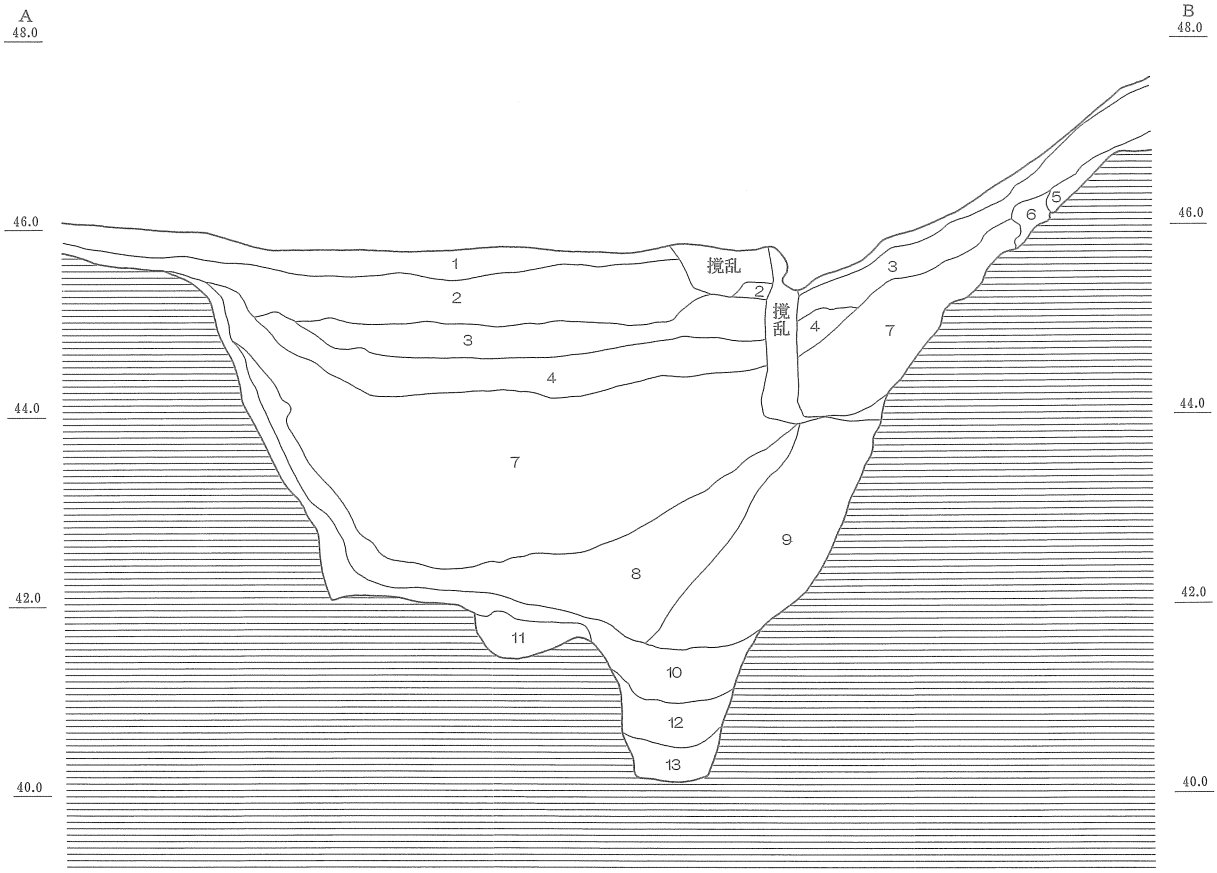
７　竪堀３・堀切４（第15・16図　写真図版11・12）

竪掘３は曲輪１・６と曲輪２との境界、堀切４に接続する施設である。丘陵末端部を利用した曲輪１～３で最高所の曲輪２と曲輪１を遮断する機能を持つ堀切４と接続することにより、より防御性の向上を意図したものであろう。第15図でも明らかのように堀切４と接続する竪堀３上端部は急傾斜のため、掘削調査を断念している。このほど検出できた曲輪１の切岸はS－38°－E、ほぼ南東の方向へ延び、竪堀の延びる方向は、曲輪６を意識しつつ、切岸ほぼ直交するように設けられている。今回検出し得た曲輪１切岸の傾斜角度は平均約35度程であるが、標高値約39m付近の畑地由来のテラス状地形付近から傾斜角約42度と急な斜面地形となる。この竪堀は南北の２本の細い竪堀で構成されている。標高値42m付近において、北側は上面幅約1.2m、最下面幅約0.8m、南側竪堀の上面幅約2.2m、最下面幅約0.8mを測る。

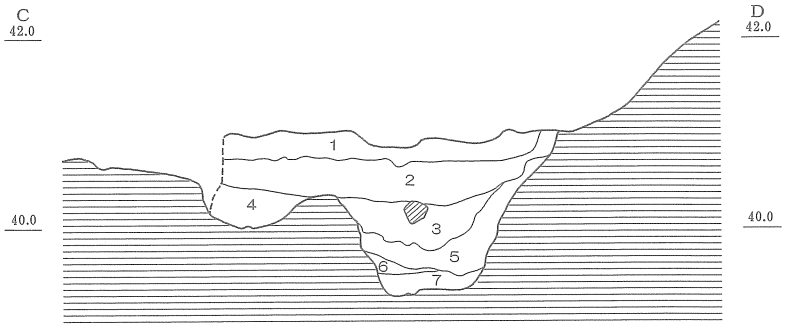
第16図には竪堀３に係る土層図を２面掲載した。上段図では北側竪堀の深さは約0.45m、南側竪堀は約1.55mを測る。下段図では北側竪堀の深さは0.4m、南側竪堀は約1.05mを測る。断面の形状では南側の竪堀が底面の平坦な所謂「箱堀」であるのに対し、北側の竪堀は底面が緩やかに窪むU字状を呈する。断面の形状が異なるため、一度に２条の堀を穿ったのではなく、時間差をおいて掘削されたものと考えたい。北側の竪堀は上端幅平均1.2mで直線的に延びるのに対し、南側の竪堀は中位付近にてブレ気味な感がある。南北共に中位から下位にかけてテラス状の平坦地形と接触する。北側竪堀は標高値約38.8m付近で廃城後の畑地に由来する地形と交わる。南側竪堀は約36.8m付近で曲輪10と重複している。竪堀内の埋土は黄褐色シルトを主体とし、その様子から北側、南側竪堀は両者とも同時に機能していたものと考えられる。


N
A
B
C
D
竪堀３
曲輪６
未掘削
曲輪10
撹乱
45.0
44.0
43.0
42.0
41.0
40.0
39.0
38.0
37.0
6
12
10
15
8
13
14
15
9
7
11
18
15
0
1:80
5m

第15図　竪堀３平面図



1. 10YR3/3 暗褐色シルト　表土
2. 10YR4/6 褐色シルトにφ1 ㎜程度の灰白色礫がまばらに混じりφ10 ㎜程度の浅黄橙色礫が混じる
3. 10YR4/6 褐色シルトにφ10 ㎜程度の浅黄橙色礫が混じる
4. 10YR4/6 褐色シルトにφ10 ㎜程度の浅黄橙色礫が多く混じる　部分的に小さな橙色シルトブロックが混じる
5. 10YR6/8 明黄褐色シルトに橙色シルトブロックが非常に多く混じる　φ10 ㎜程度の灰白色礫も多く混じる
6. 10YR6/8 明黄褐色シルトに橙色シルトブロックが混じる
7. 10YR6/8 明黄褐色シルトに橙色シルトブロックが非常に多く混じる　φ10 ㎜程度の灰白色礫も多く混じる
8. 10YR4/6 褐色シルトφ1 ㎜程度の灰白色礫がまばらに混じる
9. 10YR5/6 黄褐色シルトにφ200 ㎜程度の浅黄橙色砂質礫が多く混じる
10. 10YR4/6 褐色シルトφ2 ㎜程度の灰白色礫が多く混じり、φ30 ㎜程度の灰白色礫がまばらに混じる　少量の炭化物あり
11. 10YR5/6 黄褐色シルトにφ8 ㎜程度の灰白色礫・明赤褐色礫がまばらに混じる
12. 10YR4/6 褐色シルトにφ10 ㎜程度の灰白色礫が多く混じる　赤褐色礫もまばらに混じる　炭化物・かわらけ片あり
13. 10YR6/4 にぶい黄橙色粘質　シルトにφ20 ㎜程度の赤褐色礫が混じる　炭化物あり



1. 7.5YR5/6 明褐色シルトに橙色シルトブロックが多く混じる　φ50 ㎜程度の灰白色礫がまばらに混じる
2. 10YR5/6 黄褐色シルトにφ3 ㎜程度の灰白色礫が混じりφ10 ㎜程度の灰白色礫がまばらに混じる
3. 10YR5/6 黄褐色シルトにφ10 ㎜程度の浅黄橙礫が多く混じる　少量の炭化物あり　φ80～100 ㎜程度の浅黄橙色礫も少量混じる
4. 10YR5/8 黄褐色シルトにφ3 ㎜程度の灰白色礫が多く混じる　φ30～100 ㎜程度の灰白色砂質礫もまばらに混じる　炭化物あり
5. 10YR5/8. 黄褐色シルトにφ100 ㎜程度の浅黄橙色砂質礫が多く混じる　明褐色粘質シルトブロックも多く混じる　上からの崩れ
6. 10YR5/8 黄褐色シルトにφ3 ㎜程度の灰白色礫が多く混じる　φ10 ㎜程度の灰白色砂質礫がまばらに混じる
7. 10YR5/4 にぶい黄褐色粘質シルトにφ20～30 ㎜程度の明黄褐色砂質礫が多く混じる　φ100 ㎜程度の砂質礫も少量混じる

0　1:80　5m

第16図　竪堀３土層図

遺物は南側竪堀の第10層から多く出土している。なかでも、復原・接合不能であるかわらけの細片資料が特に多い。第16図上段の土層図は南北竪堀の底部から、今回掘削調査できなかった竪堀上端部見通し実測した図である。土層上半部は堀切４の断面形状を示しているものと考えたい。その断面は上端幅約５m、下端幅約2.4mを測る。断面形は所謂「箱堀」である。曲輪１側の堀切４の傾斜面は約64度を測り、曲輪２側は約54度の角度で立ち上がり、標高値約44.2m付近で約45度とやや緩やかになり、曲輪２に接続する。断面図で観察する曲輪２の標高値は約46.8m、曲輪１の標高値は約45.5mと約1.3m程度の高低差が認められる。件の竪堀はこの堀切４に曲輪２寄りに接続する。特に竪堀３の東側には曲輪２の南西側の防御を受け持つ曲輪６、また曲輪６直下に曲輪10が構えられ、城の中枢である曲輪２の防御性の向上を意図している。そういう意味では竪堀３を２重にすることで敵の横方向の移動を効率的に阻むものであった可能性が高く、改修された痕跡といえよう。

この竪堀からは多くの土器が出土している。分布の中心は竪堀上半部である。かわらけが主体であるが、灯明皿や古瀬戸の擂鉢、輸入陶磁器（染付）が出土している。

８　曲輪10（第17図　写真図版11・13）

曲輪10は竪堀３の南、曲輪６の西側直下に位置する。当該曲輪について調査前の踏査段階では、縁辺に杉が植えられ、畑開墾に由来するテラス状の地形と考えられたため、調査当初、ここが曲輪という認識は生じていなかった。しかし。第５図の関口氏の鳥瞰図でも理解できるように、当該地点に狭い規模の曲輪があったのではとする見解があったのは事実である。この曲輪は曲輪６直下、西側を防御するものと考えられる。周知のとおり庵原山地の最先端部でも南西斜面は手前の高部丘陵と相対する位置にある。しかも曲輪17と曲輪６・10は同じ谷戸の互いに向き合う位置にあり、高部丘陵を越えるか、裾部を巡って侵入した敵兵に対して、竪堀３の効果も相俟って防御を行う意図があったのであろう。曲輪10は北から南の方向へ延び、幅は約23m、奥行きは約2.5～４mと撥形状のやや不整形な長方形を指向した平面形を呈している。曲輪10の標高値は北端部で約36.8m、南端部34.7mを測り、平面図を見ても理解できるように、南に向かって緩やかに下がっていく。この曲輪と丘陵頂部（曲輪２）との高低差は約18.5m、曲輪６とは約16.5mを測る。曲輪10の後背は曲輪６の切岸となり、曲輪６の西斜面沿いの固めを行う。この曲輪10から曲輪６へは約44度の急傾斜で立ち上がる。曲輪６直下、丘陵裾部の標高値が約18m程度で、眼下の谷戸地形に侵入した敵兵の牽制・誘導と殲滅を意図している。遺構は土塁・柱穴等は確認できなかった。畑開墾時に消滅した可能性がある。ただし、遺物が北半部で多く出土しており、ここが曲輪として機能していた可能性を示している。かわらけの他に信楽の茶壺、古志戸呂の香炉が出土している。なお、曲輪10北端部が竪堀３の一部を削除しているが、これも後世の開墾に由来するものと考えている。

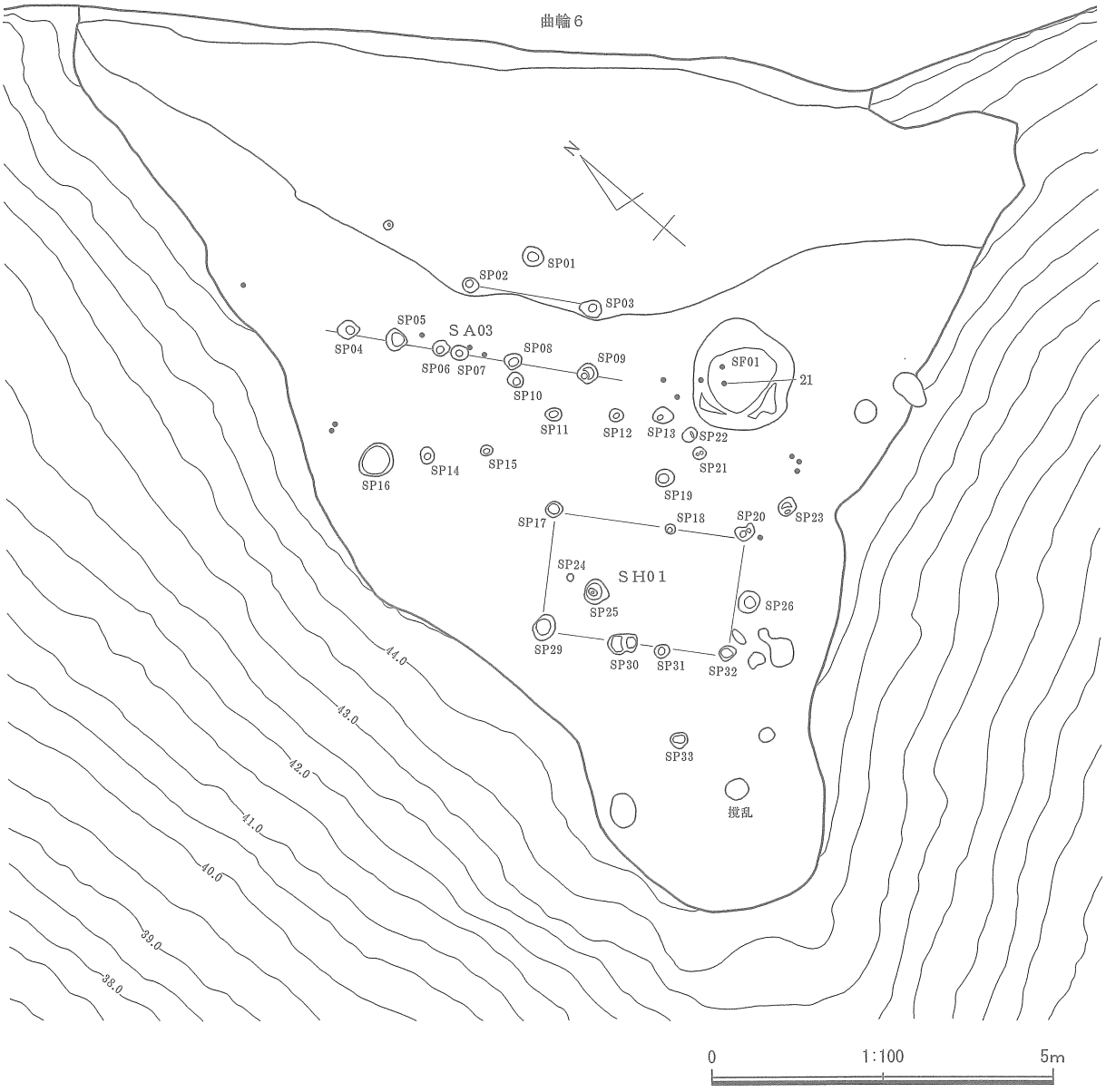
９　曲輪６（第17～19図　写真図版11・13）

曲輪６は曲輪２の南西側に位置する。庵原山地から延びる丘陵の最先端部で南西方向に派生した小尾根を利用した曲輪で、当該曲輪は曲輪17からＥ－30°－Ｓの方向、約55mの位置、城の中枢部脇を防御する機能を持つ。小尾根を利用した曲輪６の平面形はややいびつな三角形状を呈している。曲輪６西辺は約15.8m、南辺は約10.1mを測り、曲輪自体はＳ－40°－Ｗの方向へ突き出ている。曲輪上面でも先端部においては標高値約44m程度で、曲輪２に向かって徐々に標高値を上げていく。曲輪縁辺では土塁の痕跡を見出すことが出来なかったが、33基の柱穴等を検出した。曲輪６の西辺は切岸が設けられ、曲輪10へと接続する。曲輪先端部では崩落由来するのかややテラス状の地形も見られるが、標高42m付近から急に傾斜する。掘削調査時にはこの部分が急傾斜であったため、地山を出しきれなかったことから、垂

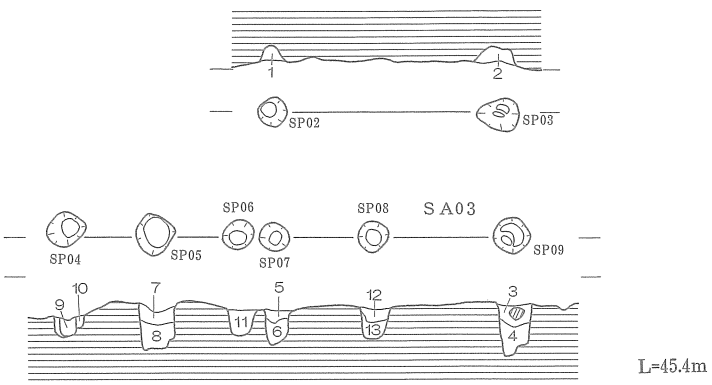
第17図　曲輪6・10実測図

直に近い崖地形があったのかもしれない。曲輪南辺の切岸は自然地形に左右され、標高39m付近でやや緩やかな斜面となる。この付近から畑として利用されていたかもしれない。この付近には南西に延びる細い溝と、L字状に屈曲する大きな溝が見られる。同様のL字状の溝は曲輪５南側にも見られ、曲輪５・曲輪６直下に位置する平坦地（畑）として維持するための竹の根切り溝である可能性が高く、件のL字状の溝は遺構として取り扱いはしていない。

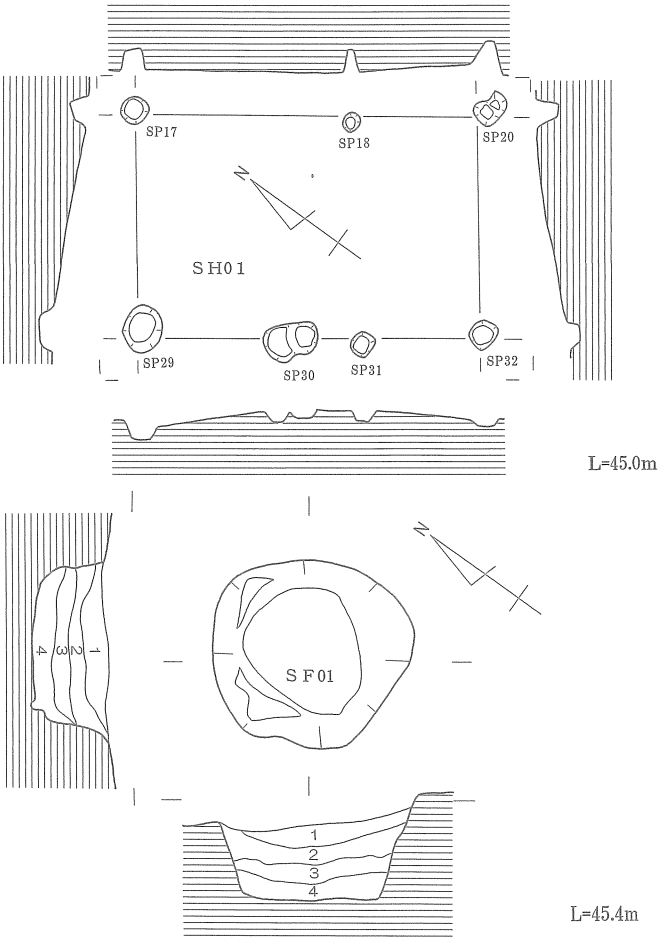
曲輪に係る遺構のうち掘立柱建物、柵の存在が推定された。SH01は曲輪６の南西寄りに位置し、長辺2.7m、短辺1.8mを測る小規模な建物である。規模から勘案しても仮小屋、倉庫等など用途は限定されよう。SP17・18・20・29・31・32で構成される。柱穴は直径約25㎝程度、深さは約10～30㎝で一定しない。長辺の方向はN－31°－Wで曲輪６後背の切岸方向や後述するSA03の軸方向とほぼ同一である。SA03はSF01に隣接する。SP04・SP05・SP07・SP08・SP09で構成される。柱間間隔は北から0.8m、1.0m、0.8m、1.2mである。柱穴は直径約30㎝程度であるが、深さも約10～25㎝程度で一定しない。SP02・03



第18図　曲輪６平面図



1. 10YR5/8 黄褐色シルトにφ1 ㎜程度の灰白色礫が少量混じる
2. 10YR5/8 黄褐色シルトにφ1 ㎜程度の灰白色礫が少量混じる 炭化物あり
3. 10YR5/8 黄褐色シルトにφ1 ㎜程度の灰白色礫が少量混じる
4. 10YR5/8 黄褐色シルトにφ10 ㎜程度の灰白色礫が少量混じる
5. 10YR5/8 黄褐色シルトにφ1 ㎜程度の灰白色礫が少量混じる 炭化物あり
6. 10YR5/8 黄褐色シルトにφ1 ㎜程度の灰白色礫が少量混じる
7. 10YR4/4 褐色シルトに黄褐色シルトブロックが混じる 少量の炭化物あり
8. 10YR5/8 黄褐色シルト　土器あり
9. 炭化した柱根
10. 10YR5/4 にぶい黄褐色シルト　炭化物あり
11. 10YR5/4 にぶい黄褐色シルト　炭化物あり
12. 10YR5/6 黄褐色シルトにφ10 ㎜程度の灰白色礫が混じる 炭化物あり
13. 10YR5/6 黄褐色シルトにφ1 ㎜程度の灰白色礫が混じる



1. 10YR5/6 黄褐色シルトにφ10 ㎜程度の浅黄橙色礫がまばらに混じる　炭化物あり
2. 10YR5/6 黄褐色シルトにφ20 ㎜程度の浅黄橙色・灰白色礫が多く混じる
3. 10YR5/6 にぶい黄褐色シルトにφ10 ㎜程度の明黄褐色礫が多く混じる
4. 10YR5/4 にぶい黄褐色粘質シルトにφ30 ㎜程度の砂質礫が混じる

0　1:60　3m

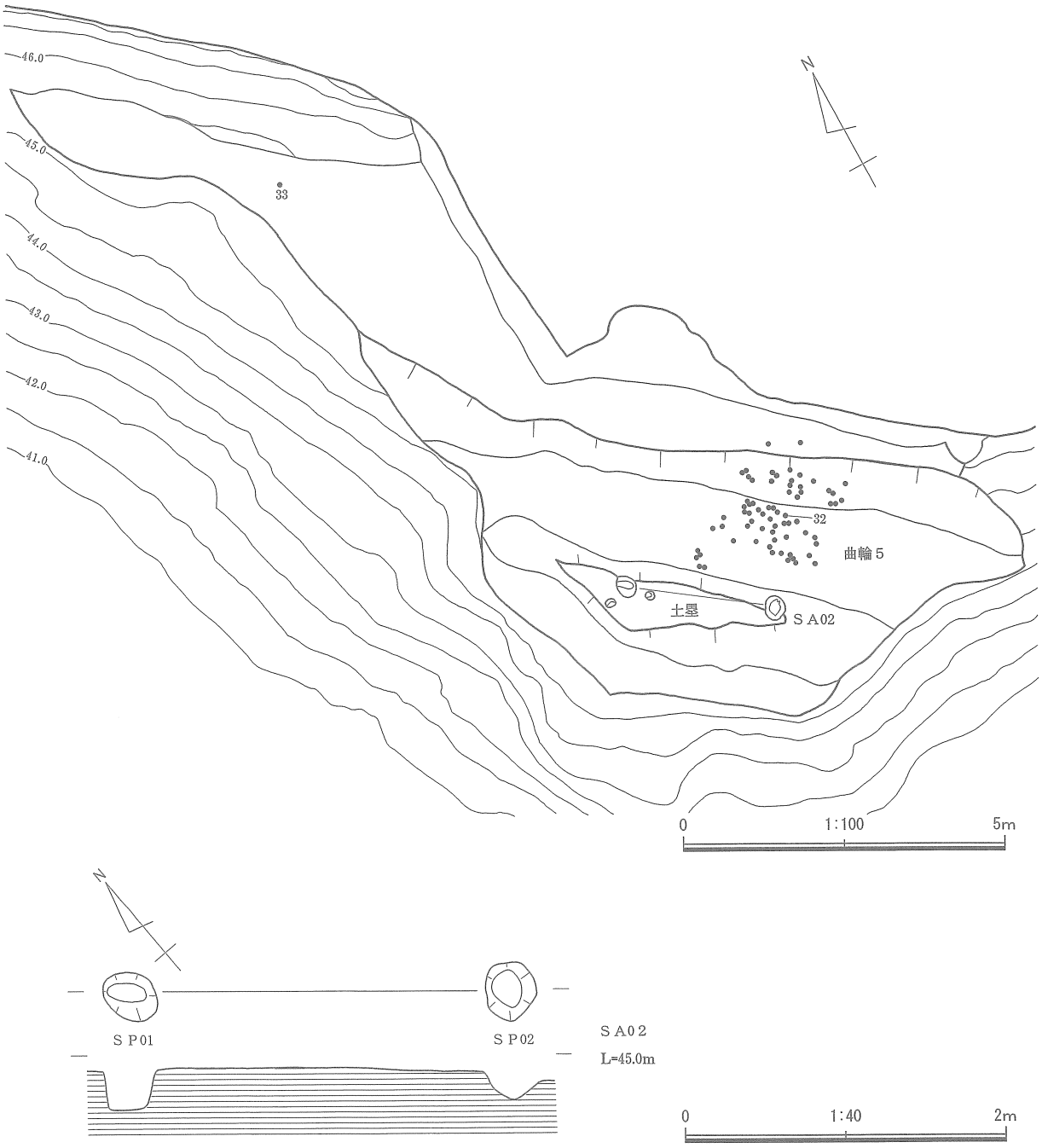
第19図　曲輪６建物跡等実測図

は曲輪上面と切岸との境界部にある。同一方向であることからSA03に伴う可能性がある。

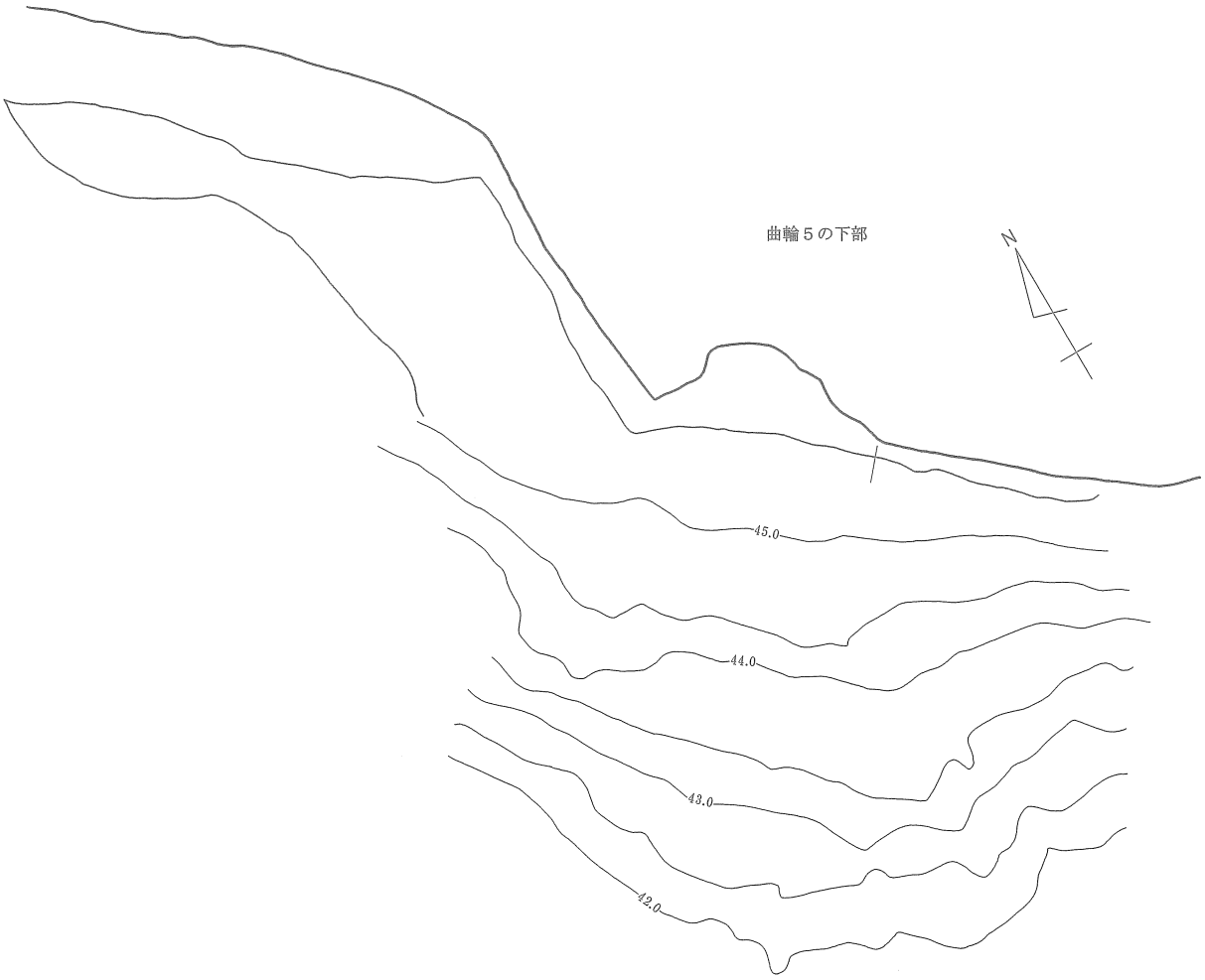
他に柱穴が多数検出されているが、建物跡として認めうる柱穴の並びは確認できなかった。なお、SH01東に土坑が１基検出されている。直径約1.5m、深さは約0.3mである。建物跡と同時に機能していた可能性がある。遺物はかわらけが多いが、常滑・古瀬戸の擂鉢や青磁、白磁が散見される。

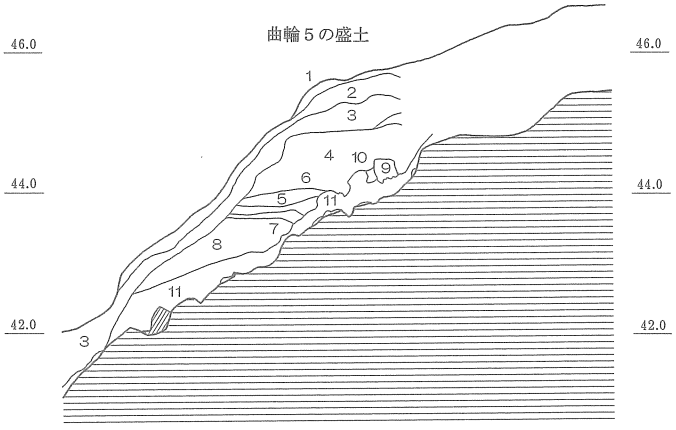
10　曲輪５（第20・21図　写真図版14・15）

曲輪５は曲輪２・３の境界側面に位置する。曲輪６同様、庵原山地から延びる丘陵の最先端部で南西方向に派生した小尾根を利用している。曲輪２・３からは一段低い位置にあり、南西側面を防御してい



第20図　曲輪５実測図(1)

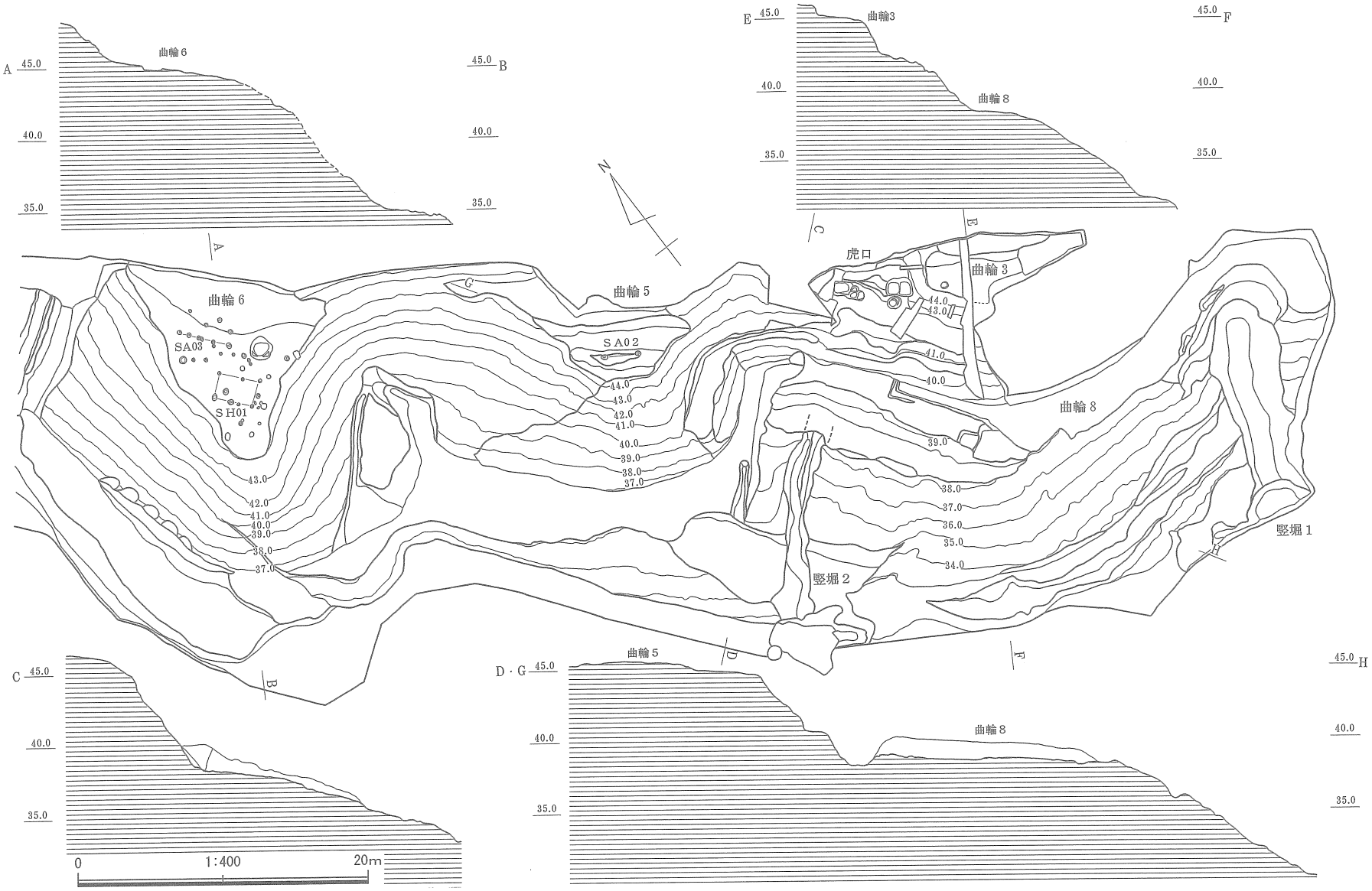




1. 10YR5/6 黄褐色シルトにφ2 ㎜程度の浅黄橙色礫が混じる
2. 10YR4/6 褐色シルトにφ1 ㎜程度の灰白色礫が混じる
3. 10YR5/8 黄褐色シルトにφ2 ㎜程度の灰白色礫が混じる
4. 5YR4/8　赤褐色シルトにφ1 ㎜程度の灰白色礫が多く混じり、φ50 ㎜程度の浅黄橙色礫がまばらに混じる
5. 5YR5/8　明赤褐色シルトにφ2 ㎜程度の灰白色礫がまばらに混じる
6. 5YR4/8　赤褐色シルトにφ20 ㎜程度の浅黄橙色礫が混じる
7. 5YR5/8　明赤褐色シルトにφ2 ㎜程度の灰白色礫が混じる
8. 5YR5/8　明赤褐色シルトにφ50 ㎜程度の浅黄橙色礫が混じる
9. 5YR5/8　明赤褐色シルトにφ30 ㎜程度の浅黄橙色礫が多く混じる
10. 5YR5/8　明赤褐色シルトブロック
11. 5YR5/8　明赤褐色シルトにφ80 ㎜程度の浅黄橙色礫が多く混じる

0　1:100　5m

第21図　曲輪５実測図(2)



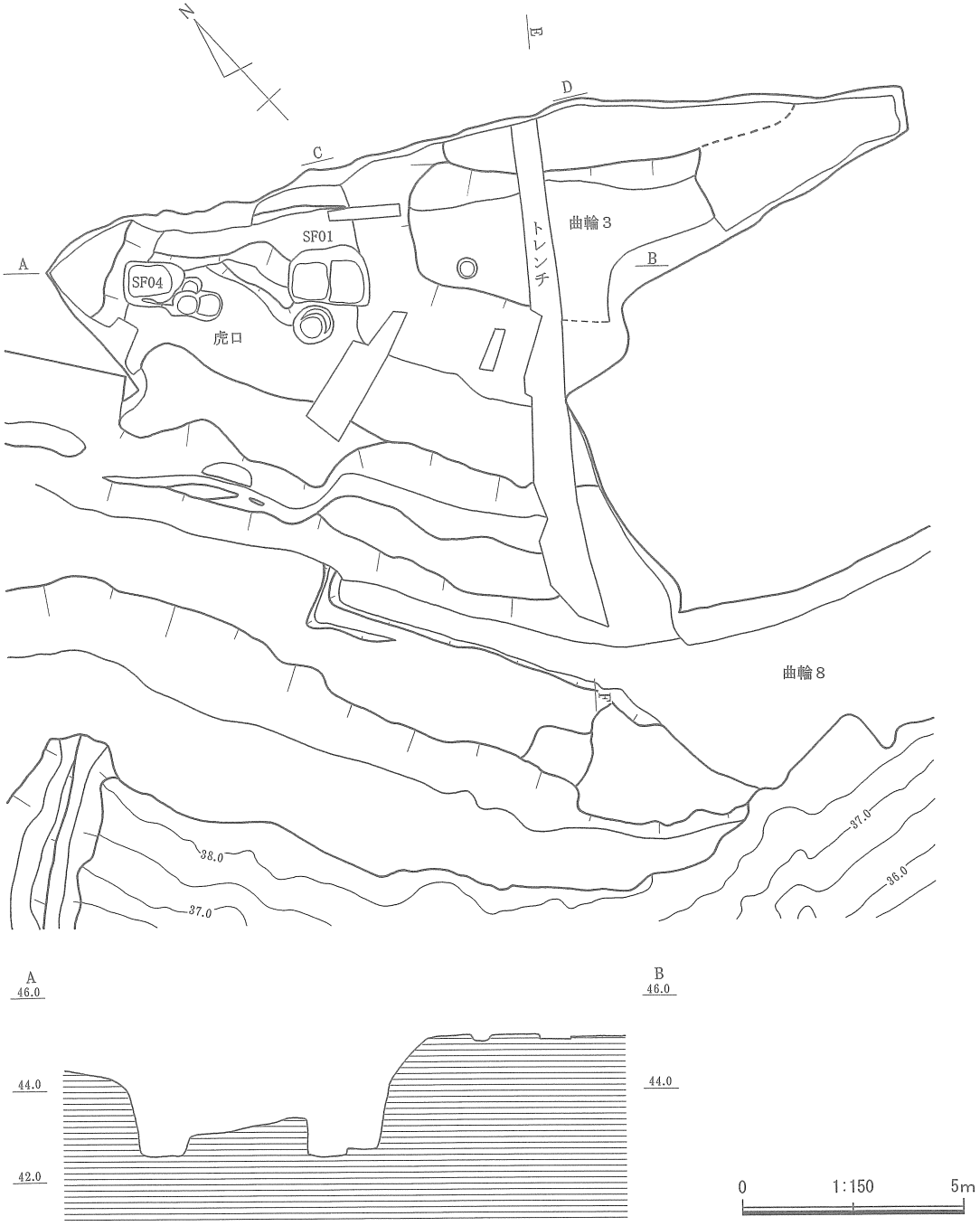
第22図　調査区南半部実測図

る。また曲輪８を見下ろす位置にもあるため、曲輪８に侵入した敵兵を牽制する働きもあったのかもしれない。一方、竪堀３に隣接し、かつ柱穴跡が多数検出された曲輪６とは異なり、規模は小さい。この曲輪はＳ－42°－Ｗの方向へ延びる。平面は逆台形様である。切岸の傾斜角は曲輪最先端部からは約42度を測る。曲輪は２段構成をしており、曲輪下段先端部には土塁が残存する。曲輪５上段の標高値は約45.7～45.3ｍで南西へと傾斜する。調査区外ではあるが上段はさらに北西へと広がる可能性を有している。上段と下段との境界は高低差約0.6ｍ程度の段差が見られる。曲輪５下段には土塁基礎部が残存する。土塁は長さ約6.5ｍ、幅は約1.4ｍ、高低差は約40㎝である。土塁頂部は概ね平坦面をなし、長さ約3.4ｍ、幅約0.7ｍを測る。土塁上には柱穴跡が確認され、SA02とした。柱穴SP01～02の間隔は約２ｍを測る。共に土塁上端面の縁辺にある。径は0.2～0.3ｍである。曲輪５南東側には廃城後に畑として開墾された痕跡であろうか、テラス状の地形がある。また竹の根切り溝と思しきＬ字状をなす溝が見られる。城機能時にいかなる地形となっていたかは判然としない。遺物は土塁より上段側に集中して出土している。かわらけが主体であるが、古瀬戸平碗や擂鉢が出土している。輸入陶磁器（青磁、白磁か）も散見される。また、この曲輪は第21図の土層断面図でも理解できるように、地山に明赤褐色シルトを盛土としているのが、理解される。盛土を施す以前の地形が第21図上段の平面図である。土塁付近を中心に盛土を行ったのが理解できる。

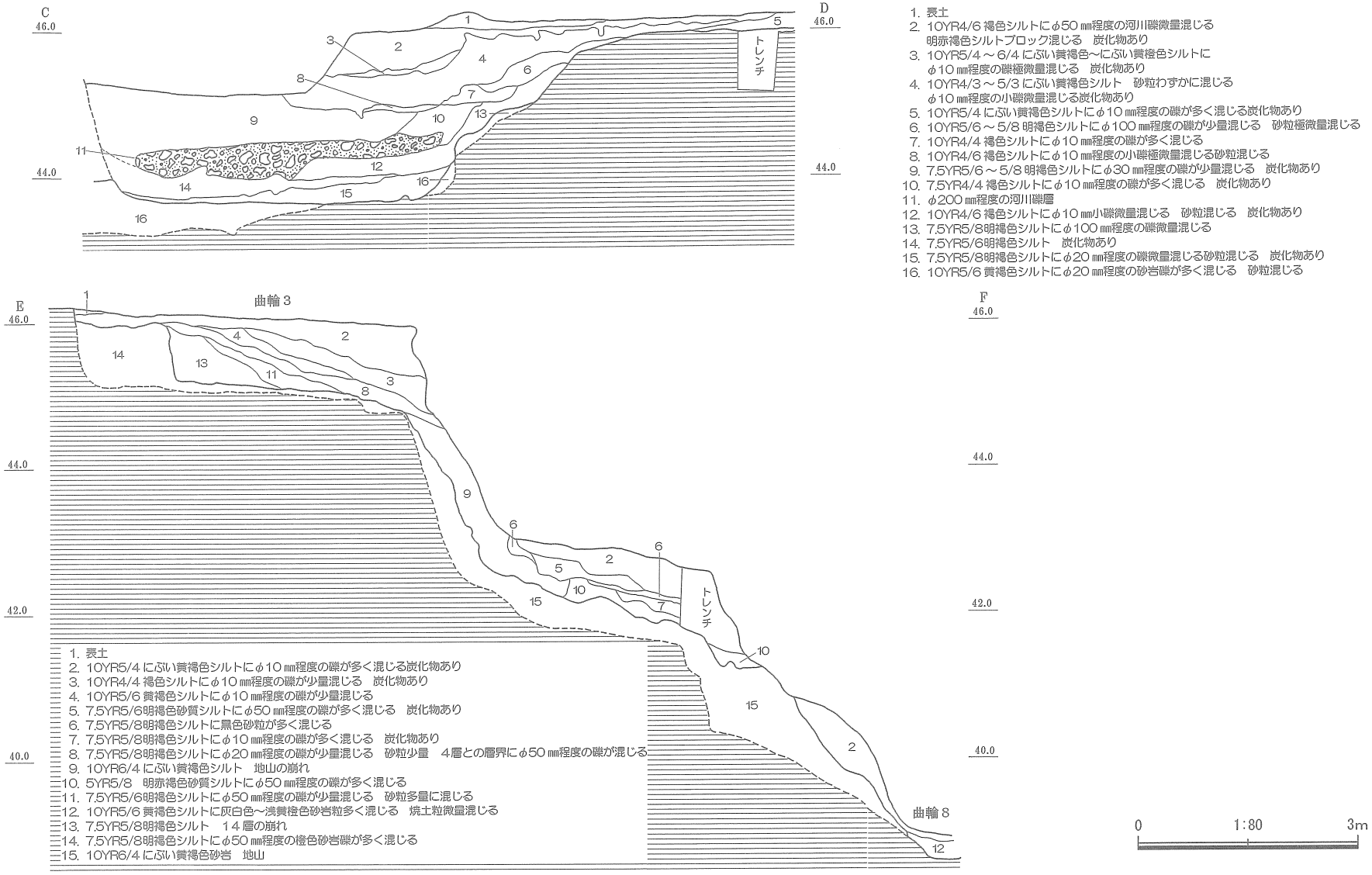
11　曲輪８（第22図　写真図版14・16）

曲輪８は曲輪３の南西縁辺に位置し、丘陵頂部の先端部に位置する曲輪３・虎口の防御と、城内道の機能を持っていたものと考えられる。城の最先端部には曲輪３より一段下がる曲輪４が設けられているが、今回の調査では曲輪８との境界は判然としなかったが、曲輪４と曲輪８の切岸の方向が変わる竪堀１付近を境界として考えてよいのだろう。一方、曲輪８の西端は判然とせず、畑開墾の影響を受けたと考えられる平坦面が継続する。この継続する平坦面は上段・下段に分かれる。この平坦面は曲輪５南東に位置するＬ字状の溝まで延びている。上段面は長さ約16ｍ、標高約38ｍから緩やかに傾斜し、約40ｍでＬ字状溝と接触する。上段面には長さ約８ｍほどの直線的な溝が曲輪３の切岸に沿って確認されている。掘り直されたようで同規模の溝が２条重複していた。この溝も畑開墾時に係るものか。下段面の長さは上段面とほぼ同じで、標高約37.8ｍから緩やかに傾斜し、約38.9ｍでＬ字状溝と接触する。上段面と下段面との高低差は最高値で約1.3ｍである。曲輪５南東切岸に見られるテラス状の地形の標高値と上段面の標高値がほぼ同じであるため、両者は一連のもので、畑開墾の所為であろう。下段面は竪堀２の上半部を破壊しており、下断面は曲輪８を畑開墾のため拡幅・造成した可能性があろう。従って曲輪８本来の姿を保つのは竪堀１から西約12～13ｍの範囲に限られ、それより西の形状は曲輪本来のものでは無い。この曲輪８の方向はやや湾曲するが概ね東西方向に延びている。上段・下段に分かれる継続する平坦面はＮ－24°－Ｗの方向へと延びる。この上下段に分割される地点は、丁度地形の転換点にある。なお、曲輪８からは土塁や柱穴等は確認されていない。

曲輪８付近ではかわらけの他に、古瀬戸の天目茶碗や香炉が出土している。ただし江戸期の美濃産の灯明具が出土しているため、中世遺物のほとんどは廃城後の開墾等の影響を受けており、曲輪１・２・５方向からの流れ込み等、原位置を留めていないものと考えられる。



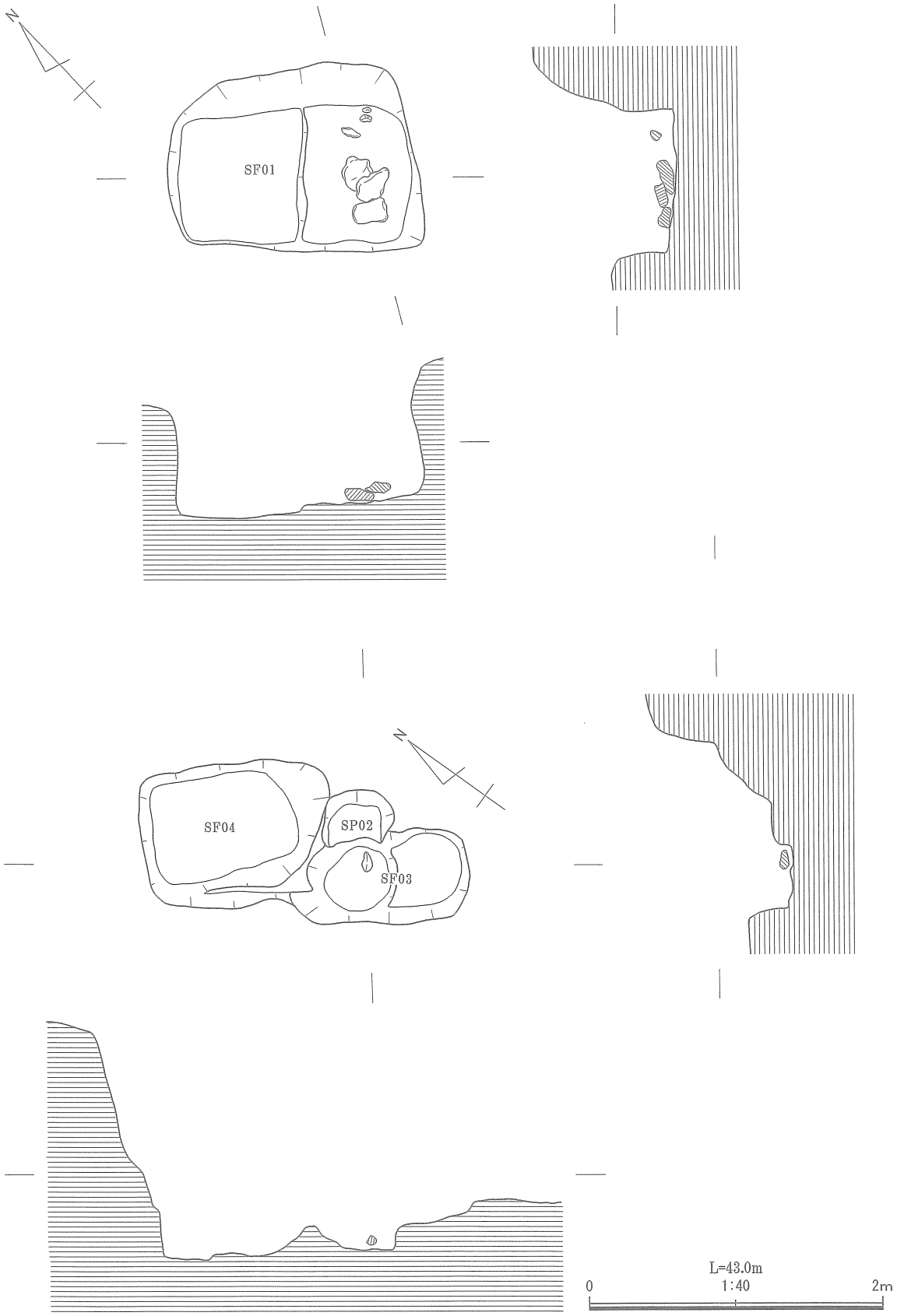
第23図　曲輪３、虎口付近実測図



1. 表土
2. 10YR4/6 褐色シルトにφ50 ㎜程度の河川礫微量混じる
明赤褐色シルトブロック混じる　炭化物あり
3. 10YR5/4 ～ 6/4 にぶい黄褐色～にぶい黄橙色シルトに
φ10 ㎜程度の礫極微量混じる　炭化物あり
4. 10YR4/3 ～ 5/3 にぶい黄褐色シルト　砂粒わずかに混じる
φ10 ㎜程度の小礫微量混じる炭化物あり
5. 10YR5/4 にぶい黄褐色シルトにφ10 ㎜程度の礫が多く混じる炭化物あり
6. 10YR5/6 ～ 5/8 明褐色シルトにφ100 ㎜程度の礫が少量混じる　砂粒極微量混じる
7. 10YR4/4 褐色シルトにφ10 ㎜程度の礫が多く混じる
8. 10YR4/6 褐色シルトにφ10 ㎜程度の小礫極微量混じる砂粒混じる
9. 7.5YR5/6 ～ 5/8 明褐色シルトにφ30 ㎜程度の礫が少量混じる　炭化物あり
10. 7.5YR4/4 褐色シルトにφ10 ㎜程度の礫が多く混じる　炭化物あり
11. φ200 ㎜程度の河川礫層
12. 10YR4/6 褐色シルトにφ10 ㎜小礫微量混じる　砂粒混じる　炭化物あり
13. 7.5YR5/8明褐色シルトにφ100 ㎜程度の礫微量混じる
14. 7.5YR5/6明褐色シルト　炭化物あり
15. 7.5YR5/8明褐色シルトにφ20 ㎜程度の礫微量混じる砂粒混じる　炭化物あり
16. 10YR5/6 黄褐色シルトにφ20 ㎜程度の砂岩礫が多く混じる　砂粒混じる

1. 表土
2. 10YR5/4 にぶい黄褐色シルトにφ10 ㎜程度の礫が多く混じる炭化物あり
3. 10YR4/4 褐色シルトにφ10 ㎜程度の礫が少量混じる　炭化物あり
4. 10YR5/6 黄褐色シルトにφ10 ㎜程度の礫が少量混じる
5. 7.5YR5/6明褐色砂質シルトにφ50 ㎜程度の礫が多く混じる　炭化物あり
6. 7.5YR5/8明褐色シルトに黒色砂粒が多く混じる
7. 7.5YR5/8明褐色シルトにφ10 ㎜程度の礫が多く混じる　炭化物あり
8. 7.5YR5/8明褐色シルトにφ20 ㎜程度の礫が少量混じる　砂粒少量　４層との層界にφ50 ㎜程度の礫が混じる
9. 10YR6/4 にぶい黄褐色シルト　地山の崩れ
10. 5YR5/8　明赤褐色砂質シルトにφ50 ㎜程度の礫が多く混じる
11. 7.5YR5/6明褐色シルトにφ50 ㎜程度の礫が少量混じる　砂粒多量に混じる
12. 10YR5/6 黄褐色シルトに灰白色～淡黄橙色砂岩粒多く混じる　焼土粒微量混じる
13. 7.5YR5/8明褐色シルト　１４層の崩れ
14. 7.5YR5/8明褐色シルトにφ50 ㎜程度の橙色砂岩礫が多く混じる
15. 10YR6/4 にぶい黄褐色砂岩　地山

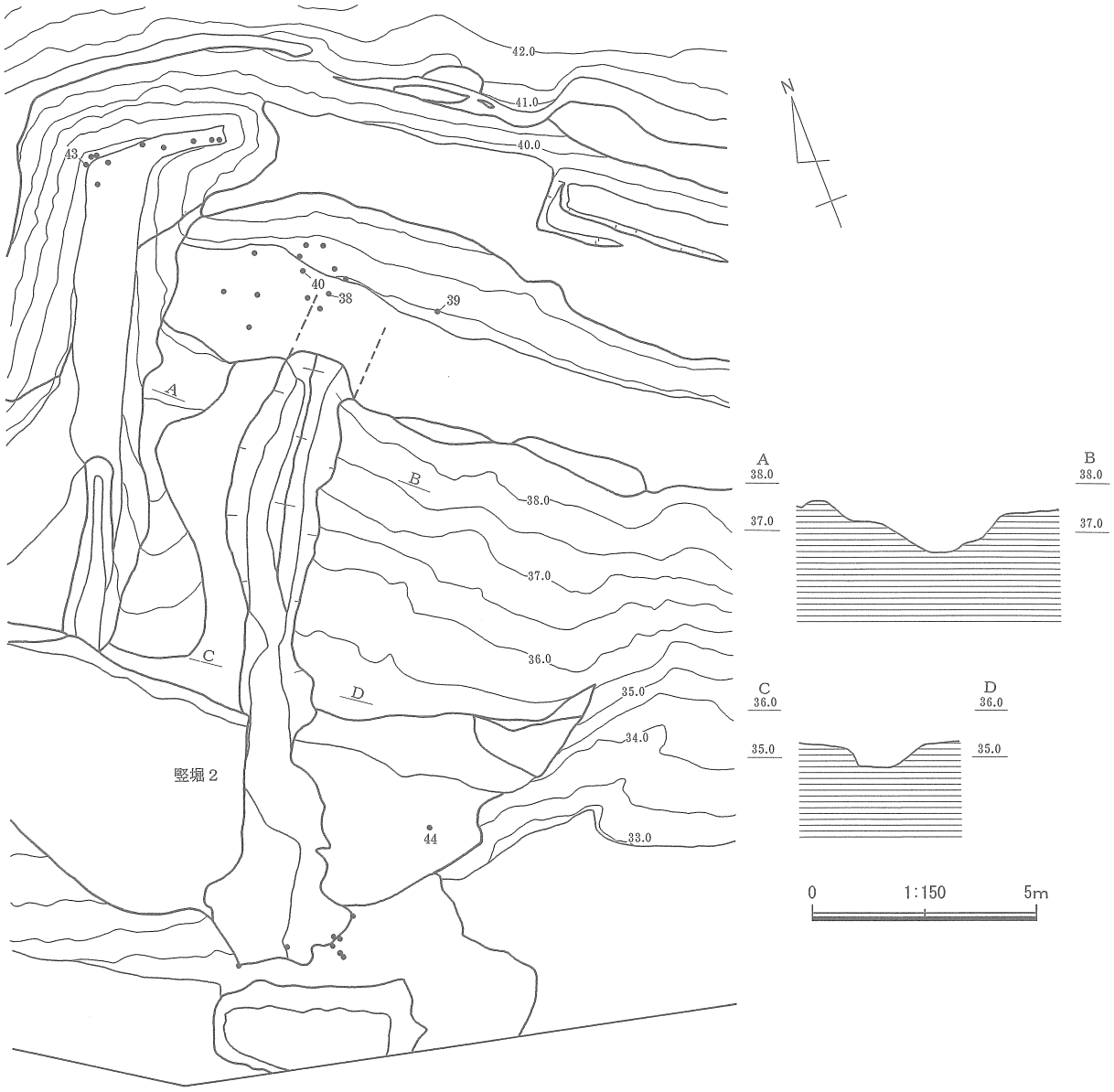
第24図　曲輪３、虎口付近土層図



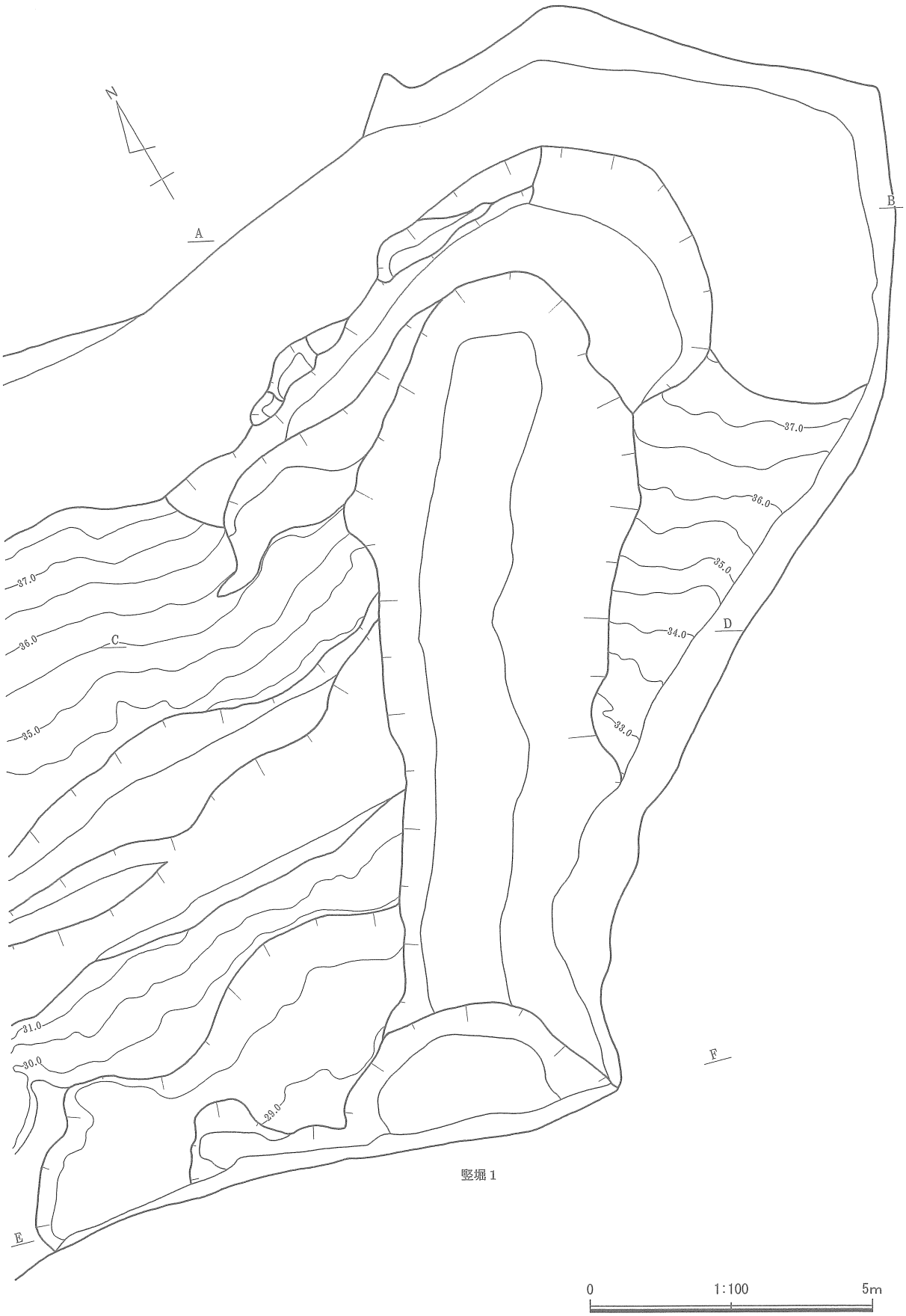
第25図　虎口付近柱穴実測図

12　曲輪３（第23～25図　写真図版18・19・20）

曲輪３は南アルプス山地の末端、庵原山地から派生する丘陵の先端にある。曲輪１～３で構成される城の主要曲輪群の南東にあり、城最先端部の曲輪４を見下ろす位置にある。山切川側は急傾斜であるためか、小曲輪の存在は認められないが、南から南西にかけての斜面側は傾斜が幾分か緩かったためか、曲輪４、８や９のような小規模な防衛施設を設えたのであろう。曲輪３からは清水港方向の展望が開け、山切川沿いに進軍、展開する敵兵の動きは一目瞭然であったと考えられる。今回の調査では曲輪の一部のみであり、また第３章でも述べたように自然崩落により調査不能となった箇所がある。附図１にあるように調査前の地形図では、曲輪３は曲輪５との境となる切岸が直線的に延びるが、曲輪３南半部はやや丸みを帯びた平面形をなしている。その理由は矩形に掘り抜かれた箇所の存在によるものである。調査した曲輪３は上段、下段の２面に分かれる。上段は標高値約45.9mを測る平坦面である。下段は標高値約45mを測る平坦面で、上段、下段の高低差は約0.9mである。下段面には柱穴跡が１基確認できる。直径は約40cmで、深さは約15cmを測る。下段面の東半部は崩落の危険性が生じていたため、未掘削箇所

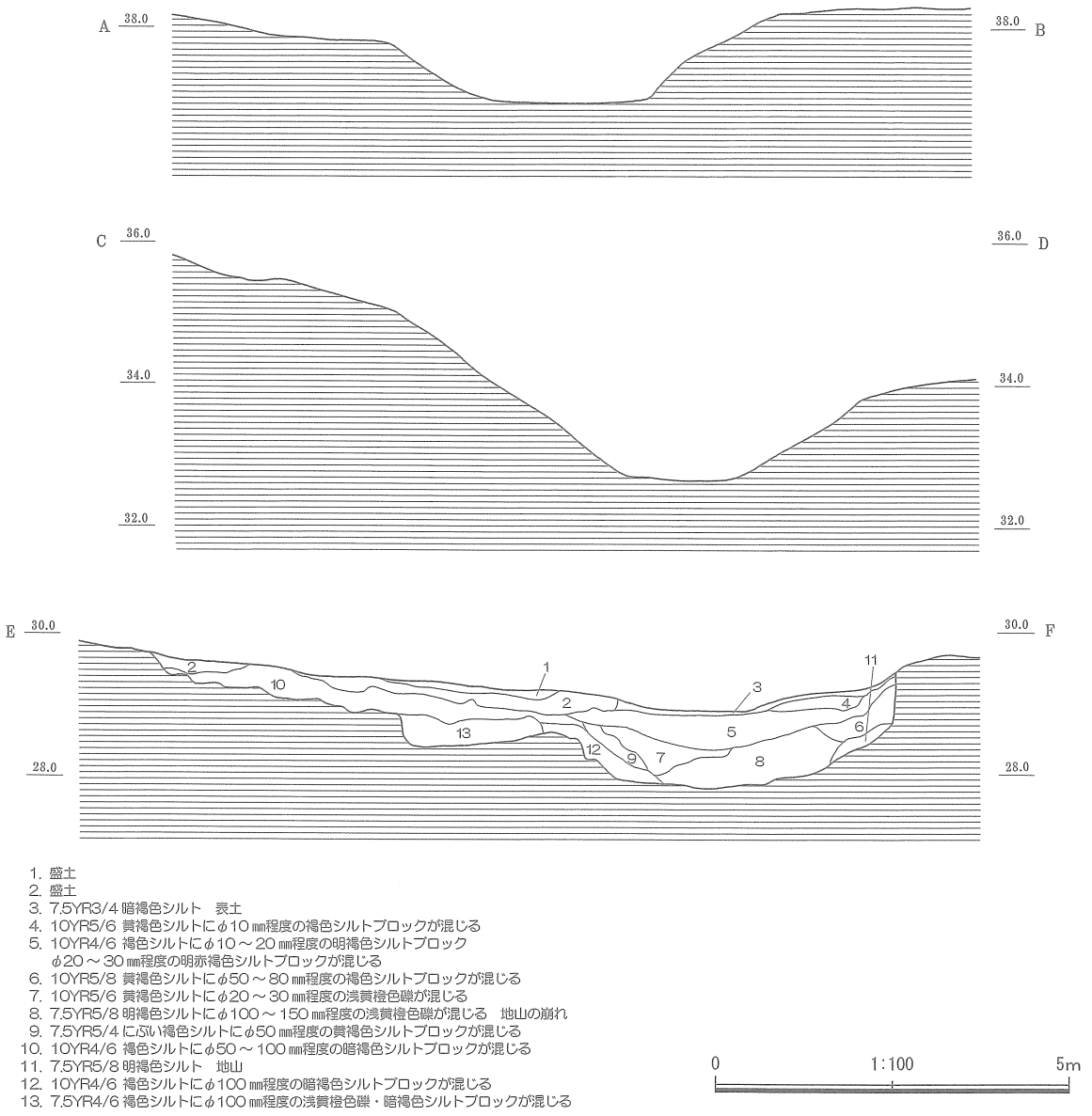


第26図　竪堀２実測図



第27図　竪堀１平面図

を残している。第24図上段の断面図は曲輪３西側の地形を示している。曲輪３の西側は約２ｍの高低差がある。この地形に堆積した土層の中位付近に河川礫が大量に堆積しており、この地形自体人為的に埋められた可能性を持つ。約38度の傾斜を持ち、裾には柱穴跡が散見される。SF01の平面形は長方形を呈し、長辺約1.7m、短辺約1.2mを測る。底面は上段、下段の２面あり、底面のほぼ中央部に高低差約７㎝程度の段差が認められる。底面上段には礫が見られた。壁面は底面からほぼ垂直に立ち上げている。またSF04の平面形もほぼ長方形で、長辺約1.2m、短辺約0.9mを測る。隣接する小柱穴と重複している。平面は平坦である。SF01とSF04との間は平坦でなく、若干曲輪３の方向に立ち上がる。階段状の施設は認められない。この遺構群は門等の施設であった可能性がある。ここを門として捉えるならば、当該個所が所謂「虎口」であり、城内道の存在が推定されることになる。第24図下段の断面図を見ると、曲輪３から曲輪８に接続する切岸中位付近にテラス状の地形が認められる。標高約42m付近に認められるこの地形は、崩落のため明らかにすることが出来なかったが、断面図では標高約42m程度、調査前の地形（附図１）は弧状を描くようにテラス状の地形が認められる。この平坦面の幅は約1.5mほどである。お



1. 盛土
2. 盛土
3. 7.5YR3/4 暗褐色シルト　表土
4. 10YR5/6 黄褐色シルトにφ10㎜程度の褐色シルトブロックが混じる
5. 10YR4/6 褐色シルトにφ10～20㎜程度の明褐色シルトブロック
φ20～30㎜程度の明赤褐色シルトブロックが混じる
6. 10YR5/8 黄褐色シルトにφ50～80㎜程度の褐色シルトブロックが混じる
7. 10YR5/6 黄褐色シルトにφ20～30㎜程度の淺黄橙色礫が混じる
8. 7.5YR5/8 明褐色シルトにφ100～150㎜程度の淺黄橙色礫が混じる　地山の崩れ
9. 7.5YR5/4 にぶい褐色シルトにφ50㎜程度の黄褐色シルトブロックが混じる
10. 10YR4/6 褐色シルトにφ50～100㎜程度の暗褐色シルトブロックが混じる
11. 7.5YR5/8 明褐色シルト　地山
12. 10YR4/6 褐色シルトにφ100㎜程度の暗褐色シルトブロックが混じる
13. 7.5YR4/6 褐色シルトにφ100㎜程度の淺黄橙色礫・暗褐色シルトブロックが混じる

0　1:100　5m

第28図　竪堀１土層図

そらく曲輪８からこのテラス状地形を経て虎口に至るものであろう。なお当該曲輪付近からは遺物が出土していない。

13　竪堀２（第26図　写真図版14・16）

竪堀２は虎口付近の南西、曲輪５の南側約10mの地点に位置する。これは位置的に虎口があったと推定される箇所の真下、また、曲輪５南側切岸に位置するため、後述する竪堀１の機能と相俟って、城南半部の防御性を高めている。この竪堀は、標高値約32.5m付近から検出されはじめ、N－48°－Eの方向へ延びる。標高値33.5m付近には、畑開墾によると考えられる平坦面が広がる。この畑による撹乱のため竪堀は、浅い掘りこみとして確認されている。幅は約2.5m程度である。約34.5m付近から畑の影響を受けていない。幅約1.7m、深さは約0.5m程度である。約35.5m付近から底面が２段となるため、時間差をおいて改修された可能性がある。この竪堀は、標高値約38.3mで曲輪８付近の畑開墾により、堀上半部が失われている。本来は、虎口直下まで延びていた可能性がある。竪堀２付近で出土した遺物はいずれも竪堀下位付近に分布しており、畑耕作土の影響も受けているものと考えられる。

14　曲輪４・竪堀１（第27・28図　写真図版17）

曲輪４・竪堀１は、今回第二東名に係る調査で検出された南東端の遺構である。前者は曲輪８に継続し、城の最先端部の防御を受け持つ。曲輪３より見下ろされる位置にあり、また、城内道の機能を持っていたと推定される曲輪８の前衛ともなるため、重要な位置にあると考えられる。一方、竪堀１はその曲輪４と曲輪８との境界部に延びている。両者の切岸の方向の転換点にこの竪堀が位置しているため、山切川沿いから、城南西側に迂回・侵入してくる敵兵を牽制する機能が期待されたものかもしれない。附図の調査前地形図にも読み取れるように、竪堀１の存在が地表に表れており、その遺構の大きさが理解できるであろう。本来、別種の遺構である曲輪４と竪堀１であるが、ここでは一括して述べてみたい。

曲輪４の平面形は三角形を呈し、N－35°－Eの方向に延びる。未調査区域が大半であるが、面積は凡そ8.5㎡程度あるものと考えられる。東辺は直線的であるが、東辺直下には蜜柑畑の痕跡と思しき小段が認められるので、近代に手を加えられているのかもしれない。調査の結果、標高値約38.2m程度の平坦面が検出されている。土塁等の施設は検出されていない。曲輪４の未調査区域の後背は切り立った曲輪３の切岸がある。土塁状の高まりは判然としなかった。

竪堀１は曲輪４・８、そして曲輪３の３者が接近する位置に設けられている。この竪堀は曲輪４・８の平坦面からテラス状の地形を設けて、直線的に丘陵裾部方向へ延びており、テラス状の地形と曲輪３切岸との境は幅1.5m程度の通路状を呈している。テラス状の地形は標高値約36.5～37mを測る。この地形の平面形は弧状をなし、竪堀１の上端部を包むように設えられている。曲輪平坦部とテラス状の地形との高低差は約１m程度で、柱穴等は確認されていない。竪堀の本体は、標高値約22.5mから検出されはじめ、標高36.5m付近で件のテラス状の地形へと継続する。竪堀中位付近までは、片方の上場が検出されていないので、竪堀の幅は計測不能であるが、33.0m付近で約3.8m、テラス状地形と接触する標高値36.5m付近では、約５mを測る。断面は「箱堀」状である。遺物は江戸期の肥前碗が竪堀上端部のテラス状の地形で出土している。曲輪４付近で江戸期に畑が開墾されていた可能性がある。

第３節　出土遺物

庵原城跡から出土した遺物は土器・石製品・金属製品の３種に大別される。そのうち主体となるのは土器である。土器については出土地点毎に第29・30図で示し、石製品・金属製品は一括して第31図に掲載した。

１　土　器

今回の庵原城の発掘調査において出土した土器は第４表で示すように787点を数える。このうち主体を占めるのが、中世のかわらけで全体の約83％である。しかし破片としては細片資料が多く、実測可能な資料が限定された。中世に位置づけられる資料のみで考えるならば、全体の約92％がかわらけである。その次に中世土器として注目されるのが、古瀬戸資料である。古瀬戸の分類にあたり藤澤良祐氏（愛知学院大学）に指導を受け、第５表には出土した古瀬戸と古志戸呂資料の器種と様式を示した。

第５表でも理解できるように庵原城跡から出土した古瀬戸製品は、古瀬戸後期様式のⅣ期古～新段階（後Ⅳ古～新）の製品が集中する。時期的には15世紀中葉から後葉にあたる。擂鉢の中に15世紀末～16世紀前葉にかかる大窯第１段階に近い資料が、若干見られるのみである。また古志戸呂製品も古瀬戸の同時期の製品が出土している。古志戸呂の分類にあたっては河合修氏の指導を受けている。

常滑製品は甕・鉢が出土しているが、決して量は多くない。いずれも細片資料で、15～16世紀代の資料と考えられる。なお分類にあたっては中野晴久氏（常滑市民俗資料館）に指導を受けている。

輸入陶磁器は破片数で12点出土している。輸入陶磁器とは日本国へ輸入された他国産の陶磁器を示し、貿易陶磁器・舶載陶磁器とも呼称される。分類案は菊川町教育委員会2000年『横地城跡総合調査報告書 資料編』に基づく。出土したのは青磁・白磁・染付の３種で碗・皿に限定される。四耳壺や盤類は今回の調査では出土していない。これらの資料の中には13世紀代に遡る資料も散見されたが、主体は15世紀と考えたい。13世紀代の資料は城内で伝世されたものと考える。

第４表　出土土器　種別点数一覧表

縄文～古墳時代	古　代	古瀬戸	常　滑	志戸呂	信　楽	近世瀬戸・美濃	肥　前	輸入陶磁器	近代等	かわらけ	合　計
9	1	29	4	3	2	22	3	12	48	654	787
1.14%	0.13%	3.68%	0.51%	0.38%	0.25%	2.80%	0.38%	1.52%	6.10%	83.10%	100%

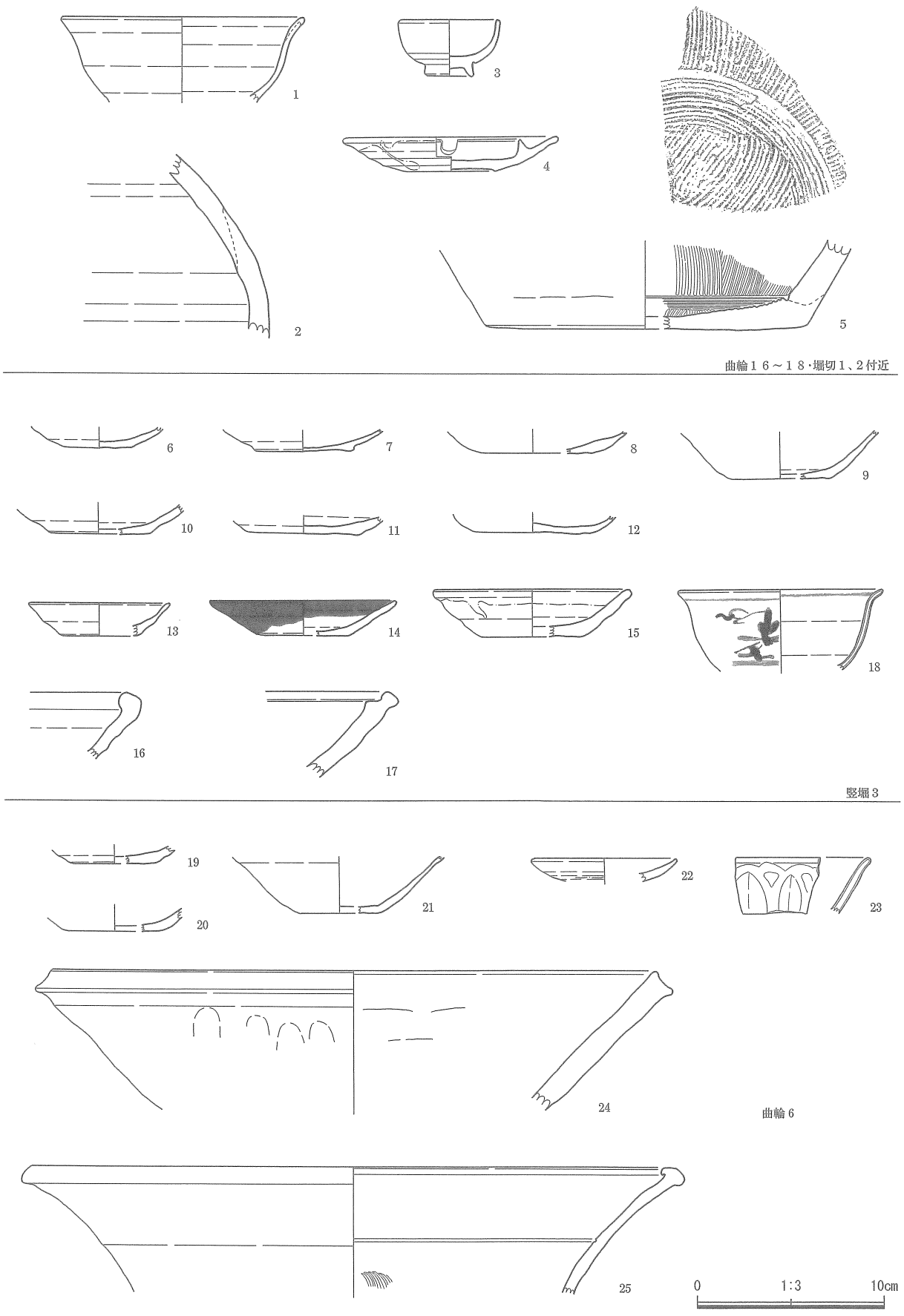
第５表　出土古瀬戸・志戸呂製品破片数集計表

産地	器種名	古瀬戸前期				古瀬戸中期				古瀬戸後期					古瀬戸合計	古瀬戸～大窯	大窯製品				大窯合計	合計
		Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ古	Ⅳ新			1	2	3	4		
古瀬戸	天目茶碗													1	2							2
												1										
	灰釉平碗												2		2							2
	灰釉縁釉小皿											1			2							2
														1								
	鉄釉縁釉小皿												4		4							4
	灰釉盤類											1			1							1
	擂　鉢													12	12	2						14
	鉄釉祖母懐茶壺											1			1							1
	鉄釉口広有耳壺											1			1							1
	灰釉袴腰形香炉													1	1							1
	合　計											2			26	2						28
													6									
														15								
												3										
志戸呂	鉄釉袴腰形香炉													2	2							2
	甕　類												1		1							1
	合　計													2	3							3
													1									

①曲輪16～18・堀切１、２付近（第29図）　１～５は曲輪16～18・堀切１、２付近で出土した土器である。１は灰釉陶器である。碗である。口縁部から体部下位が残存した破片資料である。体部中位付近で内湾し、口縁部で軽く外反させる。口縁端部は丸く仕上げている。東濃のH72窯式か。曲輪18から出土している。２は常滑の甕である。甕の肩部の破片資料である。外面は赤褐色を呈し、堅緻な焼き上がりである。堀切２付近から出土している。堀切２ではこの他に古瀬戸後Ⅲ～Ⅳ古の口広有耳壺の細片が出土している。３・４は近世美濃の製品である。３は小碗である。体部は内湾して立ち上がり、口縁端部は丸く仕上げている。内外面ともに灰釉が施されている。登窯９段階の製品で、時期は江戸時代か。曲輪17西斜面から出土している。４は灯明皿の破片資料である。内外面共に灰釉が施されているが、外面下位は露胎している。外面は全てヘラ削りされている。登窯10か11段階の製品で、時期は江戸時代か。５は近世瀬戸の製品である。擂鉢の底部のみの破片資料である。内面には櫛目で覆われている。登窯５～７段階の製品で、時期は江戸時代か。

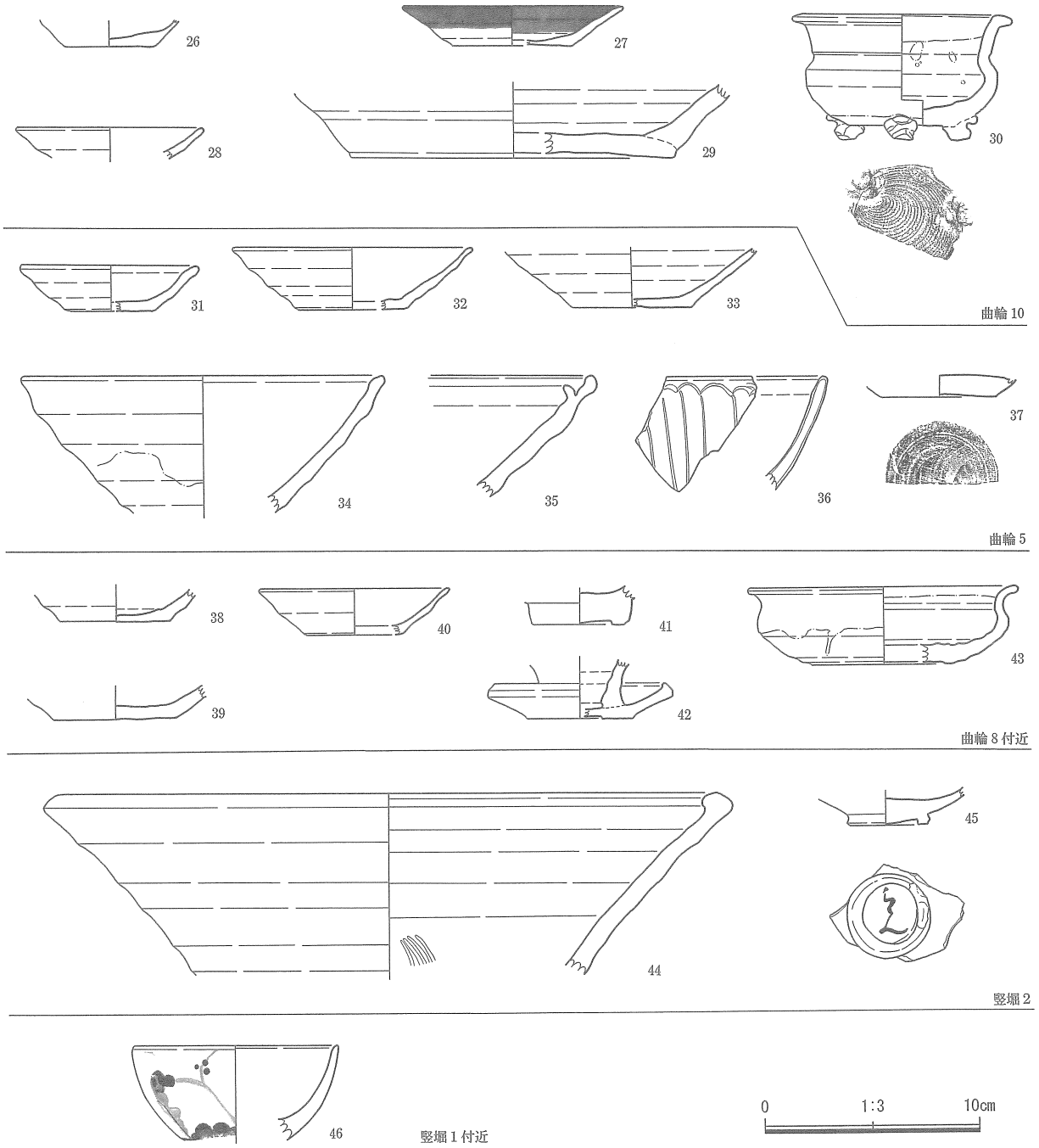
②竪堀３（第29図　写真図版21）　６～18は竪堀３で出土した土器である。６～14はかわらけである。６～12は底部から体部にかけて残存した破片資料で、13・14は底部から口縁部まで残存した資料である。底部と体部との境界がやや不明瞭な８を除き、いずれの資料も平坦な底部を持つ。多くの資料には糸切りの痕跡が残る。７は器面が剥脱しているため、底部と体部の境に段が見える。また９のように器高があるタイプや、低平なタイプ（13・14）でも口径・底径の比率が異なる。よってかわらけにも幾つかのバリエーションや個々の時期差の存在が想起される。14は灯明具として利用されたかわらけである。内外面ともに炭化物が固着する。15～17は古瀬戸の製品である。15は灰釉縁釉小皿である。底部から口縁部が残存する。平坦な底部から体部を直線的に立ち上げ、口縁端部は丸く仕上げている。全体的に磨滅している。焼成温度が低かったためか。時期は後Ⅳ古か。16・17は擂鉢である。両者とも口縁部のみの破片資料である。17は口縁部内面直下に突帯が巡る。時期は後Ⅳ新か。16は口縁部を内側へ曲げている。時期は後Ⅳ新か。18は輸入陶磁器である。染付碗の口縁部から体部にかけての破片資料である。破片数は３点である。内２点は接合し、その紋様から３点とも同一個体と考えられる。口縁部を外方へ曲げているため端反碗となる。外面、口縁部直下に横位の界線を一条描き、その下に流雲や草木と思しきモチーフが描かれている。内面も口縁部直下に横位の界線が一条描かれる。染付碗のB群に分類される。時期は15世紀か。

③曲輪６（第29図　写真図版22）　19～25は曲輪６から出土した土器である。19～21はかわらけである。いずれも底部から体部にかけての破片資料で、21は体部上位まで残存している。３点とも平坦な底部を持ち、底部外面には糸切りの痕跡が残る。21は竪堀３出土の９と同様、器高が高くなる。22・23は輸入陶磁器である。22は白磁皿の可能性がある資料である。23は青磁碗である。口縁部のみの細片資料である。外面には片切彫の鎬蓮弁文が観察される。内面には紋様は観察されない。口縁部をやや尖らせるように仕上げている。青磁碗のＢ１類に分類される。時期は13世紀か。24は常滑の製品である。片口鉢の口縁部から体部の破片資料である。口縁の外側の端部は外へ引き延ばしており、また内側の端部も引きのばし気味である。外面は赤褐色、内面はにぶい橙色である。堅緻に仕上がっており、爪で弾くと金属音のような音がする。口縁部にはナデの痕跡が明瞭である。当該資料は９型式でも10型式に近いタイプで、時期は15世紀中葉か。25は近世瀬戸・美濃の製品である。擂鉢の口縁部から底部にかけての破片資料である。体部は外反して立ち上がる。口縁部は内側に折り込んだため、肥厚しているように見える。全体に釉が施されている。内面には一条の沈線が引かれている。登窯11段階の製品で、時期は江戸時代か。なお図化できない細片資料として古瀬戸後期の祖母懐茶壺や縁釉小皿等が曲輪６から出土している。



第29図　出土土器実測図(1)

④曲輪10（第30図　写真図版21・22）　26～30は曲輪10から出土した土器である。26・27はかわらけである。26の底部外面は磨滅していている。27は竪堀３出土の14と同じく灯明具として使用されたらしく、内外面に炭化物が固着している。体部は直線的に立ち上がるが、体部中位でわずかに外折する。14と同じ形態である。28は輸入陶磁器の可能性がある。白磁小皿の口縁部と考えられる。なお細片資料で図化不能であった青磁１点が曲輪10付近から出土している。29は信楽の製品である。茶壺の底部の破片資料である。内外面とも赤褐色であるが、断面で見る胎土は灰白色で、黒い粒子が混じる。堅緻に仕上がっており、爪で弾くと金属音のような音がする。30は古志戸呂の製品で、袴腰形香炉である。全体の約３／５残存した資料である。底部には小粘土塊を張り付け、足がつく。足は本来３個付いており、２個のみ遺存する。底部外面には糸切りの痕跡が残る。体部は大きく内湾し、肩部から頸部を直立させている。



第30図　出土土器実測図(2)

口縁部は大きく折り曲げ、口唇部は丸く仕上げる。鉄釉が施されており、褐色～黒褐色をなす。胎土はにぶい橙色である。この資料は古瀬戸の後Ⅳ新と並行する資料であるため、時期は15世紀後葉か。

⑤曲輪５（第30図　写真図版21） 31～37は曲輪５から出土した土器である。31～33はかわらけである。31・32は底部から口縁部まで残存した破片資料である。31は体部を直線的に立ち上げ、口縁部をわずかに外反させている。口縁部は丸く仕上げている。庵原城跡出土のかわらけでは器厚はやや厚いタイプである。32は体部を直線的に立ち上げるが、31に比べて薄く仕上げている。32の内面には煤の付着が観察される。33は底部から体部中位まで残存した資料であるが、竪堀３出土９、曲輪６出土21に類似するかわらけか。34・35は古瀬戸の製品である。34は灰釉平碗である。体部下位から口縁部まで残存した破片資料である。体部はほぼ直線的に立ち上げ、口縁部は薄く仕上げようとしたためか、尖り気味である。外面には釉薬が残るが、風化気味である。後Ⅳ古段階の製品であるので、時期的には15世紀中葉か。35は擂鉢である。口縁部のみの細片資料である。直線的な体部で、内面に突帯が残る。口唇部は丸く仕上げている。後Ⅳ新段階の製品であるので、時期的には15世紀後葉か。36・37は輸入陶磁器である。36は青磁碗である。口縁部のみの細片資料である。外面には細線蓮弁文が観察される。口縁部はやや丸めるように仕上げている。青磁碗のＢ４類に分類される。時期は15世紀後半か。37は白磁皿と考えられる。底部のみの細片資料である。見込や底部外面にも白釉が施されている。底部外面には回転ヘラ削りの痕跡が観察される。口兀皿か。さすれば時期的には13世紀の資料と考えられる。

⑥曲輪８付近（第30図　写真図版21） 38～43は曲輪８付近から出土した土器である。前節で述べているように曲輪８付近は、廃城後の畑開墾のため大きく地形を変えている。よってこの付近から出土している土器は、本来的に曲輪８に伴う資料ではない。また隣接するＬ字状の溝付近から出土した土器もここで紹介する。

38～40はかわらけである。38・39は底部から体部にかけての破片資料である。両者共に底部外面に糸切りの痕跡が見られる。38には煤が付着する。40は底部から口縁部まで残存する破片資料である。計測値では曲輪５出土31と近い数値を示すが、器厚は40の方が薄く仕上げている。41・43は古瀬戸の製品である。41は天目茶碗の底部のみの破片資料である。見込には鉄釉が残る。高台は削り出されている。後Ⅳ新段階の製品であるので、時期的には15世紀後葉か。43は灰釉袴腰形香炉である。本来、三足が付いていたと思われるが、全て剝脱している。体部は大きく内湾する、肩部から口縁部にかけて大きく曲げている。口唇部は丸く仕上げている。釉は口縁部に施されているため、内外面共に露胎している。後Ⅳ新段階の製品であるので、時期的には15世紀後葉か。42は近世美濃の製品である。灯明皿と考えられる資料である。登窯11段階の製品と考えられるので、時期は江戸時代か。

⑦竪堀２（第30図　写真図版22） 44・45は竪堀２から出土した土器である。44は古瀬戸の製品である。擂鉢の体部から口縁部にかけての破片資料である。体部は外反しながら立ち上がり、口縁部は内側に折る。内外面ともに鉄釉が施される。体部下端に櫛目がわずかに残る。後Ⅳ新段階の製品で、時期的に15世紀後葉か。45は輸入陶磁器である。白磁皿の底部のみの破片資料である。釉薬は見込にのみ確認され、外面、高台等は露胎している。内面の釉薬は乳白色を呈し、細かな貫入が観察される。外面で見られる胎土は淡黄褐色である。畳付はヘラで面取りがなされている。高台内には回転ヘラ削りの痕跡が残り、墨書が観察される。ただし字体は崩されているため、その記載内容は判然としない。白磁皿のＢ群か。さすれば時期的に15世紀であろう。

⑧竪堀１（第30図） 46は竪堀１から出土した土器である。肥前の製品である。碗の体部から口縁部にかけての破片資料である。外面には染付が観察される。時期的には江戸時代か。

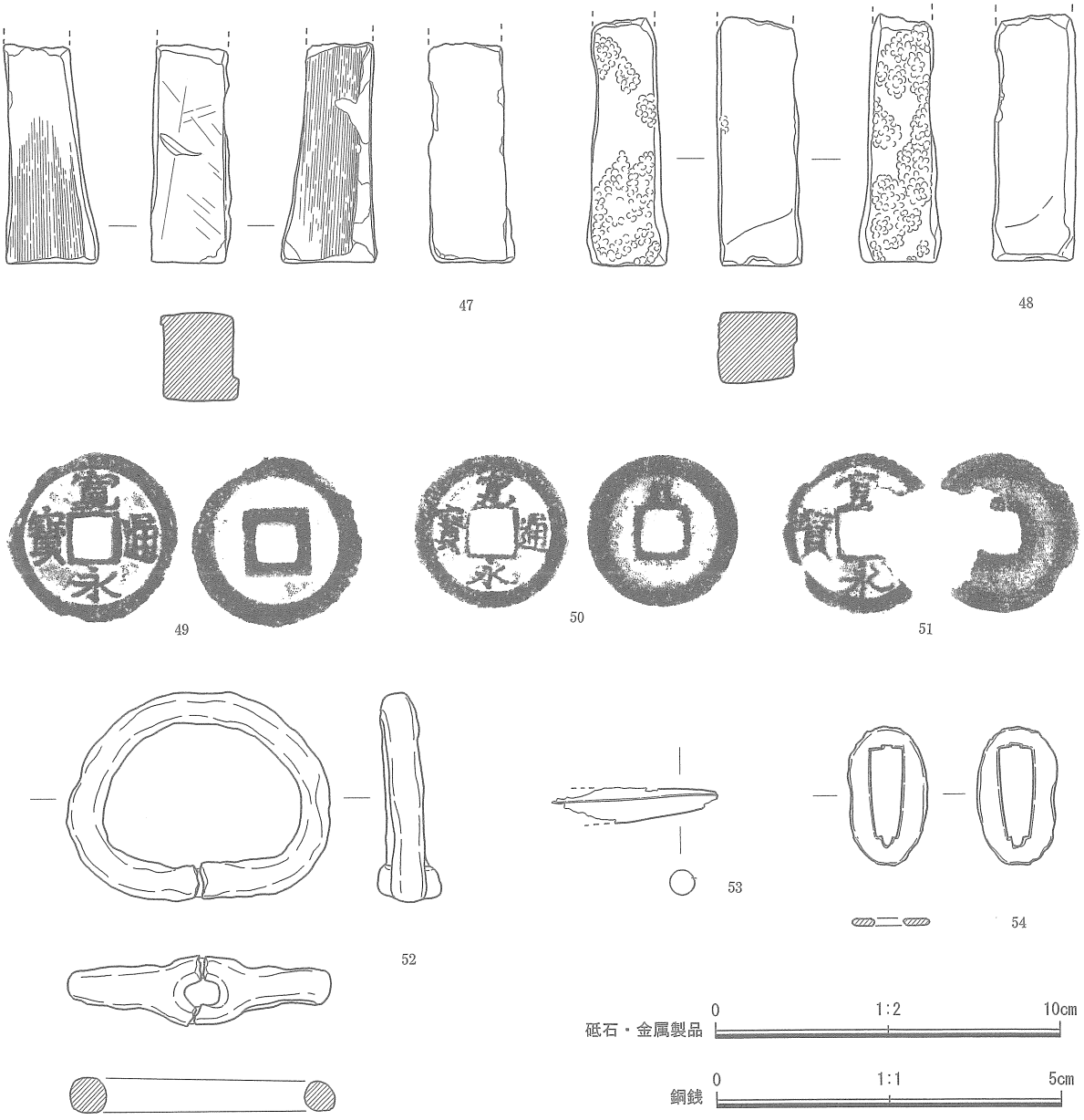
２　石製品（第31図　写真図版22）

庵原城跡からは石製品として、47・48の２点出土している。両者とも砥石である。47は曲輪17から堀切２にかけての撹乱土中からの出土である。48は曲輪18の西側で出土している。両者とも中途から折損した資料で、砥面が残る。付近は江戸時代以降の土器が比較的多く出土している。よってこの２点も江戸時代以降のものか。

３　金属製品（第31図　写真図版22）

庵原城からは金属製品として、銅銭３点、用途不明鉄製品が１点、煙管吸口が１点、切羽１点、以上６点出土している。

49・50・51は銅銭である。いずれも江戸時代の寛永通宝である。49は堀切２の東側から出土している。ほぼ完形であるが、縁辺は細かく欠けている。銭背には文字は無い。古寛永か。50は曲輪17の南東斜面から出土している。完形である。銭背には「元」とあるように観察できるが、磨滅のため判然としない。



第31図　出土石製品・金属製品実測図

51は曲輪17の西斜面から出土している。全体の約１／３が欠損している。表に見られるはずの「寛永通寶」のうち「通」の部分が失われている。

52は用途不明鉄製品である。曲輪５の地山面から出土している。この鉄製品は環状で、アルファベットの「D」字状を呈している。一辺が直線的でその中央部はさらに環を設ける。全く別の部品と組み合わさることにより、その機能を果たしていたと考えられるが、その用途は全く不明である。

53は煙管吸口である。銅製か。腐食のためかなりの部分が失われている。

54は切羽である。銅製か。刀装具のひとつである。本来は切羽とは２枚１組で使用され、刀の鐔（つば）の表裏に挟み込む部品である。切羽の中央部に刀身を貫通させるための穴がある。計測値は縦3.95㎝、横2.2㎝、厚さは２㎜、平面は楕円形である。ほぼ完形資料が、切羽縁辺の半分以上が腐食のためか表面が剥脱している。片方の面には小さな窪みが観察される。

第６表　出土土器（掲載分）一覧表

報告書№		写真図版	遺物名	産地等	遺構名	口径	器高	底径	備考
第29図	1		灰釉陶器碗	東濃H72	曲輪18上面	(12.8)	(4.5)	－	
第29図	2		甕	常滑15～16世紀	堀切２	－	－	－	
第29図	3		小碗	近世美濃登窯９	曲輪17西斜面	(5.5)	3.0	(2.7)	
第29図	4		灯明皿	近世美濃登窯10～11	堀切２北西 堀切２南部	(11.5)	1.8	(4.7)	
第29図	5		擂鉢	近世瀬戸登窯５～７	本調査Ⅰ期表土	－	(4.7)	(16.8)	
第29図	6	図版21	かわらけ		竪堀３	－	(1.1)	(3.6)	
第29図	7		かわらけ		竪堀３	－	(1.1)	(5.2)	
第29図	8		かわらけ		竪堀３	－	(1.1)	(6.0)	
第29図	9	図版21	かわらけ		竪堀３	－	(2.5)	(5.0)	
第29図	10		かわらけ		竪堀３	－	(1.6)	(5.2)	
第29図	11	図版21	かわらけ		竪堀３	－	(0.8)	(6.0)	
第29図	12		かわらけ		竪堀３	－	(0.9)	(6.0)	
第29図	13		かわらけ		竪堀３	(7.5)	1.75	(4.4)	
第29図	14	図版21	かわらけ		竪堀３	(10.0)	1.85	(5.1)	灯明皿
第29図	15		灰釉縁釉小皿	古瀬戸後Ⅳ古	竪堀３	(10.4)	2.5	(5.0)	
第29図	16		擂鉢	古瀬戸後Ⅳ新	竪堀３	－	－	－	
第29図	17		擂鉢	古瀬戸後Ⅳ新	竪堀３	(30.8)	(3.6)	－	
第29図	18		染付碗	輸入陶磁器染付碗Ｂ群	竪堀３	(10.8)	(4.3)	－	
第29図	19		かわらけ		曲輪６付近	－	(1.0)	(4.4)	
第29図	20		かわらけ		曲輪６南斜面下部	－	(1.3)	(5.2)	
第29図	21		かわらけ		曲輪６付近	－	(3.0)	(4.0)	
第29図	22		白磁小皿？	輸入陶磁器？	曲輪６、柱穴内	(7.8)	(1.2)	－	
第29図	23		青磁碗	輸入陶磁器龍泉窯Ｂ１類	曲輪６付近	－	－	－	
第29図	24	図版22	片口鉢	常滑９～10型式	曲輪６付近	(34.0)	(7.4)	－	
第29図	25		擂鉢	近世瀬戸登窯11	曲輪６付近	(35.2)	(6.7)	－	
第30図	26		かわらけ		曲輪10付近	－	(1.2)	(4.0)	
第30図	27		かわらけ		曲輪10付近	(10.3)	1.8	(5.6)	灯明皿
第30図	28		白磁小皿？	輸入陶磁器？	曲輪10付近	(8.8)	(1.4)	－	
第30図	29	図版22	茶壺	信楽	曲輪10付近	－	(3.9)	(15.0)	
第30図	30	図版21	鉄釉袴腰形香炉	古志戸呂後Ⅳ新	曲輪10付近 確認調査３トレンチ付近	(10.3)	5.7	(5.0)	
第30図	31		かわらけ		曲輪５	(8.2)	2.1	(4.1)	
第30図	32	図版21	かわらけ		曲輪５	(11.2)	2.8	(5.2)	
第30図	33	図版21	かわらけ		曲輪５	－	(2.0)	(5.6)	
第30図	34		灰釉平碗	古瀬戸後Ⅳ古	曲輪５	(17.0)	(6.2)	－	
第30図	35	図版22	擂鉢	古瀬戸後Ⅳ新	曲輪５南側	－	－	－	
第30図	36		青磁碗	輸入陶磁器龍泉窯Ｂ４類	曲輪５	－	－	－	
第30図	37		白磁皿？	輸入陶磁器？	曲輪５南側	－	(1.0)	(5.2)	
第30図	38		かわらけ		曲輪８付近	－	(2.5)	(5.2)	
第30図	39	図版21	かわらけ		曲輪８付近	－	(1.5)	(5.7)	
第30図	40		かわらけ		曲輪８付近	(8.8)	(2.1)	(4.7)	
第30図	41		天目茶碗	古瀬戸後Ⅳ新	曲輪８付近	－	(1.8)	4.5	
第30図	42		灯明具	近世美濃登窯11	確認調査３トレンチ（仮２）	(6.6)	(2.6)	(5.0)	
第30図	43	図版21	灰釉袴腰形香炉	古瀬戸後Ⅳ新	曲輪８付近	(12.6)	3.5	(6.6)	
第30図	44		擂鉢	古瀬戸後Ⅳ新	竪堀２	(32.0)	(8.3)	－	
第30図	45	図版22	白磁皿	輸入陶磁器白磁皿Ｂ群	竪堀２	－	(1.6)	(3.9)	墨書
第30図	46		染付碗	近世肥前	竪堀１付近	(9.6)	(4.3)	－	

第５章　まとめ

第１節　遺構と遺物

庵原城跡の発掘調査は平成12年度から平成22年度にかけて断続的に実施してきた。調査は城の縁辺部であるため難航したが、遺構・遺物の特色を把握することができた。ここでは簡単に調査成果をまとめ、総括としたい。

１　調査の成果

庵原城跡は静岡市清水区草ヶ谷に所在し、庵原山地から張り出した丘陵先端部に位置する。城の東斜面、西斜面は急峻で、丘陵裾には山切川、山田川が流れており、要害地形を利用した山城である。一方、交通路からみてもこの場所は南に東海道が通り、駿河湾を望む場所であるとともに山梨県南巨摩郡へ通じる地域である。このように庵原城跡は東海道筋だけでなく、甲斐国への往還を抑える交通の要衝にあったといえる。

検出遺構　調査が実施されたのは尾根の西側縁辺から西側斜面にかけての4,051㎡である。あらたに検出及び確認した遺構は堀切１・堀切２、溝１、曲輪３・５・６・８・10・16・17・18、竪堀１～４、虎口である。

堀切１は東側から入り込む自然の谷地形を利用しており、上部幅15m、深さ5.5mである。堀切１と曲輪17の間には溝１と小段部を検出している。溝１掘削前段階には曲輪18として機能していたと考えられる。

堀切１と溝１との切りあい関係は不明瞭であるが、溝１を掘削して二重堀切化をはかった可能性が高いとともに、分断された曲輪18は土塁として機能したであろう。そして、この位置は城の西端にあたり、最も防御に注意を払う場所であることから、堀切１は改修された痕跡として認めることができる。

堀切２は曲輪16と曲輪17を分かつ機能をもち、断面形状は箱堀をなす。南側の末端部は明瞭ではないが、谷が入り込んでおり、竪堀を構成していた可能性がある。

曲輪６には１棟の掘立柱建物跡（SH01）と柵（SA03）を想定することができた。曲輪６の先端部寄りでSH01は検出され、柵（SA03）の軸方向と同一である。SH01は長辺2.7m、短辺1.8mで小規模な建物であり、居住目的というよりは物入れ等用途は限定されよう。

曲輪５は曲輪２・３の側面下にあり、曲輪８を見下ろす位置にある。先端には土塁が残存し、上面には柵（SA02）と考えられる柱穴が確認できる。

曲輪16は城跡内で残存した曲輪でも一番高所で、庵原山地から延びる尾根筋を眺めることができる。堀切２に面した部分で柵（SA01）が確認できた。

曲輪３は主要曲輪群のうちの丘陵先端部にあたる曲輪で、曲輪４を見下ろす位置にある。ここでは上下２段の平坦部を確認し、下段には柱穴跡が２基検出できた。これは城門などの施設が考えられ、虎口と想定することができる。当初、堀切であった箇所を利用して城内道と連動するかたちで虎口の整備をはかったと考えることも可能で、虎口の設置も改修の痕跡としてとらえることもできよう。

竪堀は４基確認できた。竪堀１・２は曲輪８の両端にある。竪堀３は曲輪１・６・10、 堀切４と接続し、南北２本の細い竪堀で構成される。竪堀３は堀を２重にすることで敵の横方向の移動を効率的に阻むものであり、改修の痕跡と認めてもよい。竪堀４は曲輪１・16の境界部にあり、小規模である。

第32図　庵原城　遺構配置図

出土遺物　庵原城跡から出土した遺物は787点を数え、かわらけ・貿易陶磁・国産陶器で構成される。主体を占めるのが中世のかわらけで、全体の83％である。かわらけは赤褐色を呈し、口径９cm、11cm代があり、駿府城近辺で出土するものとは異なる傾向を示す。

貿易陶磁は12点で、青磁碗Ｂ１・Ｂ４類、染付碗B群、白磁皿B群など、碗・皿に限定される。資料の中では13世紀代にさかのぼる資料も散見されるが、主体は15世紀代である。

国産陶器には瀬戸、美濃、信楽、古志戸呂、常滑がある。古瀬戸製品は古瀬戸後期様式のⅣ期古～新段階の製品が集中し、古志戸呂製品も同時期の製品が出土している。

このように遺物量は少ないものの、15世紀代の幅で出土遺物は捉えられ、特に古瀬戸後Ⅳ段階すなわち15世紀中葉から後葉の古瀬戸製品が多いことが指摘される。大窯期の遺物は皆無であった。

２　庵原城跡の改修

庵原城跡の築造年代については不明瞭であるが、出土遺物が急激に増加する15世紀後半以降のことと想定できる。

庵原城全体の様相は細長い丘陵先端部に主要な曲輪を形成し、周囲は段状に小規模な曲輪を配していた。背後は堀切で切断し、急峻な谷を利用して竪堀が構築されており、自然地形を最大限生かした比較的単純な構造といえよう。なかでも今回の調査では大規模な堀切１、２条認められる竪堀３、虎口の存在から一部の施設に改修の手が加わっていたとみることができる。

城の大部分が未調査であることから推測の域を出ないが、改修は前代の城の構造を生かしながら、防御的に必要な施設を追加するかたちで行われていたことがわかる。このことから基本的な城の構造は少なくとも創築以来、庵原氏の段階に構築されたと考えられる。

一方で、改修のあり方は浜松市高根城などでみられるように、それまで国人領主奥山氏の段階に築かれた城を整備し、尾根続きとなる城の端部に二重堀切を設けることや虎口を複雑化させて重防備化を図る手法（加藤 2000・溝口 2008）は庵原城においても類似点を見いだすことができる。

永禄11年（1568）以降、この地は庵原氏から武田傘下の朝比奈氏が関与するものとなった。朝比奈氏は武田氏が持っていたであろう先進の築城技術を得ることが可能になったと考えられ、先述した大規模な堀切の構築・虎口の複雑化といった改修を行ったであろう。これは元亀・天正年間初頭（1570年前後）に県内の山城で行われた改修時期と軌を一にすることから、朝比奈氏が新規領内の統治をすすめるとともに庵原城の改修を行った可能性が高い。

参考文献

加藤　理文・松井　一明　2000　「武田氏による改修とその時期的問題について」『高根城　VI』静岡県水窪町教育委員会

加藤　理文　2010「高根城（久頭郷城）」『静岡県における戦国山城』静岡県考古学会

加藤　理文・中井　均編　2009　『静岡の山城ベスト50を歩く』サンライズ出版

加藤　理文　2010　「山城の再利用」『静岡県における戦国山城』静岡県考古学会

河合　　修　2010　「庵原城」『静岡県における戦国山城』静岡県考古学会

戸塚　和美　2010　「戦国期後半の山城遺構」『静岡県における戦国山城』静岡県考古学会

溝口　彰啓　2008　「静岡県下における山城遺構の画期について」『静岡県考古学研究』No.40　静岡県考古学会

溝口　彰啓　2010　「戦国期前半までの山城遺構」『静岡県における戦国山城』静岡県考古学会

第２節　庵原氏の動向

前述してきたように庵原城は判然としないものの、庵原氏により構築された城から、朝比奈信置により大きく改修された可能性を示した。また遺物も15世紀代が主体で、16世紀代の遺物は皆無と言ってよいだろう。すでに指摘されているが、出土遺物と遺構との乖離がある。そこで15世紀代以降の庵原氏の動向を概観しておく必要がある。第７表は系図以外の古記録から抽出した庵原（廬原・五百原・菴原）姓を名乗る人物の集成、編年を試みた表である。庵原氏には廬原氏は吉備武彦の子、意加部彦の後裔を称した者や越智氏の後裔と称した者、藤原南家の後裔、坂上田村麻呂の後裔等、幾つもの系統が存在したことが知られている。従って第７表に掲載された庵原姓を名乗る人物はこれら複数の血脈にわたる人々である。当該報告書が対象とする庵原氏は藤原秀郷の後裔と称したとする系統であろう。

15世紀初めに見られる庵原氏の動きは、庵原英盛の軍事行動が記録に残る。応永23年（1416）に勃発した上杉禅秀の乱に伴い、英盛は兵500人を率い鎌倉公方足利持氏に加勢したとする。この際、上杉軍が駿河国に乱入し、入江付近で合戦を繰り広げている。また、永享５年（1433）に今川氏の内訌で庵原氏の名が度々室町幕府要人の記録に登場する。京から下向した今川彦五郎（範忠）の軍と反発する国人衆（狩野氏・富士氏等）の軍勢が各所で戦闘を繰り広げている。「管領細川持之書状写」の宛先には「庵原周防入道」とあり、反彦五郎派の富士氏・狩野氏と同じ内容の書状が送られている。ただし、敗れた富士氏・狩野氏等が室町幕府に詫びをいれた記録が残るが、庵原氏がその記録が無い。応仁元年（1467）には応仁の乱により、今川軍の一翼として庵原氏は上洛している。後の文明12年（1480）に太田道灌と庵原民部入道との交流が記録されているが、時代的に応仁の乱で上洛したのは民部入道であった可能性はあろう。また、文明８年（1487）に遠江国横地氏・勝間田氏への攻勢で今川義忠が戦死、その後継を巡り今川氏一門、由比氏や庵原氏が合戦を繰り広げている。

以上のように、庵原氏は15世紀代において４回もの緊張状態を経験していることになる。この庵原氏が有事の際の拠点の構築について全く関心を払わなかったとは考えにくく、庵原城の築城についてはこの時期に遡る蓋然性は否定できない。とは言え、約100年の間に４回もの戦役を経験し、庵原氏の財政状況は疲弊したものと見え、明応年間（1492～1500）にそれまでの忠勤の報償であろうか、庵原氏の債務を今川氏が肩代わりする事態に至っている。よって、この度調査された遺構を形作るほど、大規模な築城を行っていたとは考えにくく、仮に築城を行っていたとしても丘陵尾根頂部の平坦にした程度の簡単な構えだったのではないか。

16世紀、この庵原氏が疲弊していた時期に、後に今川義元の軍師にもなった太源崇孚雪斎は庵原世順良朝庵主と興津氏女との間に生れている。永正12年（1515）に勃発した甲斐国守護武田信虎と国人大井信達の抗争の際に、庵原氏は今川軍の一翼として翌年（1516）甲斐国へ出兵する（第１回目）。万力の合戦では武田軍に大勝利をおさめているが、永正14年（1517）に今川方の吉田城（山梨県富士吉田市）が落城し、今川氏・武田氏の和睦が成立した。永正18年（大永元年：1521）９月には今川氏重臣の福島氏が軍勢を率いて、再度甲斐国に侵攻（第２回目）するも、10月の飯田河原（山梨県甲府市）の合戦、11月の上条河原（山梨県甲斐市）の合戦で、今川軍は大敗している。第１回目の甲斐国侵攻については庵原氏の参加が記録されているが、第２回目の侵攻は重臣福島氏が大将となったもので、庵原氏も参加したのかどうかは記録に無い。しかし大永５年（1525）に庵原安房守が債務返済に窮し、今川氏に救済を求める事態が発生している。永正13年からの甲斐国出兵に際して軍費調達で借財が累積したことによるものと解釈するむきもある。この時の庵原安房守は年代からも雪斎の兄弟であると推定してよい。その後、天文５年（1536）に今川氏輝急死を受けて家督承継につき内戦（花蔵の乱）が勃発。記録には残っ

第33図　永禄11年の武田軍侵攻

ていないものの、隣接する興津氏が義元側に付き、また庵原氏出身の雪斎と今川義元との関係からして、庵原氏は重臣としても関与せざるを得なかったと考えられる。天文６年（1537）、花蔵の乱により反義元派が鎮圧された後、敵対関係にあった武田氏との同盟関係が成立した直後、２月に北条氏が今川領だった富士川以東の地へ侵攻（河東一乱）する。北条軍は一時、興津まで進出し、焼き打ちを行っている。小泉（富士宮市）では富士氏が抗戦、また吉原（富士市）でも富士下方衆が北条軍と戦闘を行っている。混戦状態は武田氏の調停により天文14年（1545）に収束している。この際に雪斎の交渉活動が功を奏したものとされる。翌年、天文15年（1546）、武田晴信に召し抱えられた山本勘介（晴幸）が庵原氏に挨拶に出向いている。山本勘介は武田信玄の軍師として後世に伝えられる人物であるが、詳細が判然としない人物で、実在を疑う説も存在する。山本勘介の母は庵原世順良朝庵主と兄妹ともされ、雪斎とは従弟

第７表　廬原氏・庵原氏関連年表(稿)

時　代		出　来　事	出典文献名
天智天皇２年	663	百済王が諸将に廬原君臣が健児を率いて、救援にくることを告げる。	『日本書紀』天智天皇２年８月甲午条
和銅３年～ 霊亀３年	710～ 717	平安京左京三条二坊ＳＤ4750出土木簡(長屋王家木簡)に「廬原務志麻」と書かれた木簡が出土している。	奈良国立文化財研究所1995 『平城京木簡１－長屋王家木簡１－解説』
神亀２年	725	聖武天皇が征夷将軍以下約1600人に勲位を与える。五百原君虫麻呂等には勲六等、田二町を与えた。	『続日本紀』巻九聞正月丁未条
天平９年	737	駿河国が朝集雑使として廬原君足礒等を遣わす。	『駿河国正税帳』
神護景雲３年	769	下正六位下、菴原郡大領であった廬原公首麻呂が駿河国造に任ぜられる。	『菴原公系図』
寶亀３年	772	五百原豊成に菟毛筆の直として新銭を支給される。	『奉写一切経所銭用帳』
寶亀３年	772	五百原豊成に墨一丁を支給されるが、後に返上する。	『奉写一切経所銭用帳』
延暦13年	794	菴原公広道ら兄弟４名、右京七条に貫附される。	『菴原公系図』
承和２年	835	廬原公有守、遣唐譯語に任命される。	『続日本後紀』承和２年10月丁丑条
承和２年	835	廬原柏守(兄)、廬原公有守(弟)が朝臣姓を賜る。	『続日本後紀』承和２年10月丁亥条
天慶３年	940	平将門鎮圧のために征東軍が組織され、駿河国の在庁官人であった菴原広統(ひろもと)も参加。	『貞信公記』
正治２年	1200	廬原小次郎ら駿河国人衆が、梶原景時一行を討ち取る。	『吾妻鏡』巻十六
正治２年	1200	廬原小次郎ら駿河国人衆が鎌倉に参着し、梶原景時一行との合戦記録を提出する。	『吾妻鏡』巻十六
承久３年	1221	承久の乱勃発、幕府軍の庵原仲次が宇治川橋の戦いで負傷。	『吾妻鏡』巻二十五
建長２年	1250	幕府が廬原左衛門入道を含む御家人に閑院殿造営役をわりあてる。	『吾妻鏡』第四十
観応２年	1351年	庵原氏等が足利尊氏陣営に参加、平沢付近で入江駿州・三澤小次郎と交戦。	『太平記』
延文４年	1359	良堵禅門(庵原氏一族か)が死去	一乗寺境内五輪塔銘文
応永23年	1416	上杉禅秀の挙兵により、鎌倉公方足利持氏は駿河に逃亡。持氏に駿河国目代庵原蔵人英盛が最初に合力する。	『続太平記』12
永享５年	1433	庵原氏が今川千代秋丸に関東方が合力している風聞を注進する。	『満済准后日記』
永享５年	1433	駿河国の国人に管領奉書が下される。その宛名の中に庵原周防入道の名が見られる。	『管領細川持之書状写』
永享６年	1434	駿河国守護今川範忠や庵原氏等の国人から満済のもとに、足利持氏の動きを注進(永享の乱へ)。	『満済准后日記』
応仁元年	1467	応仁の乱勃発。今川義忠は庵原氏を含む国人衆を率いて上洛。	『今川記』第４
文明12年	1480	沖津(興津)の宿に滞在中の太田道灌のもとに、庵原民部入道禅道が来訪。	太田道灌『平安紀行』
文明８年	1487	今川義忠の葬儀後に、今川一門、庵原氏を含む国人等が合戦。	『今川記』第４
明応５年	1496	太原孚歩雪斎生まれる。父は庵原氏、母は興津氏の女とされる。	遺偈
明応年間	1492～ 1500	今川氏料所の焼津郷の年貢を、庵原周防守の債務返還に充てる。	今川かな目録第二十条
永正元年	1504	庵原世順良朝庵主(太原孚歩雪斎の父)死去。	「駿陽藤氏庵原世順良朝庵主四十年忌拈香語」
永正13年	1516	甲斐国の国人大井氏の要請により、今川氏親が葛山氏・庵原氏・福島氏等の重臣を動員し、甲斐国へ侵攻。甲斐国勝山城を拠点とする。	『今川家譜』『今川記』
大永３年	1523	九英承菊(後の太原孚歩雪斎)が駿河国富士郡善得寺において、方菊丸(後の今川義元)を指導する。	
大永５年	1525	庵原安房守が借金返済に窮し、今川氏に救済を求める。	今川かな目録第二十条
大永６年	1526	庵原周防守「欠け落ち」所有権	今川かな目録
天文13年	1544	京都妙心寺大休宗休(だいきゅうそうきゅう)により雪斎の父、庵原世順良朝(せいじゅんりょうちょう)庵主の40年忌の仏事が行われる。	「駿陽藤氏庵原世順良朝庵主四十年忌拈香語」
天文15年	1546	武田晴信に召し抱えられた山本勘介が庵原氏に挨拶に出向く。	『甲陽軍鑑』品第廿六
天文19年	1545	今川義元が武田晴信へ庵原弥兵衛等を使者として遣わす。	『甲陽軍鑑』品第廿九
天文20年	1551	駿河国大平郷の八社神宮が退転(荒廃)していると、沼津領奉行の庵原新三(新三郎)が今川義元に訴える。	『大平年代記』
天文21年	1552	朝比奈丹波守が吟味し、八社神宮は不退転である旨、今川義元に報告。庵原新三(新三郎)が役替えになる。	『大平年代記』
弘治元年	1555	太原崇孚雪斎(たいげんそうふせっさい)薬梨長慶寺にて死去。	「太原崇孚頂相賛」
弘治２年	1556	山科言継のもとに中御門宣綱の使者である庵原左衛門尉と会う。	『言継卿記』
弘治２年	1556	山科言継が庵原左衛門尉のもとに使者を遣わし、酒を勧められる。	『言継卿記』
弘治２年	1556	山科言継が庵原左衛門尉のもとに使者を遣わし、晩餐をご馳走される。	『言継卿記』
弘治２年以降	1556～	『駿河国臨済寺塔頭・末寺帳』には一乗寺を「…是は庵原左衛門私領の内庵に候…」、清見寺塔頭竜沢庵を「…庵原檀那にて候…」と記載。	『駿河国臨済寺塔頭・末寺帳』
永禄３年	1560	庵原左衛門佐元景が三河国岡崎城に詰める。	『信長公記』
永禄３年	1560	尾張国へ攻勢中、桶狭間の戦いで今川義元討ち死。敗走する今川軍に織田軍が追撃戦。庵原左近大夫・同姓庄二郎等の多くの今川重臣も討ち死。	『家忠日記増補追加』
永禄３年	1560	庵原将監忠縁、庵原左近忠春、庵原彦次郎忠良、庵原美作守元政(旗奉行)等討ち死。	『信長公記』
永禄11年	1568	武田信玄、駿河国へ侵攻するため甲府を進発。降者の庵原弥兵衛を案内者とする。	『甲陽軍鑑』
永禄11年	1568	武田軍駿河国へ侵攻。内房に布陣。庵原氏は先陣として蘿埵山に布陣するも、武田側に内応する家臣続出し、庵原氏撤退。	『武徳編年集成』『甲陽軍鑑』
永禄11年	1568	庵原弥兵衛が武田信玄に久能山が堅固な地勢であることを答申。	『甲陽軍鑑』
永禄12年	1569	武田信玄が朝比奈駿河守に庵原氏の旧知行地一円を与える。	「武田晴信書状写」
永禄12年	1569	一乗寺が朝比奈信置により庵原氏内庵に移される。朝比奈氏出身の哉翁宗咄を招じて曹洞宗寺院となる。	『一乗寺史』
永禄12年～	1569～	武田家による駿河支配に際して駿河先方衆を編成。その中に庵原弥右衛門の名がある。	『甲陽軍鑑』品第十七
永禄12年～	1569～	駿河先方衆筆頭朝比奈駿河守信置の同心衆に庵原傳内の名がある。	『甲陽軍鑑』品第十七
永禄～天文年間		駿河先方衆の庵原弥右衛門が改易。諏訪に護送される。	『甲陽軍鑑』品第三十七
天正２年	1574	武田氏、庵原源一郎に領地安堵を行う。	「武田朱印状写」
天正９年	1581	徳川軍、駿河国持船城へ攻勢。庵原傳内等が戦死。	『甲陽軍鑑』品第五十六
天正15年	1587	善得寺住持東谷宋杲(とうこくそうこう)が駿河国善得寺仮屋で雪斎33回忌を執り行う。	「護国禅師雪斎遠諱香語写」

の関係となるのである。天文15年（1550）に、今川義元が庵原弥兵衛を使者として武田晴信のもとへ差し向けている。天文20～21年（1551～1552）に今川氏所領の沼津領の奉行職に庵原新三（郎？）なる人物が存在したことは、記録で明らかであるが、どの系統の庵原氏かは判然としない。ここまでの約半世紀、庵原氏は雪斎の活躍もあり今川氏の重臣としてようやく安定期を迎えつつも対外的な緊張状態は持続しており、小規模とはいえ城塞としての庵原城を維持する必要性は消えないのである。

16世紀後半以降、庵原氏は絶頂を迎えた今川氏と共に没落へ転がり始める。弘治元年（1555）に雪斎が死去する。弘治２年（1556）、京から下向した公家、山科言継と庵原左衛門尉との交流が『言継卿記』に明らかである。この時期、今川氏は遠江国から三河国へ勢力を既に伸ばしていた。永禄３年（1560）に忠胤の孫とされる庵原左衛門佐元景が三河国の岡崎城（愛知県岡崎市）に兵1000を以て入城している。この後の桶狭間の合戦で今川軍は壊滅、従軍していた忠胤の兄弟や旗奉行であった美作守元政が討死したとされる。義元亡き後、子息氏真の治世、永禄11年（1568）12月６日、武田信玄が軍を率いて駿河国へ侵攻（第一次）を開始する。第33図に信玄の侵攻推定ルートを示した。12月９日に戦闘の火ぶたを切ったのは信玄の本隊とは別に、中道往還を経由した富士山西麓沿いに進んだ武田軍別動隊が富士信忠（富士浅間宮大宮司）の守備する大宮城に攻勢をかけている。この戦闘で富士氏が防衛に成功、後に武田信玄の駿河国撤退の原因を作るのである。12月12日武田信玄の本隊は富士川沿い進み、今川軍を破った後、北松野から海沿いの由比に抜けている。一連の動きに合わせて、同日今川氏真は興津清見寺に本陣を構え、清見寺の先、興津川の東側に連なる薩埵山に庵原安房守が陣を構えた。しかしこの時既に武田氏が水面下で朝比奈氏、関口氏等に働きかけ、離反が相次ぎ迎撃態勢が崩壊、庵原安房守は氏真を擁して駿府館に退却している。12月13日武田軍は興津を占領。駿府へ進撃を開始している。この際に東海道沿いに進軍し、高橋城・北脇城を陥落せしめた隊と、有渡山北麓の上原を経由して進撃した隊に分かれて侵攻したという記述もある。前者は街道筋にあたる瀬名川を経由し、そのまま駿府館に乱入したものと考えられる。なお、相模国の北条氏は今川氏支援のため軍勢を仕立て、12月12日に今川方の蒲原城に入城、12月13日に武田軍の主力が駿府方面へ進出している間、武田軍の背後を襲うように興津へ攻撃をしかけている。この駿州錯乱とも呼ばれた一連の戦況で庵原氏は安房守のように忠実に今川氏につき従った者や武田氏側に付いた庵原氏も存在する。現在の久能山東照宮がある一帯が堅固な地で、城に適していると武田信玄に答申したのは庵原弥兵衛で、天文19年（1550）義元の使者として晴信（信玄）に面会した弥兵衛と同一人物であろうか。またこの武田氏が編成した駿河先方衆の中に庵原弥右衛門の名前が見られる。弥右衛門は庵原安房守忠胤の末弟と考えられている。また駿河先方衆筆頭朝比奈信置の配下に庵原傳内が、また庵原源一郎なる人物に対して武田氏が領地安堵を行っていることから、多くの庵原姓を持つ人物が武田氏の編成の中に組み込まれたのは明らかである。

以上のように庵原氏は武田氏の配下に下った後は、庵原城との関係は絶たれており、庵原城は旧庵原氏の所領一円を与えられた朝比奈信置の関与するものとなっている。前述したように件の庵原城は15世紀代の駿河国内の緊張状態を受けて築城された可能性は否定できないものの、窮乏状態の庵原氏が大規模な築造・修築を行えたとは考えにくく、その後、今川氏の急激な没落に際して、庵原氏によりいかほどの工夫がなされたかも全く分らない。その後、駿河国が武田氏の手中に落ち、永禄12年（1569）以降、庵原氏の知行地が全て朝比奈信置の手に渡されてから、城が大規模に修築された可能性がある。これは武田氏が凋落・滅亡した天正10年（1581）までの約12年の間に改修が行われたことになるであろう。

参考文献

新井　正樹　1993　「大乗寺遺跡確認調査報告書」『清水市内遺跡群発掘調査報告書（平成４年度）』清水市教育委員会

新井　正樹・荻野谷正弘　2003　「寺山古墳群確認調査報告書」『清水市内遺跡群発掘調査報告書』清水市教育委員会

赤羽　一郎　1996　『常滑焼と中世社会』

市原　壽文ほか　1966　「清水市東山田第１号・第２号窯址発掘調査概報」『静岡県埋蔵文化財要覧』Ⅰ　静岡県教育委員会

大川　敬夫　1992　「一乗寺の墓塔について」『静岡県考古学研究』24　静岡県考古学会

大塚　　勲　1977　「戦国大名今川氏上層家臣名簿（試表）」『駿河の今川氏』第二集　今川氏研究会

大塚　初重　1994　「第１編　第４章　第１節　」『静岡県史』通史編１　静岡県

大川　敬夫　1999　「原平遺跡確認調査報告書」『清水市内遺跡群発掘調査報告書（平成10年度）』清水市教育委員会

小和田哲男ほか　1994　『今川時代とその文化』財団法人静岡県文化財団

小和田哲男　2004　「武田信玄の駿河侵攻と今川氏真」『戦国期静岡の研究』静岡県地域史研究会

加藤　理文　2010「高根城（久頭郷城）」『静岡県における戦国山城』静岡県考古学会

加藤　理文・中井　均編　2009　『静岡の山城ベスト50を歩く』サンライズ出版

河合　　修　2005　「今川氏の斜陽と領国の喪失」『互助新聞』第437号　静岡県教育委員会教職員互助組合

河合　　修　2010　「庵原城」『静岡県における戦国山城』静岡県考古学会

黒田　基樹　1995　「武田氏の駿河支配と朝比奈信置」『武田氏研究』第14号

建設省中部農林事務所・清水市教育委員会　1996　『原平遺跡発掘調査報告書（平成８年度）』清水市教育委員会

斎藤　　忠　1997　「清水市三池平古墳・尾羽廃寺跡とその背景」『静岡県史研究』第14号

佐野　明生　1991　『庵原山一乗寺史』曹洞宗庵原山一乗寺

佐野　明生　1998　『大乗寺誌』臨済宗高部山大乗寺

静岡県教育委員会　1998　『静岡県の重要遺跡－静岡県内重要遺跡詳細分布調査報告書－』

清水市教育委員会　1979　『天神山下２遺跡・東久佐奈岐５号墳薬師平３号墳発掘調査報告書』清水市埋蔵文化財報告　第１集

清水市郷土研究会　1983　『庵原地区の考古資料』清水市埋蔵文化財調査報告

清水市教育委員会　1981　『大乗寺遺跡・高部山遺跡』

清水市郷土研究会　1989　『大乗寺・高部山』

杉山　　満　2007　「古代のいほはら」『季刊清水』40

関口　宏行　1978　『庵原山城跡と一乗寺』静岡古城研究会見学会資料

関口　宏行　1978　「駿河先方衆朝比奈駿河守信置－その壮絶な生涯－」『駿河の今川氏』第三集　今川氏研究会

関口　宏行　1991　「富士川流域における戦国期の動向」『宍原砦発掘調査報告書』清水市教育委員会

辰巳　和弘　1976　「庵原氏に関する一考察－大化前代の駿河国中部－」『地方史静岡』６号

土　　隆一　1971　「静岡・清水平野の地形・地質について」『竹原平一教授記念論文集』

土　　隆一・北川　光雄　1976　『静岡・清水地域の地質－地質図説明書改訂版－』静岡商工会議所

中西　道行・大川　敬夫　1984　『東久佐奈岐古墳群（３・４・６号墳・宮平Ⅰ遺跡発掘調査報告書）』清水市教育委員会他

中西　道行　2000　「庵原氏の京師化をめぐって」『清見潟』第10号

前田　利久　2004　「武田信玄の駿河侵攻と諸城」『地方史静岡』第22号

松原　彰子　1997　「静岡県清水低地の完新世における古環境変遷」『湘南国際女子短期大学紀要』第４号

矢田　　勝　1997　「条里の広域施工時期と変遷過程についての試論－静清平野における律令期統一条里遺構の調査が投げかける諸問題－」研究紀要』第５号　㈶静岡県埋蔵文化財調査研究所

渡辺　康弘　1991　『宍原砦発掘調査報告書』清水市教育委員会

渡辺　康弘・新井　正樹　2000　『東山田古窯跡群発掘調査報告書』清水市教育委員会

渡辺　康弘・大川　敬夫　1991　『高部山遺跡・尾羽廃寺発掘調査報告書』清水市教育委員会

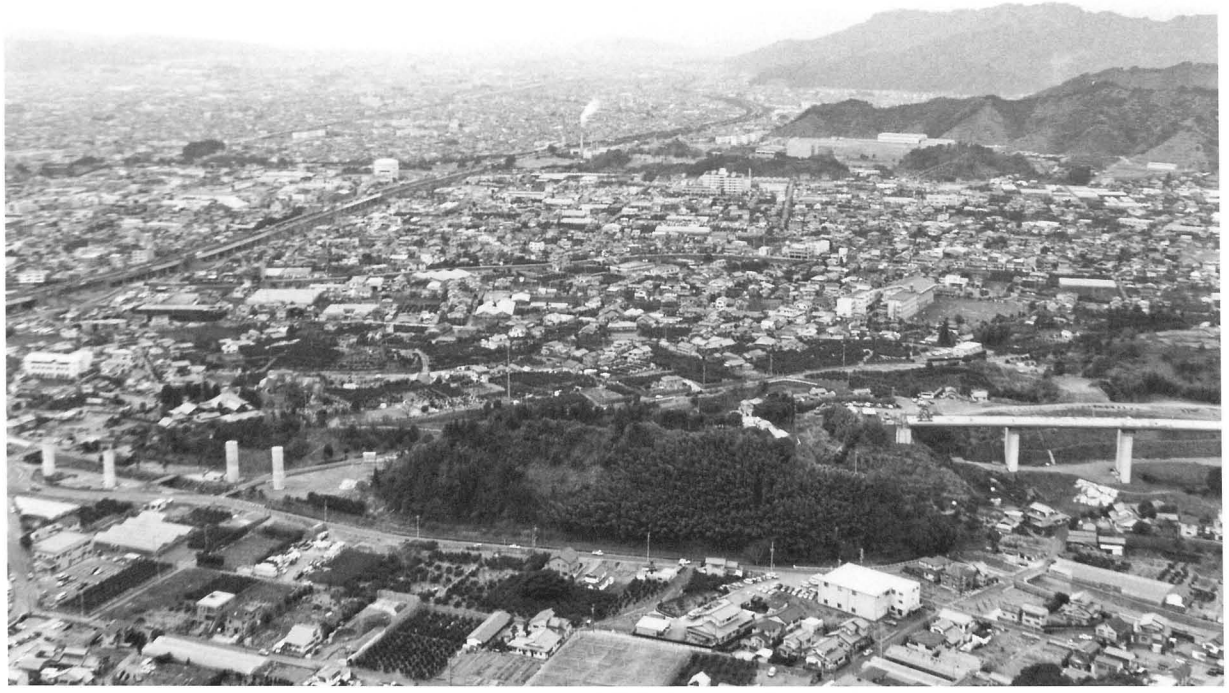
写　真　図　版

１．庵原城跡全景①（南より）

２．庵原城跡全景②（北西より）

図版２

１．庵原城跡全景③（北東より）

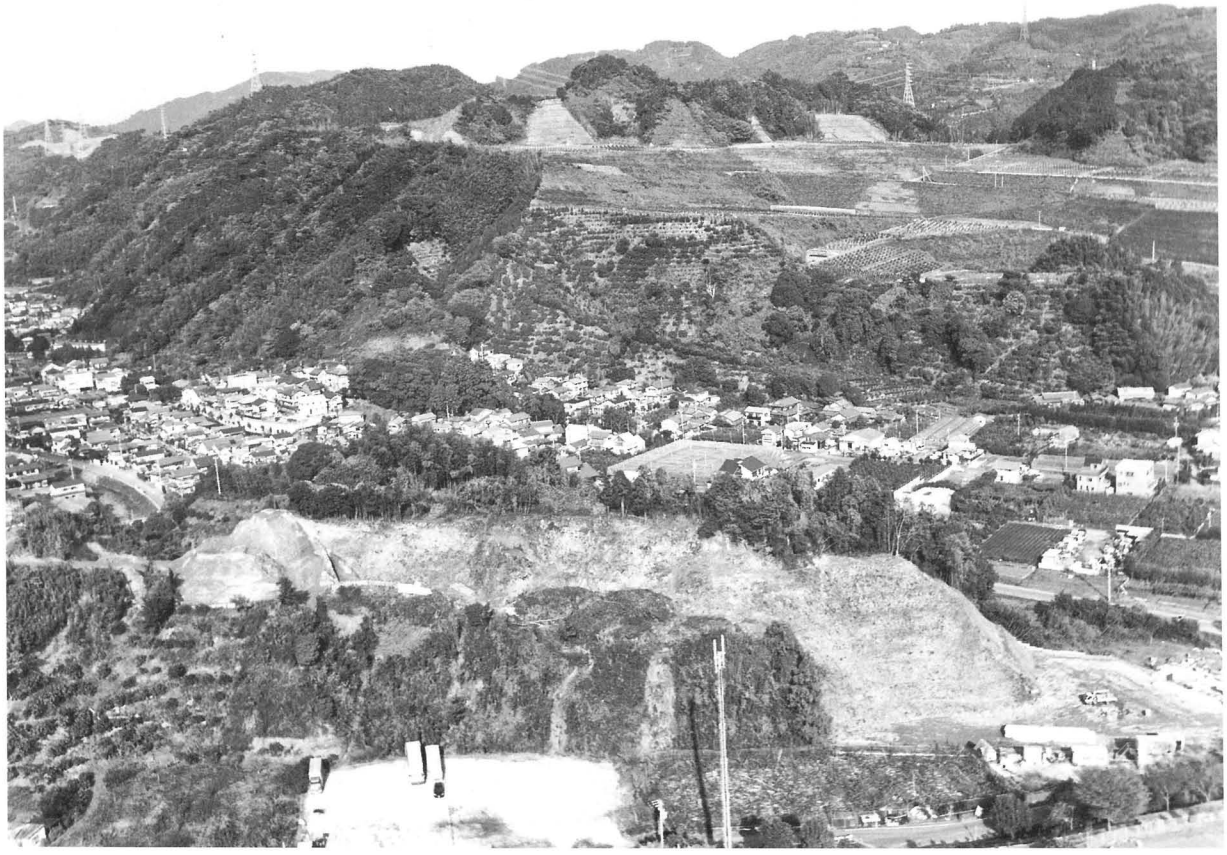


２．庵原城跡全景④（北東より）

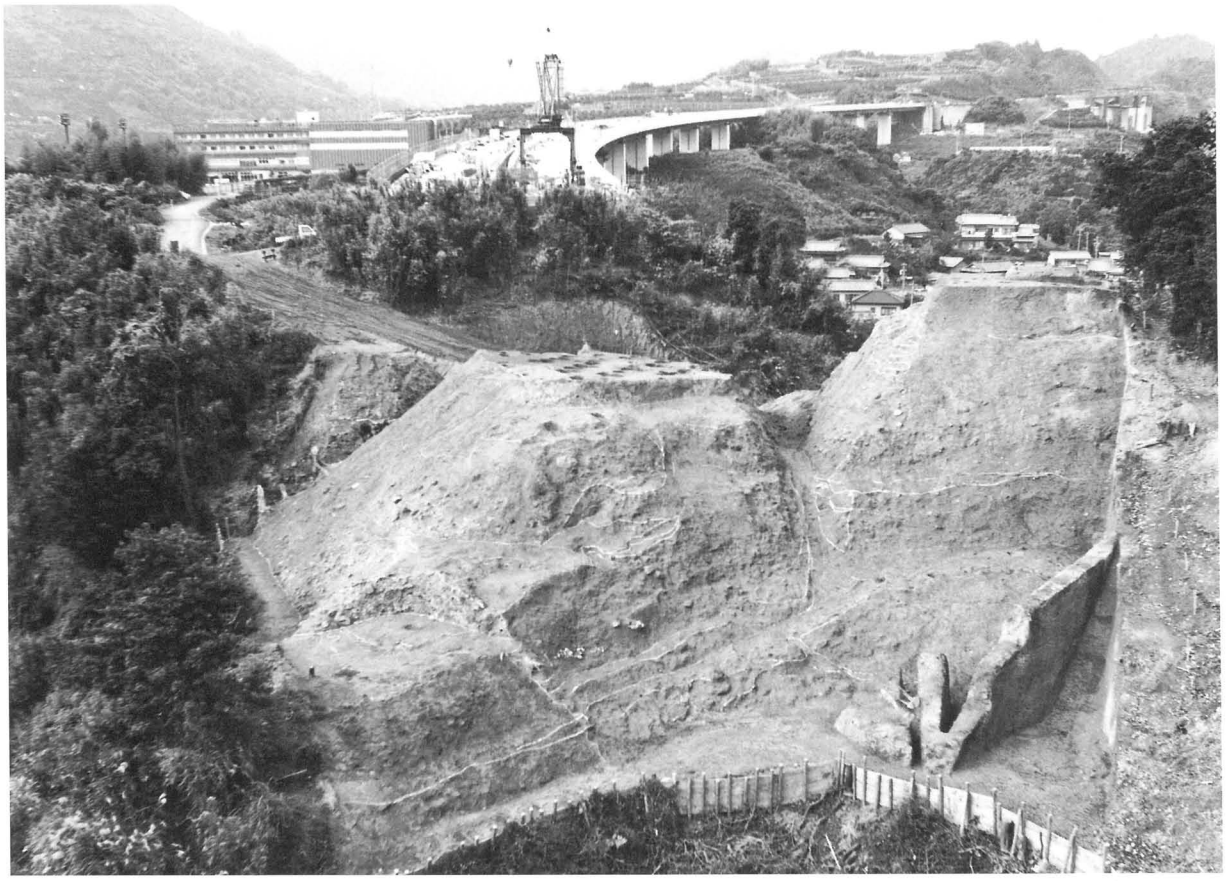
1．庵原城跡全調査区（合成写真）

図版４

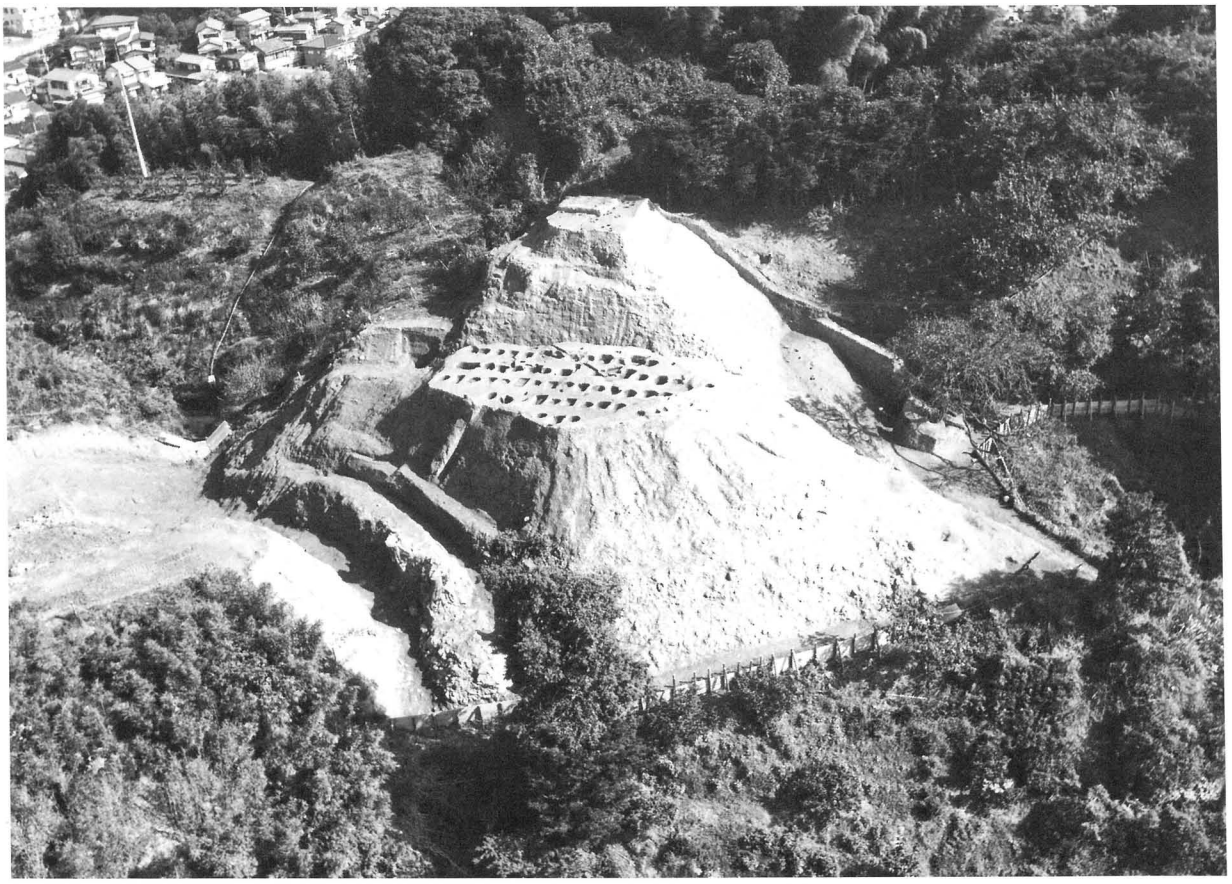
１．庵原城跡全景⑤（南より）



２．庵原城跡全景⑥（南西より）



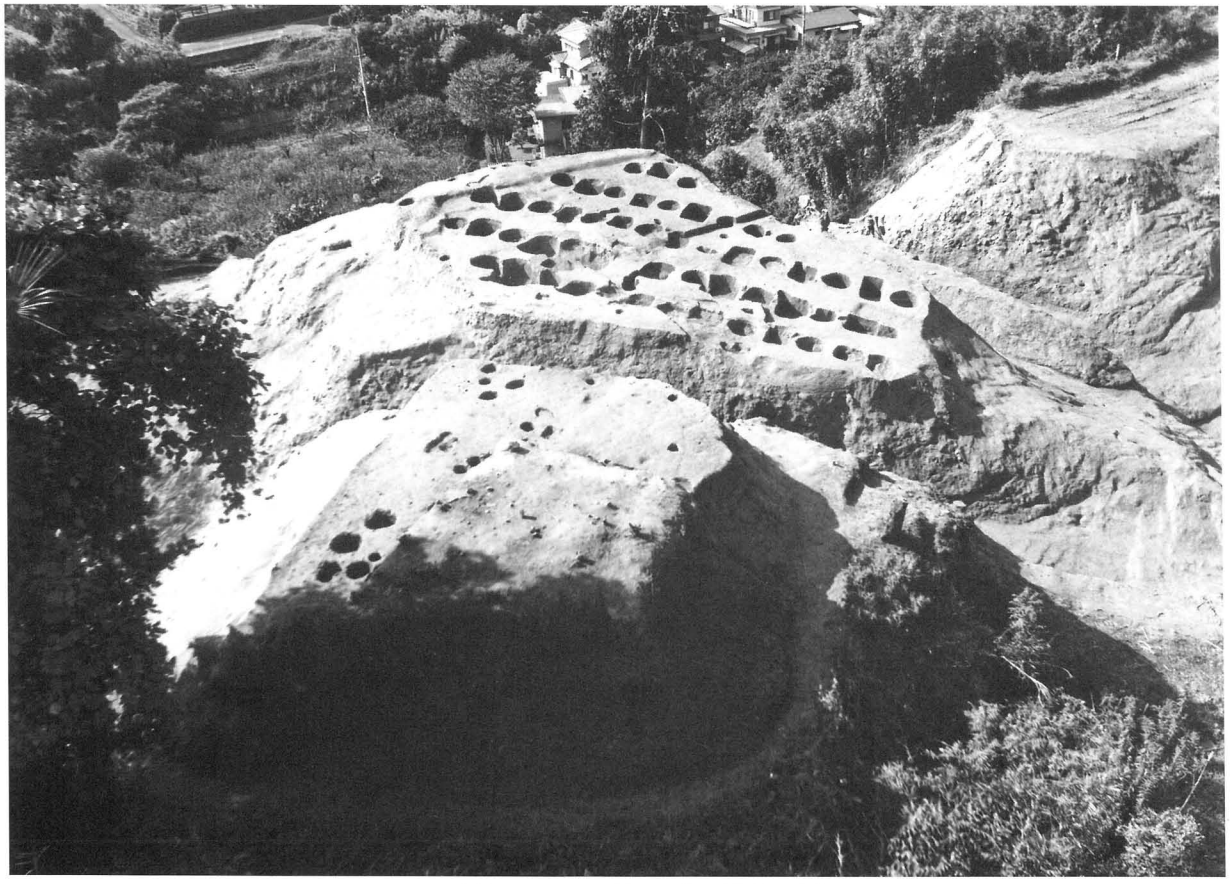
１．曲輪17～18、堀切２（南より）



２．曲輪16～18、堀切１①（西より）

図版6

1．曲輪16～18、堀切1②（北西より）



2．曲輪16～18、堀切1③（北東より）

１．曲輪18、堀切１①（北東より）

２．曲輪18、堀切１②（南西より）

図版８

１．曲輪17①（北東より）

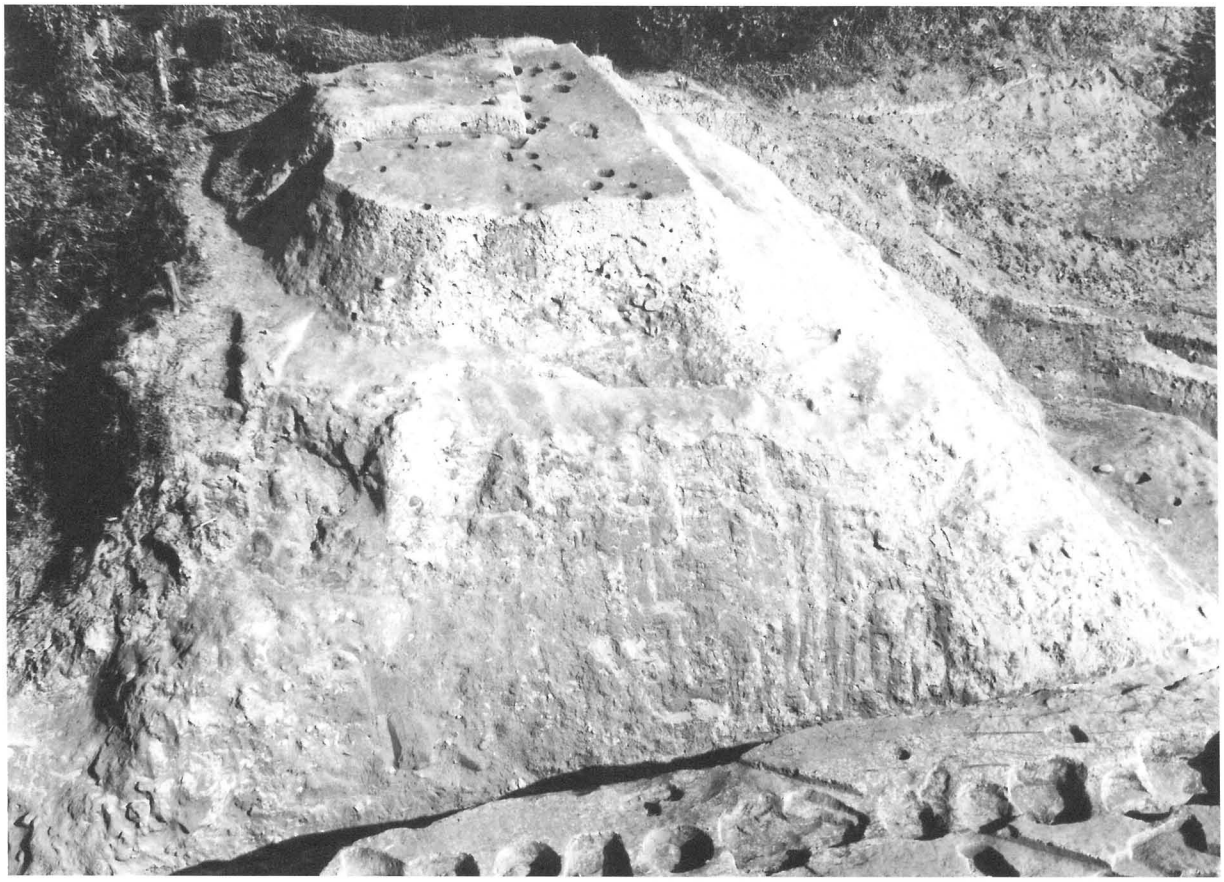
２．曲輪17②（西より）

１．堀切２①（南東より）

２．堀切２②（北西より）

３．堀切２土層（北より）

図版10



1．曲輪16①（西より）

2．曲輪16②（真上より）

1．曲輪6・10、竪堀3①（西より）

2．曲輪6・10、竪堀3②（北西より）

図版12

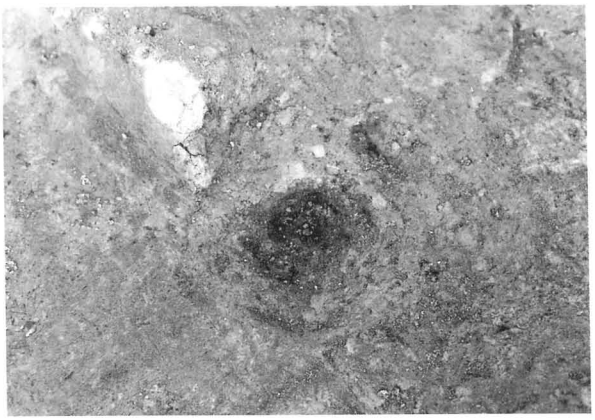
1．竪堀3（南西より）

2．竪堀3土層（南西より）

1．曲輪6（西より）

2．曲輪6・10（真上より）

3．曲輪6検出柱穴列（南西より）

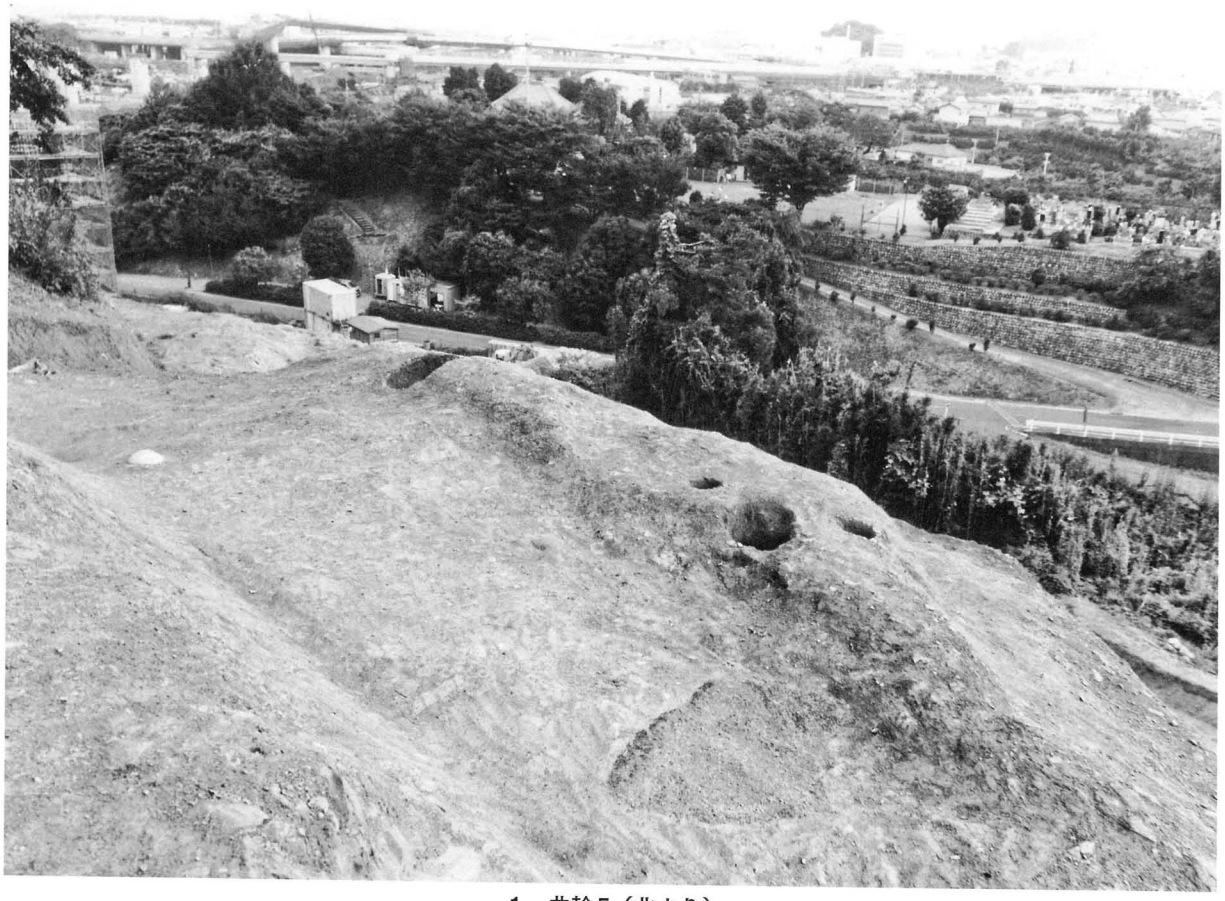


4．曲輪6検出炭化柱根（真上より）

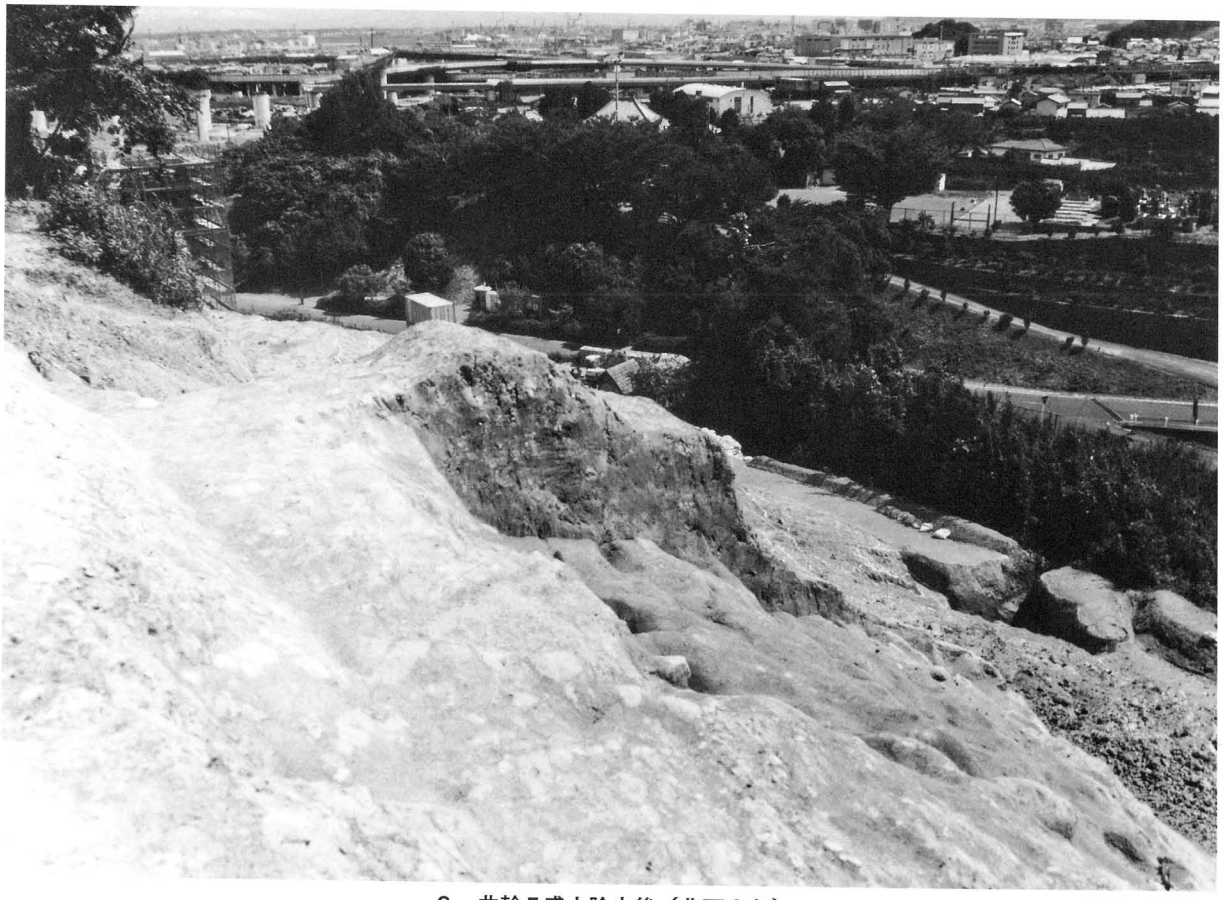
図版14

1．曲輪5・8、竪堀1・2①（西より）

2．曲輪5・8、竪堀1・2②（南より）



1．曲輪5（北より）



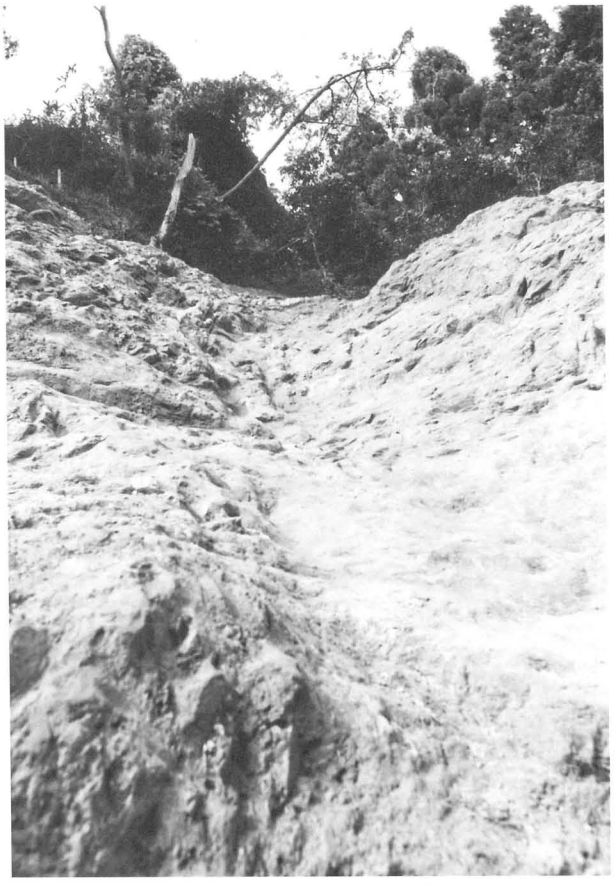
2．曲輪5盛土除去後（北西より）

図版16

1．曲輪8、竪堀2（西より）

2．曲輪8（北西より）

1．竪堀1①（南より）



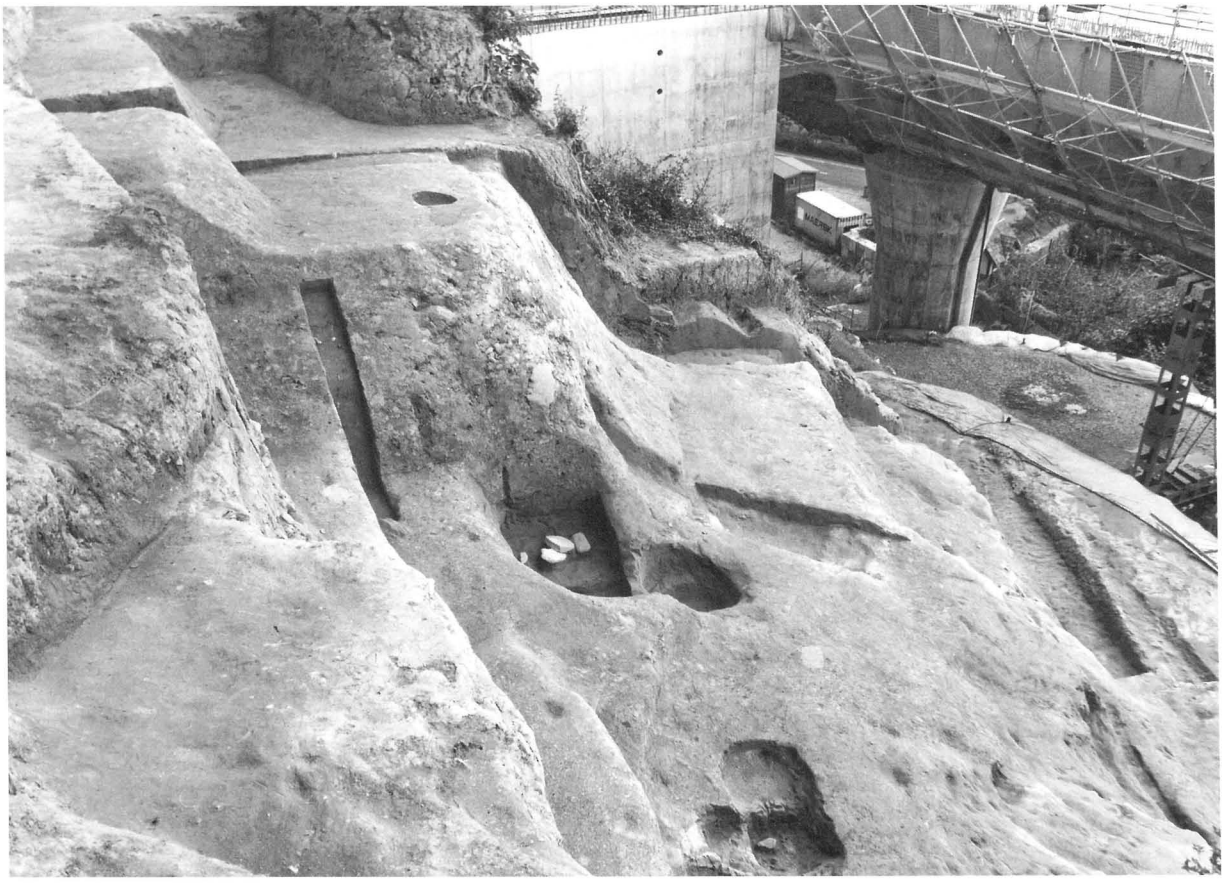
2．竪堀1②（真下より）

3．竪堀1上端部（北より）

図版18

1．曲輪3・虎口①（西より）

2．曲輪3・虎口②（南西より）



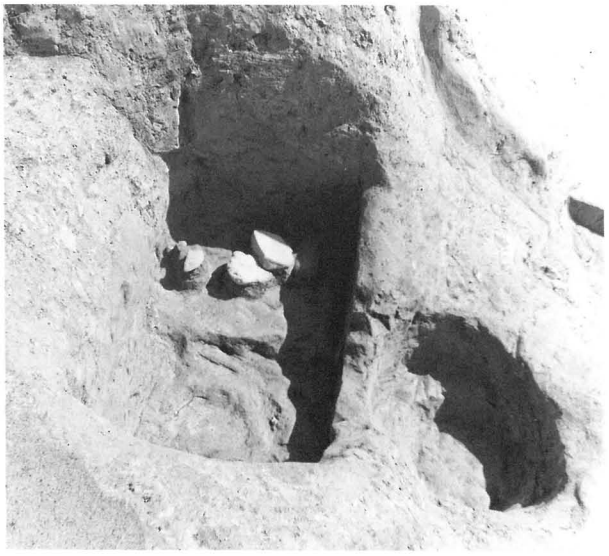
1．曲輪3・虎口③（北西より）

2．曲輪3・虎口④（南より）

図版20

1．曲輪3土層（北西より）

2．虎口付近土層（南西より）



3．SF1・2（西より）

4．SF3・4、SP1（東より）

かわらけ集合写真

灯明皿（かわらけ）

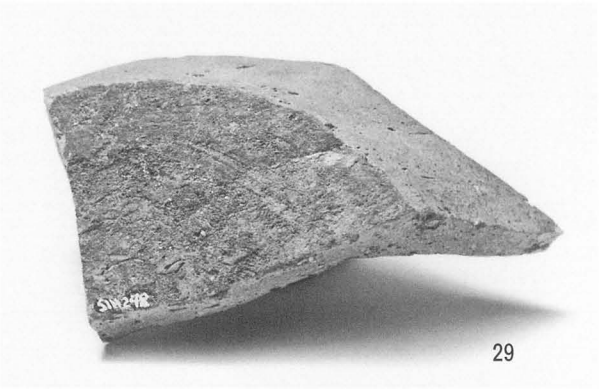
鉄釉袴腰形香炉（古志戸呂）

灰釉袴腰形香炉（古瀬戸）

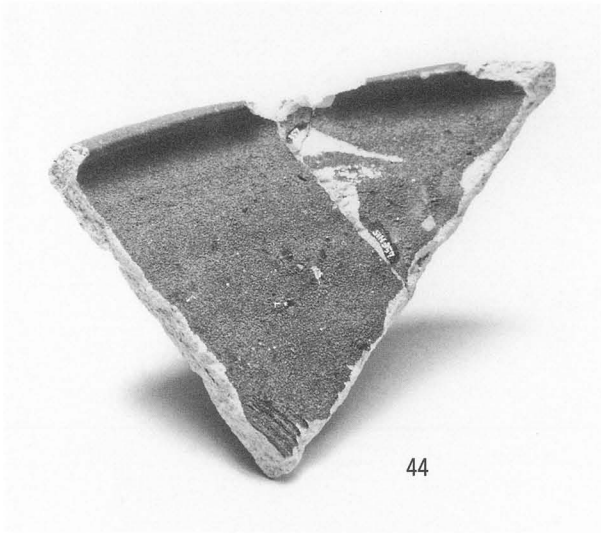
15　灰釉縁釉小皿（古瀬戸）

図版22

擂鉢（常滑）



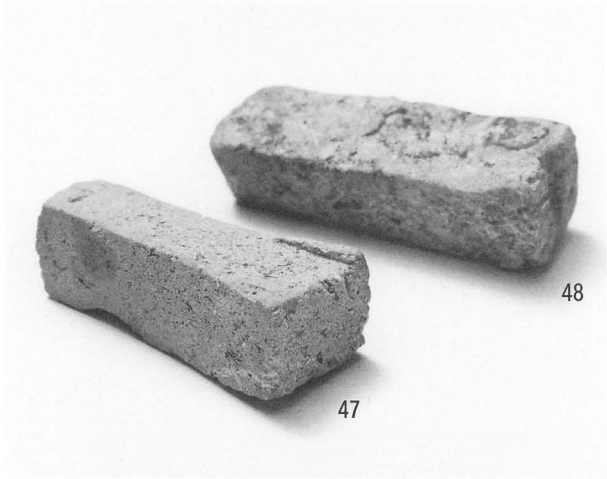
茶壺（信楽）



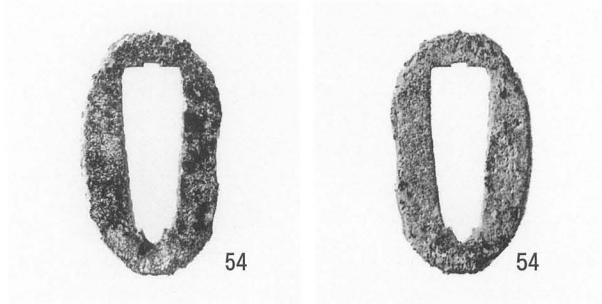
擂鉢（古瀬戸）

白磁皿（高台内に墨書）

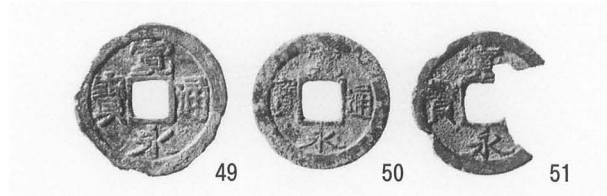
用途不明鉄製品

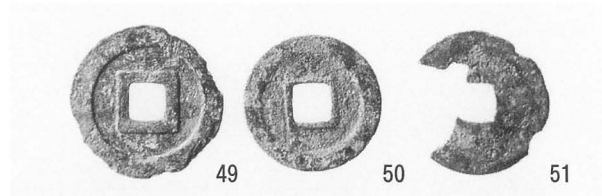


砥石



切羽





銅銭（左：表面　右：裏面）

報告書抄録

ふりがな	いはらじょうあと
書名	庵原城跡
副書名	第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ名	静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告
シリーズ番号	第225集
編著者名	北野寿一・勝又直人・井鍋誉之（編集）
編集機関	財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所
所在地	〒422－8002　静岡県静岡市駿河区谷田23－20　℡054－262－4261（代表）
発行年月日	西暦2010年7月30日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町	遺跡番号					
庵原城跡 （庵原山城跡）	静岡県静岡市 清水区 草ヶ谷	22201	38	35° 3′ 9″	138° 29′ 6″	200512～ 200708 200907～ 200910	4,051㎡	第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査

所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
庵原城跡	散布地	縄文時代		縄文土器	
		古墳時代		須恵器	
		平安時代		灰釉陶器	
		鎌倉時代		青磁碗・白磁皿	
	城跡	室町時代	曲輪・竪堀・堀切 掘立柱建物	かわらけ・甕・擂鉢・片口鉢・平碗・天目茶碗・縁釉小皿・青磁碗・白磁碗・染付碗	15世紀中葉から15世紀後半の古瀬戸製品
	散布地	江戸時代		擂鉢・灯明具・碗・砥石・寛永通寶	

要約

庵原城の築造年代は不明であるが、駿河国の国人領主で、今川氏の重臣であった庵原氏の山城と考えられている。城全体は丘陵部に主要な曲輪を形成し、周囲に段状の小規模な曲輪を配置した比較的単純な構造といえる。調査の結果、曲輪・竪堀・堀切・虎口を確認し、曲輪５・６・16では掘立柱建物、柵等を検出した。庵原城では二重堀切、２条に掘削された竪堀、虎口が検出されたことから永禄11年以降、武田氏傘下の朝比奈氏により改修された可能性が高い。

遺物はかわらけ・貿易陶磁・国産陶器で構成される。かわらけが主体を占め、古瀬戸後期様式のⅣ期古～新段階の製品が認められる。

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告　第225集

庵　原　城　跡

平成22年７月30日

編集発行　財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所
〒422-8002　静岡県静岡市駿河区谷田23－20
TEL　054－262－4261㈹
FAX　054－262－4266
印 刷 所　みどり美術印刷株式会社
〒410-0058　沼津市沼北町２丁目16番19号
TEL　055－921－1839㈹

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告　第225集

庵　原　城　跡

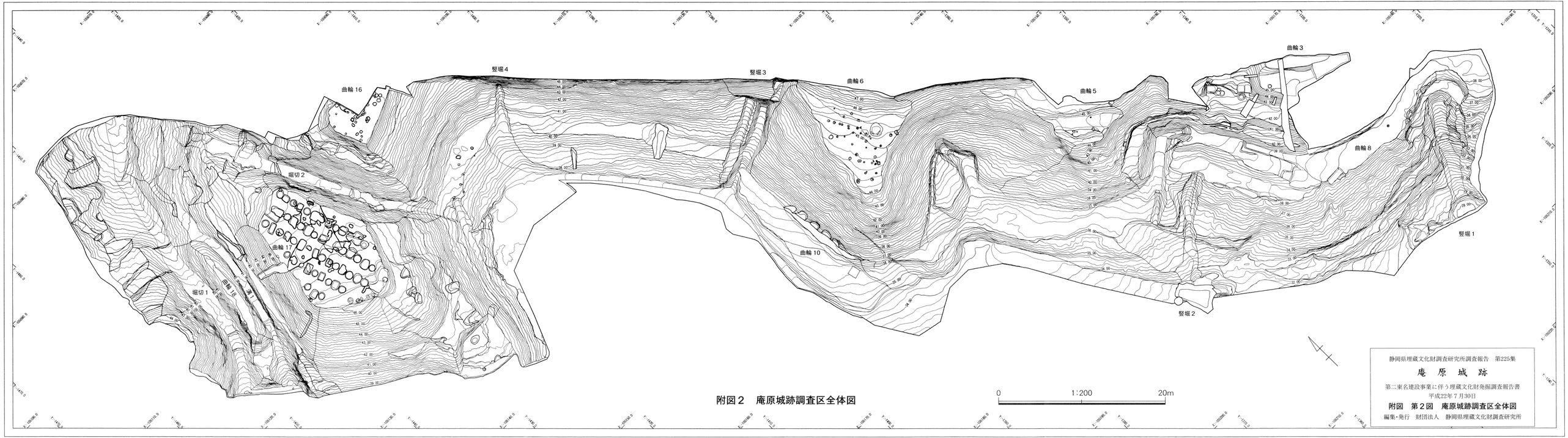
第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

平成22年７月30日

附図　第１図　庵原城跡地形測量図

編集・発行　財団法人　静岡県埋蔵文化財調査研究所

附図１　庵原城跡地形測量図



附図２　庵原城跡調査区全体図

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告　第225集

庵　原　城　跡

第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

平成22年７月30日

附図　第２図　庵原城跡調査区全体図

編集・発行　財団法人　静岡県埋蔵文化財調査研究所